武右衛。　あれから姫路のお城を出まして、所々方々をさまよひあるいて居りますうちに、今度この高松の城が水攻めになりますので、土俵を積んだり、竹や材木を運ぶために、澤山の人夫どもが要るとうけたまはりまして、わたくしもお願ひ申してその人夫の數に加へてはいただき、毎日御用を勤めてをります。

秀吉。　小坂部はどうした。

武右衛。　どうなされたか存じませぬ。おまへに用のあるまでは、どこへでも勝手にゆけと仰しやりまして、あの晩からお別れ申してしまひました。

秀吉。　あの古狐め。市松の鐵砲を運よく逃れたとみえる。して、お前の孫といふ女も無事か。

武右衛。　いえ、孫めはあのまゝで死にました。

平野。　おまへの孫娘はおれ達が殺したのではない。

片桐。　あの小坂部といふ惡魔に殺されたのだ。

石川。　おれも介抱して遣らうと思つたら、惡魔めが何處へか引攫つて行つてしまつたのだ。

武右衛。　はい、はい。あゝ云ふことになりましたのも、みな孫めが惡いからでございます。決してどなたをもお恨み申しては居りませぬ。その證據には今晩も、わたくしとしては分相當の御奉公をいたしました。

秀吉。　どんな奉公をしたのだ。

増田。　あの怪しい奴は、このおやぢめが欺して釣り寄せたのださうでございます。

武右衛。　まあ、お聽きくださりませ。わたくしがあの川ばたに休んでをりますと、あの男が通りかかりまして、これから安藝の吉田の方角へは何うゆくのだと尋ねました。その樣子がどうも唯の百姓らしくみえませぬので、かう行くのが近道だと嘘を教へてこちらへ釣りよせ、みな樣方のお手をかりて召捕らせたのでございます。

秀吉。　では、おまへがあいつをだまして釣りよせて、おれの手に渡してくれたのか。いや、それは奇特のことだ。あらためて禮をいふぞ。

武右衛。　恐れ入りましてござります。

秀吉。　その褒美には何か望むものがあるか。

武右衛。　えゝ、めつさうな。この御陣にまゐつてをりますからは、そのくらゐの御奉公は當りまへのことで、御褒美を頂戴いたさうなどとは微塵も存じませぬ。唯今のお禮のおことばだけでも、冥加至極に存じてをります。

増田。　かへす〳〵も奇特の奴。（秀吉に。）では、もはや戻して遣つて宜しうございませうか。

秀吉。　（武右衛門に。）おまへはどうしても憂美はいらぬか。

武右衛。　いえ、頂戴いたしたくはございませぬ。

秀吉。　衣服をやらうか。

武右衛。　それも欲うはございませぬ。

秀吉。　（笑ふ。）どうも無慾の奴だな。それほど無慾ならば、命も欲いとは思ふまいな。

武右衛。　はい。

秀吉。　さうか。（うなづく。）それでは命を貰ふことにする、左衛門。このおやぢを外へ連れ出して……。（扇にて斬る眞似をする。）

増田。　え、成敗致すのでございますか。

秀吉。　むゝ。

増田。　（よんどころなく。）はあ。それ、立て。

武右衛。　（たち上る。）大方こんなことであらうと存じました。やれ、やれ、これでわたくしの役目も濟みました。どなたも御免くださりませ。

（武右衛門は悪びれた體もなく、増田等に引立てられて幕の外に去る。他の人々は顔をみあはせる。）

平野。　あいつ不思議な奴だ。命を取られると云ふのに平氣でゐるぞ。

片桐。　馬鹿か氣ちがひか、それとも餘ほどの勇士か。なんだか得體のわからぬ奴だな。

秀吉。　まつたく薄氣味のわるい奴だ。あんな奴は殺してしまふに限る。なにを仕出來すか判らないぞ。

石川。　殿。わたくしは俄に心持が惡くなりました。引き退つてしばらく休息いたしたう存じますが……。

秀吉。　氣分がわるければ勝手に休息しろ。

石川。　はあ。（さゝげたる太刀を平野に渡す。）

平野。　顔の色が惡いやうだ。藥でも飲んで養生しろよ。

（石川は起たうとしてよろめき、やう〳〵に奥に入る。）

秀吉。　急病でも起つたか。弱い奴だな。

（下のかたより石田三成出づ。）

小坂部姫

石田。殿。よいものが網にかゝりましたな。

秀吉。よい物とはなんだ。

石田。唯今福島から聽きました。

秀吉。あいつの面をみたか。

石田。見ました。あれは……。（云ひかけて左右をみかへる。）しばらくお人拂ひを……。

秀吉。おれもさう思つてゐたところだ。誰も彼もみな立て。

一同。はあ。

平野。わたくしも……。

秀吉。おまへも行け。

（平野は太刀をおきて起つ。片桐も起つて奥に入る。石田は庭にひかへたる雜兵等をみかへる。）

石田。おまへ達も幕の外へ出ろ。

雜兵。はあ。

（雜兵等は秀吉と石田に會釋して、上下の幕の外へ立去る。石田は縁にあがる。）

秀吉。佐吉。あいつは何といふ奴だか知つてゐるのか。

石田。はあ。あれは明智光秀の家來、藤井傳八郎といふ者でございます。なにか密書のやうなものでも所持して居りませなんだか。

秀吉。むゝ、持つてゐた。

石田。拜見はかなひませぬか。

秀吉。もう燒き捨てゝしまつた。

石田。（笑ふ。）さすがは殿、御用心のよいことでございますな。併し大抵は察して居ります。こゝらへ來る筈のない藤井めが、あのやうな姿をして通りあはせ、生捕られて首を斬られる。さては彼の明智め、藝州の毛利と諜じあはせて、謀叛の企てども致しましたか。

秀吉。（笑ふ。）その通りだ。若やそんなことになりはせぬかと思つてゐたが、光秀は氣の小さい奴、たうとう思ひ切つて暴れ出すことになつたとみえるな。

石田。毛利が同意するでございませうか。

秀吉。それはわからぬ。いづれにしても途中で彼の密使を捕へたのは仕合せであつたよ。前以てそれを知つてゐれば、こつちにも覺悟がある。いくら俺でも不意撃を食はされては些と慌てるからな。

小坂部姫

石田。彼の密使を捕へましたのは、まつたく御運の強いことでございました。

秀吉。ところが、その藤井とかいふ奴をだまして、こつちの陣所へ迷ひ込ませたのは、かた眼のおやぢだよ。それ、姫路の城にゐた……。

石田。かた眼のおやぢ……。武右衛門といふ奴でございますか。それが又どうしてこの陣中にまぎれ込んで居りましたか。（不審さうに考へる。）

秀吉。土俵を運ぶ人夫のうちに加はつてゐたさうだ。さうして、それ程の働きをしてゐながら、決して褒美はほしくないと云ふのだ。

石田。さうでございますか。まだ考へてゐる。）

秀吉。あつばれの手柄者ではあるが、又なんだか不安心な奴でもあるので、増田に云ひつけて、これも明智の使と一緒に成敗させてしまつた。

石田。なるほど、それがよいかも知れませぬ。それで、武右衛門めはおとなしく御成敗をうけましたか。

秀吉。思ひのほかに落ちついた奴で、これでおれの役目も濟んだとか云つてゐたやうであつたよ。

石田。薄氣味のわるい奴でございますな。

秀吉。それだから殺したのだ。

（二人はしばらく無言。）

秀吉。いや、そんなことは何うでもいゝとして、差當り考へなければならぬ。退だ。光秀の謀叛の企てがどれほどまでに運んでゐるか。それに依つておれ達の進退もきめなければならぬ。委細構はずに進んで毛利を擊つか。それとも上方へ引返すか。

石田。その駈引がなか〳〵むづかしいところでございます。今が大事の場合、よくお考へなさらねばなりますまい。

秀吉。む〻。

（ふたりは又無言で考へてゐる。上のかたの幕のかげにて小坂部の聲きこゆ。）

小坂部。お身達はなぜこゝにうか〳〵してゐる。今更猶豫してゐる時節ではあるまい。

石田。（聞きとがめる。）誰だ。そこで物をいふのは……。

小坂部。早くゆけ。上方へ歸れ。

石田。（緣先に出る。）はて、誰だといふに……。これへ這入れ。姿をみせろ。

秀吉。女の聲らしいな。

小坂部姫

石田。　陣中に女の居らう筈はござりませぬ。

（石田は不審さうに草鞋を穿かうとする。）

秀吉。　まあ、待て。あの聲には覺えがある。あれは姫路で聞いた小坂部の聲だ。さつきの隻眼のおやぢと云ひ、あいつ等はこゝまでも俺達に附き纏つて來たらしいぞ。

石田。　それにしても一度はあらためて見ませう。この場合、油斷がなりませぬ。

（石田は庭に降りて、先づ上のかたの幕の外をうかゞふ。）

石田。　はて、何者の姿もみえませぬ。

秀吉。　さうだらう。打つちやつて置け。こつちには色々かんがへなければならない大事があるのだ。

（今度は家の奥にて小坂部の聲きこゆ。）

小坂部。　わらはが好い智慧を授けてやるに、なぜいつまでも思案してゐるぞ。早くゆけ。早く歸れ。

石田。　（みかへる。）今度は奥できこえたやうでございますな。

秀吉。　打つちやつて置けといふに……。あんなものに化かさるゝな。

（石田はまだ不安らしく考へてゐる。奥にて再び小坂部の聲きこゆ。）

小坂部。　もう一刻も猶豫はならぬ。明智光秀は今夜いよ〳〵旗揚げして、みやこ本能寺に攻め寄せたぞ。まだ疑ふならば眼のあたりに、その夜討のありさまを見せて遣りませうぞ。

（庭のかゞりは一度に消えて、家の正面の奥には本能寺の燒くる景色が紅くみゆ。）

小坂部。　都とこゝとは遠く隔たつても、今夜のありさまはお身たちの眼さきにあり〳〵と見ゆるでないか。あれ、見よ。本能寺の伽藍は火焔につゝまれて、煙のあひだに飜へるは水色の土岐桔梗の旗……。これでもまだ明智の謀叛をうたがふか。信長も信忠もやがて滅亡、お身たちが天下を取るも取らぬも今の決心一つぢや。一生に一度の運を握つてゐながら、なぜいつまでも猶豫するぞ。早くゆけ。早く歸つて謀叛人の明智をほろぼせ。

（本能寺の幻影はたちまち消えて、庭の篝火は再び明るくなる。）

秀吉。　（瞿然として。）おれは歸ることに決めた。

石田。　お引揚げになりますか。

秀吉。　引返して明智を退治すれば、天下は自然におれの物だ。こゝで思ひ切つた大博奕を打たなければ、再び運の開ける時節はないぞ。

石田。　併しこのまゝすぐに引揚げましては、敵の追擊ちが怖ろしうございます。

秀吉。その追撃ちを受けぬやうに、先づ眼のまへの敵と和睦して、それからすぐに引揚げるのだ。さう決まつたら一刻も早いが勝だ。浅野や黒田をよびあつめて、これから奥で評議を開かう。來い。

（秀吉は起つて奥に入る。石田もあとより起たうとする時、下の方より福島正則出づ。）

福島。殿は……。

石田。唯今奥へゆかれた。

福島。先刻の怪しい奴は御指圖の通りに成敗いたした。あれは一體何者であらうな。

石田。それはあとで判る。これから奥で大事の評議がある。餘人がみだりに立寄らぬやうに、お身はこゝらを見張つてゐてくれ。

（福島うなづく。）

石田。よいか。頼んだぞ。

（石田は奥に入る。福島はあたりを見まはしてゐる。薄く雨の音。下の方より堀田左衛門出づ。）

増田。お、、福島。怪しい奴は成敗したか。

福島。む、。たつた今、首を斬つて來た。

増田。おれもあのおやぢを殺して來た。

福島。かた眼のおやぢを殺したか。

増田。なんだか可哀さうのやうでもあつたが、御指圖であるから仕方がない。川ばたへ牽き出して首を斬つてしまつた。

（奥より平野權平あわたゞしく出づ。）

平野。お、、御兩所。石川が急病で死にました。

福島。兵助が死んだ。（かんがへる。）さつきまで達者でゐたではないか。

平野。急に氣分が惡いと云ひ出して、奥へ退つてうと〳〵してゐたかと思ふと、眠り死に死んでしまひました。からだは冷え切つて、所詮助からぬとは存ずるが、兎もかくも陣中の醫者を呼んでまゐる。御めん下され。

（平野は早々に草鞋をはきて下のかたへ立ち去る。）

福島。急病とあれば是非ないものゝ、あれほど元氣のよかつた兵助が眠るやうに死んでしまふとは……なんだか不思議にも思はれるな。

増田。あのおやぢめを殺すと、兵助も不意に死んでしまふ。それにはなにか仔細がありさうだな。

（ぢつと考へる。）いや、屹と譯があるに相違ない。

（かゞり火はまた薄暗くなる。下のかたに小坂部の姿あらはる。小坂部はしづかに上のかたへ行きながら見かへる。）

小坂部。　秀吉はまだ行かぬか。

福　島。　なに……。（小坂部をみて。）おゝ、貴樣は……。

（福島は進み寄らうとするを、增田は支へる。）

小坂部。　（微笑みながら。）おまへ達の主人は果報者、やがて天下を握るであらう。（また笑つて。）さて、それからぢや。……それからぢや。

（小坂部はしづかに上のかたへ行く。かゞり火はいよ／＼暗く、その暗きがなかに小坂部の姿のみ輝いてみゆ。福島はあとを追はうとするを、增田は不安らしく遮る。うすく雨の音。）

――幕――

亞米利加の使

明治四十二年作。大正元年訂正。

大正八年十一月。帝國劇場。新歌舞伎研究會初演。

初演當時の主なる役割――ハリス（松本幸四郎）岩瀬肥後守、三浦新太郎（守田勘彌）船頭七兵衛（尾上松助）神明の佐吉（阪東村右衛門）三浦彌十郎（片岡柳藏）松山和一郎（松本錦吾）水茶屋のおまつ（松本武五郎）茶屋女お光（澤村宗之助）など。

登場人物――米國總領事ハリス。浪士堀内市之進。大川藤太。船田庄藏。神明の佐吉。茶屋の女房おまつ。茶屋の女お光。岩瀬肥後守。三浦彌十郎。その子、新太郎。小森鐵之丞。松山和一郎。船頭七兵衛。他に浪士。諸士。町人。所化。駕籠屋など。

第一幕

（一）

麻布善福寺の門前。上の方へよせて高き石段、その上に瓦屋根つきの門。門の左右は練塀にて、塀のそとに數株の柳あり。石段の下にも柳の立木、説教の立札などあり。下のかたは町家なへだてゝ麻布の高臺をみる。當時この寺は米國の假領事館に宛てられたるなり。

（安政五年六月十八日の午後。所化甲乙二人、石段の下に水を打つてゐるところへ、茶屋女お光、十八歳、日傘を持ちて出づ。）

亞米利加の使

お　光。　いつもお掃除が綺麗に出來ますね。

所化甲。　おゝ、お光どのか。えらい暑さぢやの。この寺はふだんから掃除がやかましいところへ、三月このかたアメリカの領事館とかいふものに割當てられたので、なほさら掃除のうるさいには閉口ぢやよ。

所化乙。　おまけに警固のお役の彌十郎どのが、堅い一方のお人ぢやから、少しでも怠けると、すぐにお目玉ぢや。なにしろ、毛唐人なぞは早く追攘つてしまひたいものぢやなう。

（この話の中、お光は悶かしげに寺のうちを窺ふ。）

お　光。　そのお話はあとにして、どうぞいつもの通りにお取次を……。

所化甲。　よし。よし。それは私等が心得てゐる。

所化乙。　かう見えても、わしらも粋ぢや。では、ちよつと待つてゐさつしやれ。

（所化二人は門内に入る。お光は柳の枝などなぶりながら、まち佗しげに立つ。門内より幕臣三浦新太郎、廿歳、大小、袴にて出づ。）

新太郎。　（石段の中途にて。）お光か。

お　光。　あなた、このごろは些ともお見えなさいませんね。

新太郎。　これ、しづかに物を云へ。（石段を降りる。）おやぢや同役の手前もある。かねて云ひ聞かしてある通り、たび〳〵こゝへ來てはならんよ。

お　光。　それは妾もよく知つてますが、このごろは十日も十五日もお見えなさらないんですもの……。あたしだつてどんなに氣に揉めるか知れやしません。

新太郎。　おれとても逢ひたいは山々だが、このごろは御用が忙しい。といふのは、神奈川の港をひらく一條、いよ〳〵今度はきまりさうになつたので、兎角に世間がさう〳〵しく、外人警固は些とも油斷ができぬ時節、うか〳〵出あるいてはゐられぬのだ。

お　光。　それは判つてゐますけれど……。

新太郎。　判つてゐればそれで可い。いづれ御用が片附き次第にゆつくり逢ひにも行かうから、おまへの方から無闇にたづねて來ては困る。けふは早く歸つてくれ。

お　光。　そんなに追立てないでも可いぢやありませんか。それぢやあ辛抱して待つてゐますから、御用が片附次第に、きつと來てくださいましよ。

新太郎。　むゝ。おかみさんにも宜しく云つてくれ。（行きかける。）

お　光。　あれ、あなた……。まだ話が……。

新太郎。　え〻、歸れといふのに……。わからないか。

（新太郎は振切つて門内に入る。お光はなごり惜げにあとを見送りぬたりしが、やうやく思ひ切つて去る。それと引き違へに船田庄藏、廿五六歳の浪士、鐵扇を持ちて出で、石段をのぼりて門前に立つ。）

庄藏。　たのむ。

（新太郎、再び門より出づ。）

新太郎。　どなたでござるな。

庄藏。　お手前はこの領事館をお固めの御役人か。

新太郎。　さやうでござる。

庄藏。　手前は船田庄藏と申す浪人。お見知り置きくだされい。

新太郎。　手前は三浦新太郎……。上よりの申達しでござれば、失禮ながらあれへ……。

（新太郎は石段の下へ降りよといふ。庄藏は溢々ながら一緒に降りる。）

新太郎。　さて、御用の趣は……。

庄藏。　餘の儀でもござらぬ。アメリカ領事ハリス氏に面會いたしたい。

新太郎。　折角でござるが、その儀はお斷り申す。係役人を除くのほかは、何人たりとも當館内に立入ること禁制でござる。

庄藏。　なるほど左様な噂もうけたまはつたが、それは萬一の狼藉をふせぐ用心でござらう。外人に對して、手前決して無法をはたらく者ではござらぬ。もし御疑念あらば、大小をおあづけ申しても苦しうない。なにとぞ御案内おたのみ申す。

（この問答のうちに新太郎の父彌十郎、四十五六歳の武士、門内より出づ。）

彌十郎。　いや。たとひなんと申されても、上役人よりの達しでござれば、手前ども一存の計らひはなり申さぬ。

庄藏。　それは如何にも御もつともぢやが、武士は相見たがひと申せばいくへにも御内分の……。

彌十郎。　だまらつしやい。武士に蔭ひなたはござらぬ。内分の汰沙などとは以ての外……。

庄藏。　しからばそれはそれとして、更にあらためて問ひ申さうが、このたび港をひらきて諸外國と交通いたすこと、喜ぶべきか、憂ふべきか。お手前方はいかに考へらるゝな。

彌十郎。　それは手前の知るところでござらぬ。われ〳〵は唯だ公儀指圖によつて、警固の役目相勤むる分のことでござる。

亞米利加の使

庄　藏。　お手前とても日本武士。夷狄同様の外人等に、歸服せらるゝ筈はござるまい。

彌十郎。　勿論、歸服もつかまつらぬが、唯今も申す通り、それが役目なれば是非がござらぬ。

庄　藏。　それはいくへにもお察し申す。ついては萬一お手前等の際をうかゞひ、當館内に斬り込む者がござつたらば、その時はどうなさるな。

彌十郎。　一旦警固の任にあたる以上は、たとひ外國人にもせよ、夷狄にもせよ、見殺しにする法はござらぬ。命のあらんかぎり防ぎ戰つて、飽までもその人を守るが武士の役目。萬一狼藉をはたらく者あらば、たれかれの容赦はござらぬ。江戸の武士の腕前をみせ申すぞ。

（暗殺などは決して許さぬといふこゝろにて、庄藏を睨み視る。）

庄　藏。　潔白の御心中承知いたした。この上は論は無益。不本意ながら手前はこのまゝ引取るでござらう。

彌十郎。　失禮仕つた。

（庄藏は挨拶して去る。新太郎はあとを見送る。）

新太郎。　お父様、怪しい奴でござりますな。

彌十郎。　浪士どもが昨今しきりに徘徊して、穩かならぬ樣子がみゆる。こゝ當分のあひだは、夜の目も寢ずに用心せねばなるまい。

（小森鐵之丞、廿四五歳の幕臣、人足二三人に長き旗竿を荷はせて出づ。あとより町人、職人、女子供などめづらしげに附き來る。）

鐵之丞。　唯今歸りました。

彌十郎。　おゝ、小森。旗竿は出來したか。

鐵之丞。　あまり延引しまするから、手前催促に出向いて、やう〳〵持たせてまゐりました。

新太郎。　なか〳〵長いものでござるな。

彌十郎。　ハリス氏もお待ちかねであらう。貴公等も手傳つて、早く持つて行かつしやい。

二　人。　はい。

（彌十郎先づ門内に入る。新太郎と鐵之丞は人足を指揮して、旗竿を門内にかつぎ入れしむ。）

町人一。　五月幟でも樹てやあしまいし、あんな竿をかつぎ込んで一體どうするのだらう。

町人二。　なんでも旗竿を樹てるのだといふことだが……。

（神明の佐吉、廿五六歳の巾着切、群集にまじりて出づ。）

佐　吉。　へえ、なんです。何か喧嘩でもあつたんですかえ。

町人三。　いゝえ。喧嘩ぢやあない。今この異人屋敷へ、長い旗竿をかつぎ込んだのですよ。

佐吉。　喧嘩でなけりやあ詰らねえ。だが、異人の旗なんぞは生れてから見たことがねえから、話の種に見物して行かうか。

町人四。　わたしもさう思つてゐるんだが……。あれ、あれ、門の中へあの竿を樹てた。

町人五。　なるはど斯うしてみると高いものだ。

（大勢は仰ぎ視る。）

佐吉。　えゝ、あぶねえ。さう押しちやあいけねえ。

（云ひながら、人々の烟草入れ、簪などをぬき取る。そのうちに娘一人が心づく。）

娘。　あれ……。

（娘は佐吉をとらへる。佐吉「なにをしやがる」と突き倒して一散に逃げ去る。皆々おどろきて、倒れたる娘を介抱する。）

町人一。　これ、これ、どうしたのだ。

娘。　あの人がわたしの簪を……。

町人一。　え、巾着切りか。（わが懐中をさぐりて。）やあ、大變……。わたしも紙入れを抜かれた。

町人二。　おゝ、わたしも煙草入れをやられた。こりやあ飛んだ目に逢つたな。

町人三。　あいつ等は逃げるのが素捷いから……。

町人四。　あれ、あれ、もうどこへか消えてしまつた。

町人五。　今さら追掛けても仕様があるまい。

町人一。　これも厄落しとあきらめようか。

（皆々わや〳〵云ふうちに、門内にてけ旗竿を樹て終りて、米國總領事タウンセンド、ハリス、五十四歳の溫良なる紳士、鼻下に白き髭をたくはへ、手に米國の國旗をさゝげて出づ。新太郎と鐵之丞も附添うて出づ。）

皆々。　それ、異人だ……異人だ……。

（見物の男女、漸次に加はりて、みな珍らしげにあつまり見る。）

ハリス。　皆さん、そこに居る、丁度よろしい。わたくし、日本の人に少し話したいことあります。わたくしは今、アメリカの旗をたてます。この旗……日本と軍しない限りは、いつまでも日本の土の上に立つて居ります。もし日本とアメリカと軍すれば、この旗……殘念ながら捲いて歸らねばなりません。アメリカ、日本と戰ふこと好みません。わたくしは此旗……

いつまでも……いつまでも……千年も……萬年も日本の土のうへに立つてゐることを望みます。みなさんもその積りで、この旗にむかつて永久の平和を祈つてください。わたくしも誠心をさゝげて神に祈ります。

（國旗をひろげて熱心に說く。みな鎭まりて聽きゐたりしが、この詞終るや、群集は再びどよめきて「毛唐人が怖いものか」「唐人と軍をしても負けるものか」など罵るものあり。）

新太郎。　えゝ、さわがしい。鎭まれ、鎭まれ。

（群集もやうやく靜まる。）

ハリス。　わがアメリカ合衆國は、日本國の政治や宗教や風俗や、すべてのことに就いて決して口を出すことありません。たゞ日本と交易すればよろしい。わたくしの國ではカリホルニヤ州だけでも、一年に六千萬弗の金が出ます。日本にも絹絲、茶、そのほか澤山の產物あります。それを兩方で交易する、日本の人は金持になります。アメリカの人も喜びます。つまりは、兩方の人、幸福あります。わかりましたか。

（群衆はまた騷ぎて「毛唐人め、うそをつくな。」「交易なんぞしない、でも困るものか。」など罵る。門內より彌十郎、手槍を引つさげて出づ。）

彌十郎。　えゝ、まだ騷ぐか。立去れ、立去れ。

（この勢ひをみて群集の人々は打驚き、やあ、あぶねえ。逃げろ、逃げろ。と一度にくづれて逃げ去る。彌十郎は新太郎等を見かへる。）

彌十郎。　かやうな場合に、たゞ見物して居つてはいかぬ。多人數寄りあつまつて居るうちには、どのやうな狼藉者が紛れ込んで居るまいものでもない。嚇して追攘ふが一番無事だ。

ハリス。　わたくし云ふこと、あの人たち判りませんか。

（三人顏をみあはせて默す。）

ハリス。　判りませんか。（嘆息して。）政府の役人、判りましたが、人民まだ判りません。政府の役人さぞ心配ありませう。わたくし察して居ります。（更に國旗を見て、慨然。）わたくしアメリカの使……遠い海を渡つて日本へ來ました。わたくし重大の職務を帶びてをります。どのやうな難儀しても、きつと……屹と……この國を開かねばなりません。これは日本のためです、アメリカの爲です。世界のためです。神はかならず我々の正しい仕事を成就さしてくださるに相違ありません。

（ハリスは辭色いよ〳〵熱して、思はず天を仰ぐ。）

ハリス。　オー神……我等を惠め。

（ハリスは地にひざまづきて禱る。）

船田庄藏、やなぎの小蔭より窺ひ出で、不意はハリスに、斬り付けんとす。）

新太郎。　狼藉者……。

（飛びかゝつて組み付くを、庄藏は振拂つて進まんとす。双方格闘、庄藏は遂に組みふせらる。鐵之丞も寄合うて、刀の下緒をときて庄藏を縛む。）

彌十郎。　おゝ、これは先刻、ハリス氏に面會を求めにまゐつた浪人だ。

新太郎。　どうやら胡亂と存じたが、果してこの始末。あぶないことでございました。

鐵之丞。　して、これは町奉行所へ引渡しませうか。

ハリス。　いや、いや、縛ることよろしくない。わたくし其人赦します。

新太郎。　でも、このまゝ赦しましては……。

ハリス。　其人とわたくしとは考へが違ふだけで、その人も日本の愛國者あります。尊い人あります。唯、考へが悪い。どこの國にもさういふ人あります。わたくし決して其人憎みません。繩を解くことよろしい。

（新太郎は是非なく繩をとく。庄藏は首をたれて物云はず。松山和一郎は通辭の役、供かつれて出づ。）

和一郎。　ハリス氏、これに居られましたか。

ハリス。　おゝ。松山さん。なに御用ですか。

和一郎。　大老、貴下に御面談つかまつり度。今夕六つ時に登城相成るやうとのことにございます。

ハリス。　わたくし、それ待つて居りました。（懐中時計を視る。）ゆふ六つ……六時ですな。わたくしすぐまゐります。待つてください。

（ハリス忙がはしく門内に入る。庄藏はかくと聽くや、にはかに起つて走り去る。）

和一郎。　あの者は……。

彌十郎。　唯今ハリス氏に斬り掛けんといたしたを、これなる小森等が取りおさへたのでござる。

新太郎。　奉行所へ引渡さうとは存じたれど、ハリス氏のお詞ゆゑ放してつかはしました。

和一郎。　油斷のならぬことでござるなう。

彌十郎。　小森……。

鐵之丞。　はい。

亞米利加の使

彌十郎。　新太郎。

新太郎。　はい。

彌十郎。　今夕の登城も、歸りはおほかた夜に入るであらう。わしは留守居の役、ふたりはお供の役、道中の警固に氣を注けねばならぬぞ。

新太郎。　ハリス氏はやはり騎馬でござりませうか。

和一郎。　なにぶんにも油斷のならぬ時節、馬の上では却つて人の目にたつ虞がある。少々窮屈でも駕籠でまゐられては如何と、ハリス氏に傳へられい。

新太郎。　はい。（門内に入る。）

彌十郎。　なにさま駕籠が無事でござらう。用心の上にも用心が肝要でござる。

（二）

愛宕山の茶店。二重屋體にて、軒に暖簾、提灯などをかけ、納め手拭などをあまた懸けたり。店さきには床几二三脚をおく。家の左右には大樹聳えて、樹の間より品川の海遠くみゆ。

（前とおなじ日のゆふぐれ。動に出でたる町人二人、床几にやすみゐる。茶屋女お光、團扇を持ちて立つ。）

町人一。　どうもお互ひにひどい目に逢つたね。

町人二。　あんまり間抜けでお話にもならない。

お光。　みなさん、どうかなすつたのですか。

町人一。　麻布の善福寺で、異人が旗を樹てるのを見てゐるうちに、わたしは紙入れ、この男は烟草入れをやられたのさ。

お光。　それは飛んだ御災難でございましたね。わたくしもさつき善福寺へまゐりましたが……。

町人二。　それからあとのことでございませう。

町人一。　なに、つまりはこつちがぼんやりして居るからのことさ。時にもうそろ〳〵出掛けようぢやあないか。

町人二。　それがよからう。（懷中をさぐりて。）あゝ、わたしは今の一件で一文無しだ。

お光。　はゝゝゝ。（紙入れより小錢を取り出して。）ねえさん、お茶代はこゝへ置くよ。

町人一。　どうもおかまひ申しませんで……。毎度ありがたうございます。

（二人は起つて行きかゝる。神明の佐吉出づ。二人は擦れ違ひながら佐吉の顏をすかし視て、小

聲に云ふ。）

町人一。もし、あいつはさつきの巾着切ですぜ。

町人二。むゝ。あいつに違ひない。

（さゝやき合ひて、二人は足早に去る。佐吉はかくさも知らず、床几に腰を下す。）

佐吉。どうだ、妹。べらぼうに暑いな。

お光。おや、兄さん……。（顔をそむけてゐる。）

（佐吉は腰さげの烟草入れを取りて、烟草をくゆらす。）

佐吉。おい、おい、なにもそんなに不人相な面をしてゐることはねえ。兄さんに早く茶でも麥湯でも汲んで來い。えゝ、ひどい藪つ蚊だ。ついでに團扇を貸してくれ。

（お光は麥湯と團扇を持つて出づ。）

佐吉。手前が忌な面をしてゐるのは、又いつもの無心だと思ふのだらうが、おれも然う、いつもいつもピイ〳〵風車でゐるんぢやあねえ。おい、白粉代がなけりやあ一歩や二歩は貸してやらうか。

（お竹、これもおなじく茶屋女、蠟燭數本を持ちて奥より出づ。）

お竹。おや、佐吉さん。大層景氣が好いことね。

佐吉。景氣は上々だ。なにか奢らうか。

（お竹はお光と共に、軒提灯に蠟燭の火を入れる。）

お竹。お話だけぢやあうつかりお禮は云はれませんね。

佐吉。おれだつて嘘ばつかり吐くものか。そのうちに好い目が出りやあ大盤振舞だ。まあ、あてにしねえで待つてゐねえ。あはゝゝゝゝ。（云ひつゝ團扇をばさ〳〵と遣ふはずみに、懐中より別の烟草入れを落す。）

お竹。あら、煙草入れが落ちましたよ。

お光。おや、おまへは煙草入れを二つ持つてゐるの。

佐吉。え、なに、さうぢやあねえ。こゝ、こりやあ人のあづかり物だ。

（佐吉はあわてゝ拾ひあげて懐中に捻ぢ込む。お光とお竹とは顔をみあはせてゐる。堀内市之進、三十二三歳の浪士。大川藤太、廿四五歳の浪士。大小、袴にて出づ。）

お光。いらつしやいまし。

お竹。お掛けなさいまし。

亞米利加の使

佐吉。　どれ、そこらを一廻りして來ようか。お竹さん、また歸りに寄るぜ。

（市之進等は床几にかゝる。佐吉は起ちあがる。）

お竹。　待つてゐますよ。

佐吉。　あんまりさうでもあるめえ。

（佐吉は樹の間をくゞりて去る。市之進等は麥湯を飲みゐる。店の奥より主婦のおます、三十二三歳の粋な年増、團扇を持ちて出づ。）

おます。　みなさん、いらつしやいまし。きびしいお暑さでございます。

市之進。　おゝ、女房か。毎度厄介になるな。

おます。　どう致しまして……。毎度御贔屓にあづかりまして、ありがたう存じます。

藤太。　相變らず繁昌するか。

おます。　お庇さまでどうにか斯うにか遣つて居りますが、此頃はなんだか世間がさう〳〵しいので、夜分はお涼みのお客樣などは頓とございません。

市之進。　世間がさう〳〵しいと云ふのは、港をひらく一件であらう。上役人の心得方がよくないに依つて、下々までが難澁いたす。實に慨かはしいことだ。

おます。　港を開くと云ふのが、なぜそんなに惡いんでございませうね。

藤太。　なぜと云つて、知れたことだ。外國の奴儕などと交際するのは、わが日本國の恥辱ではないか。

おます。　だつて、和蘭人や朝鮮人はむかしから附合つてゐるぢやありませんか。和蘭だつて、アメリカだつて、人間にかはりは無いんでせう。それも向うから喧嘩を吹つかけて來たと云ふぢやあなし、つまりが港を開いて交易とかをすれば可いんでせう。

藤太。　いや、それが惡いと云ふのだ。

おます。　なぜ惡いんですかねえ。わたくしどもはこんな人間ですから、なんにも理窟はわからないんですけれども、もし此方で不承知を云へば、軍になるんだと云ふぢやございませんか。アメリカばかりならまだしも、若し世界中が一緒になつて攻めて來たらば……。

藤太。　馬鹿をいふな。神州男兒がかれらに負けてたまるものか。

おます。　そりや勝ちませうさ。よしんば此方が勝つたにしたところで、人死も澤山出來ませう。またしてその軍が五年も十年もつゞいたら、まあどうでせう。天保の大饑饉でさへあの騒ぎですもの、今度は日本中がひつくりかへるやうな大騒ぎになりませう。そこを見ぬいておだ

やかに事を濟ませようと云ふお役人樣方はお目が高いと思ひますね。それを傍からかれこれと口を出すもんだから、世間が自然さう〳〵しいので……。

市之進。　え〻、やかましい。だまれ、默れ。大川、貴公もこんな者を相手にするな。天下の大事がこいつ等にわかるものか。分にも應ぜぬことをべら〳〵しやべる女だ。引込んでゐろ。

おます。　はい、はい。お氣に障りましたら、どうぞ御勘辨くださいまし。

市之進。　え〻、行け、ゆけ。

（おますは會釋して起ちながら、ひとり語。）

おます。　大小をさしてゐる方々でさへ、あんな判らないことを云つておいでになるんだから、お上でも御心配なさる筈だ。

市之進。　（聞き咎める。）これ、わからぬことを云ふとはなんだ。武士に對して無禮を申すな。

藤太。　こいつ一體怪しからん奴だ。ぐづ〳〵云ふと、もう容赦はせぬぞ。

（鐵扇を把直して起ちかゝれば、お光とお竹はおどろきて遮り、二人に詫びつゝ、おますを奥へ連込む。）

市之進。　こんなところに居つても面白くない。もう行かうか。

藤太。　む〻。

（二人起ちあがる時、船田庄藏出づ。先刻の格闘にて髪も衣紋もさん〳〵に亂れたり。）

市之進。　お〻、船田か。その體裁はどうしたのだ。

藤太。　まあ、こゝへかけろ。醉うて喧嘩でもしたのか。

庄藏。　いや、喧嘩でない。實は……。

（庄藏はあたりを見かへりて囁けば、市之進等はうなづく。）

市之進。　む〻、仕損じたか……。殘念であつたなう。

（三人相見て嘆息す。）

市之進。　しかし一度や二度の失敗に勇氣を挫いては駄目だぞ。全體貴公が遍まるからいかん。われわれ同志の者を出しぬいて、不意に一騎がけの功名などを企てるから、右のごとき不覺を取るのだ。

庄藏。　いや、一言もない、恐れ入つた。その代りに、手前圖らず聞込んだことがある。ハリスは今夜登城するぞ。

藤太。　では、開港談判もいよ〳〵迫つて來たか。

市之進。　噂の通り、兩三日のうちには條約調印の運びにならうも知れぬぞ。もうわれ〳〵も手を束ねては居られぬ。ハリスが城から歸る途中をまち受けて……いつそ今夜殺るかな。

庄　藏。　赤羽近所……赤羽橋あたりかな。

市之進。　先づあの邊であらうよ。船田のはなしの樣子では、警衛の武士には相當の手利きが附いて居るらしいから、こつちでも十分に支度せねばなるまい。

藤　太。　なに、警固の武士の五人三人、不意に押取り籠めて、片つ端から斬倒すまでのことだ。

市之進。　これ、靜にせい。（制して。）なにしろ、これからすぐに立歸つて、同志の面々とも評議いたさう。

（紙入れより錢を出して茶代を置く。みな〳〵空を仰ぐ。）

庄　藏。　どうやら陰つてまるつた。

藤　太。　けふは餘りに蒸したから、ざつと來るかも知れぬぞ。

市之進。　むゝ、雨もよからう。雨ふつて地かたまるといふ喩もある。血の雨をふらさねば世は固まるまい。

三　人。　はゝゝゝゝ。

（三人打連れて去る。奥よりおさす出づ。あとよりお光も出で、彼の三人のうしろ影を見送る。）

お　光。　おかみさん。あの人たちの相談は……。

おます。　麻布にゐる異人さんが、今夜お城から歸るところを、赤羽の橋のあたりに待つてゐて、闇撃にでもする相談らしいよ。

お　光。　え、異人さんを闇撃に……。さうなつたら警固のお侍達も、一緒に斬られやしませんかね。

おます。　さあ、それは何とも云へないね。

お　光。　そんなことになつて、もしや三浦樣が……。おかみさん、どうしたらようござんせうねえ。

（お光はうろ〳〵する。）

おます。　お前が案じるのも無理はないが、なにを云ふにもお武家同士のこと……。あたし達はいくら氣ばかり勝つてゐても、こんな時にはどうにも仕樣がない。困つたものだねえ。

お　光。　でも、あの方にもしもの事があつたら、妾……あたしは何うしませう。

（お光は心配して兎つ逐ひつ、やがて弛みし帶をしめ直して走りゆかんとす。）

おます。　お前、まあどこへ行くんだよ。

お　光。　これから麻布へかけ付けて、このことをお知らせ申すよりほかはない。

おます。だつて、あのお侍達が先廻りをしてゐるんだもの、うつかり行つたつて仕様がないよ。

（木かげより佐吉出づ。）

佐吉。おい、おい、妹。つまらねえ事をしちやあいけねえ。おかみさんの云ふ通り、あの手合がもうすつかり網を張つてゐるんだ。そんなところへ無闇に飛んで行つて、傍杖でも喰つちやあ馬鹿々々しい。止せ、よせ。

お光。いゝえ、あたしは死んでも……殺されても……。

佐吉。殺されて詰るものか。まあ、待てといふのに……。

おます。まあ、お待ちよ。（止める。）

（お光は狂氣のごとく、振切つてゆかんとするを、おますと佐吉は遮りて爭ふ。この間着の最中に、以前の町人一人が先にたち、手先二人出づ。町人は佐吉を指さして「あれでございます」と云ふ。手先はつか〳〵寄つて、佐吉を圍む。）

手先。御用だ。

佐吉。え。（おどろき逃げんとす。）

手先。えゝ、神妙にしろ。

（手先は佐吉の前後をとりまく。おますはこの騒ぎにおどろきて、思はず手を弛むるひまに、お光は振切つて一散に走り去る。佐吉は手先を相手に揉闘。いづれも隙をみて走り去る。手先はつゞいて追ひゆく。おますは呆れてあとを見送る。芝山内の暮の鐘きこゆ。一旦、幕を閉ぢてすぐに明ける。）

（三）

赤羽橋の袂。上のかたに木橋あり。川に沿うて柳をうゑ、川をへだてゝ芝山内の森をみる。前とおなじ夜、陰りて遠雷の聲きこゆ。

（神明の佐吉、旅姿にて橋をわたりて出づ。向うよりお光走り出づ。くちがりにて双方ゆき當る。）

佐吉。えゝ、あぶねえ。氣をつけろ。

お光。さう云ふのは、兄さんぢやあないかえ。

佐吉。むゝ、妹が。たうとう駈け出して來たな。

お光。それがいけないの。一生懸命に駈けて來たんだけれども、みんなはもう疾うにお城へ行つたあとで、間に合はないのよ。あたし口惜くつて……。だから、引返してお城の方へ……。

佐吉。　ばかを云へ。女なんぞが無闇に駈付けたつて、なんでお城へ這入れるものか。よせ、よせ。

お光。　ぢやあ、兄さん。おまへも一緒に……。

佐吉。　えゝ、途方もねえ、まつぴら御免だ。こつちはそれどころぢやねえ、自分のからだに火が着かうといふ騒ぎだ。もう江戸にもうか〳〵しちやあゐられねえから、ほとぼりの冷めるまで神奈川へ引込んで、叔父の厄介になるつもりだ。こんなことを云つてゐるうちも油斷ができねえ。

（佐吉はゆきかゝるを、お光縋る。）

お光。　ぢやあ、おまへは神奈川の叔父さんのところへ……。

佐吉。　むゝ、達者でゐろよ。

（佐吉は妹をつき放して足早に去る。雷鳴きこゆ。お光は兄のあとを見送り、脚の疲れたる體にて思はずよろ〳〵となり、橋の欄干に凭りて、ほつと息をつく。）

お光。　ほんたうにどうしたら可いだらうねえ。お寺には三浦様のお父さんとか云ふ人がゐて、これからすぐに駈け付けると云つてゐたから、大抵は大丈夫だらうが……。もし途中で行き違ひにでもなつたら……。あゝ、氣が揉める……。どうしたものだらう。

（雷鳴はげしく、稻妻颯とひらめく。お光は思はず顔を掩ふ。）

お光。　あれつ。あいにくにあたしが大嫌ひの雷様が……。仕様がないねえ。

（おぼつかなげに空をみあぐれば、雷鳴いよ〳〵近きて、雨俄にふり出づ。お光は途方にくれて、柳の木かげに走り入る。ハリスをのせたる駕籠、橋をわたりて出づ。三浦新太郎、小森鐵之丞、夥の殷立を取りて前後を護衛し、雨を衝いて來る。新太郎は駕籠夫を見かへりて云ふ。）

新太郎。　生憎の俄雨だが、寺まではもう僅かだ。急げ、いそげ。

（お光は透しみて、木かげより走り出づ。）

お光。　もしやお駕籠は……。

鐵之丞。　寄るな、寄るな。何者だ。

（稻妻ひらめく。お光は新太郎を視て駈け寄る。）

お光。　おゝ、三浦様……。わたくしです、お光でございます。

新太郎。　なに、お光。……お供先だ。退け、退け。

お光。　いゝえ、大變でございますよ。浪人が大勢で、あなた方の來るのを待伏せして……。

新太郎。　浪人が待伏せをしてゐる……。

鐵之丞。　それはほんたうか。どうして知つた。

お　光。　さつきわたくしの店で相談してゐました。三浦様、あなた御油斷をなすつちやあいけませんよ。

新太郎。　それは容易ならぬこと……。おほかた畫の奴等の徒黨であらう。よし、よし、萬一かれらが切つてかゝらば、手前一人にて引き受くる。鐵之丞どのは駕籠を守護して駈け拔けられい。それ、急いでやれ。

（再び駕籠夫に命ずれば、駕籠夫はあわてゝ舁ぎ出さんとす。堀内市之進、大川藤太、船田庄藏等先に立ちて、浪士數人あらはれ出で、駕籠の前後に立ち塞がる。）

市之進。　お駕籠……待つた。

藤　太。　念のためにおたづね申す。

庄　藏。　これは米國領事ハリス氏でござらうな。

新太郎。　左様でござる。（思ひ切つていふ。）

（市之進「それっ」と下知すれば、浪士等みな拔き連れてかゝる。駕籠夫はおどろきて、駕籠をすてゝ逃げ去る。新太郎と鐵之丞は拔きあはせて防ぎ戦ひ、鐵之丞は浪士と斬結びつゝ橋をわたり去る。

雷雨いよ〳〵すさまじく、新太郎は駕籠たうしろにして奮闘し、これも敵を追ひつゝ橋を渡り去る。稲妻幾たびかひらめきて、近き森に落雷の音。駕籠の戸をあけてハリス、手に短銃を持ちて出づ。浪士一人、飛び出でゝ撃たんとすれば、ハリスは短銃を向ける。浪士は飛道具をみて少しく躊躇するところへ、三浦彌十郎、袴の股立を取り、素足にて走り出で、かくと見るより斬つてかゝり、二三合にして浪士を斬倒す。）

彌十郎。　ハリス殿お怪我はござらなんだか。（透し視る。）お光とかいふ女のしらせに依つて、とりあへずお城まで駈付けましたが、ゆき違ひと相成つて殘念でござつた。

（雷雨收りて月出づ。お光は木かげより出づ。）

彌十郎。　おゝ、お光とやら……。そこに居つたか。

ハリス。　あなたですか、教へてくれたのは……。あなた、深切な娘あります。

お　光。　三浦様はどうなすつたでせうねえ。

（お光は氣づかはしげにあたりを見かへる。岸の草むらに蟲の聲起る。鐵之丞は手負の新太郎を肩にかけて、橋をわたり來る。）

お　光。　あら、あなた……。

亞米利加の使

（お光は走り寄つて新太郎を介抱す。皆々もおどろき視る。）

ハリス。　あなた斬られましたか。

彌十郎。　こりや新太郎、心をたしかに持て。

鐵之丞。　新太郎どの。傷は淺いぞ。氣をおとすな。

お　光。　あなた、しつかりして下さいよ。あなたに怪我をさせまいと思へばこそ、あたしはさつきから何んなに氣を揉んだか知れやあしません。それだのに、こんなことになるとは……。まあ、なんといふことだらう。あなた……新太郎樣……。

新太郎。　（取縋りて泣き叫べば、新太郎はわづかに眼をみひらく。）

お　光。　お光……。

鐵之丞。　後生ですから、氣を確にしてくださいよ。

（お光は男の手を取る。新太郎はお光の手を握りしめ倒る。ハリス立寄りて、新太郎の傷をあらためる。皆々その顏を見る。ハリスは頭をふりて、もう駄目だといふ。お光は死骸を抱きて、わつと泣き伏す。）

彌十郎。　かへす〳〵も殘念なことを致したなう。

ハリス。　いや、これも武士の役目で、致方もござらぬ。日本の武士、子が死んでも泣きませんか。あなたの息子わたくしのために死にました。わたくし大層悲みます。日本が文明の國となるまでには、澤山の犧牲が要りますなあ。

（ハリス痛恨に堪へず、月を仰いで立つ。一同悵然。蟲の聲さびしく聞ゆ。）

幕

第二幕

（一）

善福寺内の一室なハリスの居間にあてたる體にて、緣側付きの二重屋體。正面の上のかたには日本風の床の間ありて、これに世界の圖をかけ、つゞいて佛畫を描きたる出入りの襖。下のかたは壁にて、これに油繪の額をかけ、軒は鸚鵡を飼ひたる籠をかけたり。疊の上には絨氈を敷きつめ、椅子、卓子等を置き、テーブルの上には草花をいけたる花瓶を据ゑたり。庭には立木しげりて、垣には朝顏の花さけり。

亞米利加の使

（六月十九日の午前。奥には木魚の音きこゆ。奥の襖をあけて、ハリスと松山和一郎出づ。ハリス椅子をすゝむれば、和一郎は會釋して座に着く。）

和一郎。くどくも申すやうでござるが、昨夜は思ひもよらざる椿事、先づ〳〵お怪我もなくて重疊でござつた。

ハリス。わたくし殺されるのは運命……仕方がありません。併しわたくし殺される、國と國との談判、大層むづかしくなります。わたくしそれを心配します。

和一郎。ごもつともでござる。昨夜の變事をうけたまはつて、城中にても一方ならぬ心痛、手前とりあへず御見舞として罷り出でましたが、やがて岩瀬肥後守殿も見えるでござらう。

（所化一人、庭口より出づ。）

所化。岩瀬肥後守どのお越しでござります。

ハリス。おゝ、これへ、これへ……。

（所化心得て去る。）

ハリス。松山さん、唯今あちらで。（奥を指し。）あなたに話したこと、岩瀬さんに委しく取次いでください。判りましたか。

和一郎。承知いたした。兎もかくも申傳へるでござらう。（少しく不安の色みゆ。）

ハリス。あなた、まだ判りませんか。

和一郎。いや、よく判つて居りまするが……。

（和一郎は猶あやぶむ色あり。ハリスはぢつとその顔を見つめてゐる。奥の襖をあけて、以前の所化は岩瀬肥後守を案内して出づ。肥後守は三十八九歳。千七百石の旗本にて、當時は外國奉行なつとめ、井伊大老を助けて專ら外交の難局にあたりたる、幕末屈指の人物なり。）

ハリス。おゝ、岩瀬さん。これへ、これへ……。

肥後守。御免くだされ。

（會釋して椅子にかゝれば、所化は一禮して去る。）

肥後守。なには扨措いて昨夜の一條、唯々おどろき入るのほかはござらぬ。外國の使たるお手前を途中にねらひ擊するなどとは言語道斷の始末。その下手人どもはきびしく詮議の上、いづれも相當の仕置をおこなふこと勿論でござるが、右樣の椿事出來いたすといふは、畢竟此方の不取締、いくへにもお詫び申す。自然このことが御本國へきこえ渡らば、いかなる面倒も起らうかと、われ〳〵一同心痛まかりある次第、お察しくだされ。

ハリス。　いや、いや、その御心配、いりません。日本の武士わたくしを殺さうとしたこと、これまでにも度々あります。わたくしも仕舞には殺されるかも知れません。わたくし殺されても日本を歸ることありません。わたくしは大切な役目を有つてをります。わたくしのからだ（わが胸を指して。）どんなになつても、この役目を屹と……屹と……仕遂げねばなりません。

肥後守。　弓……槍……鐵砲……刀……些とも怖いことありません。（微笑む。）さすがはアメリカ政府より選ばれて、わが日本國へ遣はされたる御人、一身を的にして飽までも使命を果さうとせらるゝは、まことに感服のほかはござらぬ。しからば昨夜の狼藉も、無事に御勘辨くださるか。

ハリス。　わたくし勘辨します、些ともかまひません。併し、わたくしのために、三浦さんの息子殺されました。わたくし大層悲みます。日本の政府は、あの人の親達に澤山の金をやつてください。わたくし賴みます。

肥後守。　それは云はるゝまでもなく、職に殪れたる三浦の家族には、相當の手當をいたすでござらう。はゞかりながら御安心あれ。

（ハリスうなづく、肥後守は少しく形をあらためる。）

肥後守。　さて今朝まかり出たるは、前申すごとく昨夜の椿事のお見舞と、また二つには例のお掛合の一條でござるが……。昨夜もお手前が下城の後、大老をはじめ外國係の者一同、額をあつめて評議をかさねたれど、なにぶんにも思ひ切つたる處置も相成り兼ぬる次第。就ては いつも〳〵同じやうのことを申すやうで、はなはだ申兼ねたる儀でござるが、神奈川その他の港を開くことは、今しばらくの延期をねがひたう存ずるが……。

（ハリス默して答へず。肥後守はその色目を窺ふ。）

肥後守。　この儀、御承引くださるまいか。如何でござるな。

ハリス。　あなた、いつも〳〵おなじ返事、いけません。きのふも……一昨日も……一昨々日も……先月も……先々月も……同じ返事、いけません、いけません。今日わたくし最後の談判あります。昨晩もあなたが延期を賴みました、わたくし肯きませんでした。今日、肯く筈ありません。

肥後守。　どうでも延期は御不承知か。

ハリス。　それに就きまして、わたくし日本のことば、上手に話すこと出來ません。松山さんはアメリカの言葉わかりますから、わたくし唯今委しく話して置きました。松山さんから聞いて

くださるよろしい。

肥後守。　むゝ。

（松山が見かへれば、和一郎心得て進み出づ。）

和一郎。　ハリス氏の口上は……。日本國が曩にペルリ提督の請を容れて、下田、箱館の港を開かれましたるは、アメリカ合衆國政府に於ても滿足に存じまする。但し右二ケ所のみでは甚だ不便でござりますれば、猶そのほかに神奈川、長崎、新潟、兵庫の港をも開かれたき旨、總領事たるハリス氏よりしば〳〵申し出でましたるも、今日まで確としたる御返事なく、いたづらに日を送らるゝは如何やうの次第でござりませうか。もはや一日も猶豫は相成りませぬ。即刻御挨拶……。と、先づかやうにござります。

肥後守。　それはかねて承知してゐるが、當方にもいふに云はれぬ苦しい事情がある。毎度申す通り幕府の内意は無論開港と決してゐるのであるが、諸藩のうちにも攘夷などやかましく云ふ者もあつて、殘念ながら國論一致して居らぬ。すでに先年下田箱館を開いた折にも、反對の議論熾であつたに、この際又もや神奈川その他の港を開くと申しては、なにぶんにも天下爭擾の基。それ等の事情を篤と御推察あつて、今しばしの御猶豫をねがひたい。開港のことはおそかれ早かれ必ず斷行いたす。その儀は御懸念あるな……。と、かやうに申せ。

和一郎。　はあ。

（ハリスの方にむかへば、ハリス遮りて云ふ。）

ハリス。　いや、判りました。わたくしよく判りました。あなた方の心配すること察して居ります。しかし港を開くこと、一日も早いがよろしい。支那はイギリス、フランスの國々と軍して敗けました。土地を取られました。金をとられました。それがよい手本です。そのイギリスとフランスの船、近いうちに日本へまゐります。オロシヤの船、もう下田へ來ました。ドイツその他の國々、皆つゞいてまゐります。日本どうしますか。

肥後守。　むゝ。（苦悶の眉をひそむ。）

ハリス。　あなた、わたくし國と一日も早く條約するよろしい。アメリカはおとなしい、ほかの國は皆々暴い。アメリカと早く條約するよろしい。ほかの國どうすることもできません。ほかの國の船來る。アメリカ仲裁する。日本のために大層幸福あります。判りましたか。今とむかし、世の中が違ひます。日本、港を閉ぢて、外國と交際しないこと、迚も迚も出來ません。日本、支那と違ひます。日本の人、利口あります。日本の人、世界のことよく識つてゐる筈

です。

（熱心に説く。肥後守つく〳〵聽き終りて、心ひそかに決するところあり。）

肥後守。　仰せ御道理、もはや延期など申すべき時節ではござるまいなう。

和一郎。　と申して、いよ〳〵開港と決しましたら、世間がさわがしう相成りませうが……。

肥後守。　いや、國内のみだれは取鎮むる手段もある。萬一これがために徳川幕府の基礎を危うするやうな事があつても、それは一國内の私事で、わが日本國の恥にはならぬが、世界各國を敵として戰ひ、もし不覺を取らば一大事。唯今ハリス氏も云はれる通り、となり國の支那がよい手本であらう。所詮今日と相成つては、もはや焦眉の急に迫つた。幕府は國論にさからうても、開港を斷行せねばなるまい。

和一郎。　はあ。御苦心のほどお察し申しまする。

肥後守。　これがわれ〳〵の務で是非もあるまい。（ハリスにむかひて。）では、この趣を大老その他にも申し通じて、明日中にはかならず御返事いたさう。

ハリス。　おゝ、明日中……。相違ありませんか。

肥後守。　相違ございらぬ。

ハリス。　條約調印しますか。

肥後守。　手前一存で御即答は相なり兼ぬるが……。だん〳〵のお話をうけたまはつては……。

ハリス。　（もはや爭ふ餘地もあるまじといふ體。ハリスもそれと察して首肯く。）

肥後守。　よろしい、判りました。明日の御返事、わたくし喜んで待つて居ります。

ハリス。　然らば明日あらためて……。今日はこれでお暇申す。

肥後守。　あなた、もう歸りますか。

ハリス。　（肥後守は會釋して起つ。ハリスも起つて握手する。）

肥後守。　これまで長い長い間、あなた大層心配しました。わたくしも大層心配しました。今度いよいよ條約が出來れば、わたくし大層よろこびます。あなたも……。（云ひかけて、肥後守の顔をながめ、同情に堪へざる氣色。）あなた、まだ〳〵澤山の心配ありませうな。

ハリス。　お察しくだされい。

肥後守。　あなた方は日本のために大事の人あります。からだを大切にする宜しい。

ハリス。　ありがたうござる。

（肥後守は會釋し、奥の襖をあけて去る。ハリスは和一郎に云ふ。）

ハリス。　アメリカ、日本、近いうちに條約出來ます。わたくし日本へ來て廿四ケ月……大層待ちました。わたくし、やう〳〵安心しました。おゝ、アメリカ……日本……。

（かれは欣喜に堪へざるごとく、起つて床にかけたる世界の圖をながめ、なにとは無しに室内を徘徊す。奥にて銅鑼、鐃鉢の聲きこゆ。）

ハリス。　おゝ、葬式……。三浦さんの葬式、もう始まりますか。

和一郎。　左様でござらう。御免くだされ。

（和一郎は奥に入る。庭口より所化一人出づ。）

所化。　三浦新太郎殿の遺骸、唯今埋葬いたします。

ハリス。　もうすぐに埋めますか。

所化。　大暑のみぎり、當寺内に於てすぐに土葬にいたす筈でござります。

ハリス。　よろしい。わたくし支度してまゐります。

所化。　はい。

（所化は去る。ハリスは直ちに衣服を着かへんとす。）

（二）

おなじく善福寺内の墓地。所々に石塔、卒塔婆など立ちて、桐、楓、樫など茂れり。

（寺男二人、穴をほる。奥には鐃鉢の聲きこゆ。）

男甲。　三浦さんもお氣の毒なことであつたなう。

男乙。　劍術もな優〳〵優れた腕前だと聞いてゐたが、たうとうこんなことになつてしまつた。

男甲。　なにをいふにも不意の暗撃で、相手は大勢だから堪らねえや。世間がだん〳〵さう〳〵しくなつて來るから、こんな騒ぎが方々に始まるだらうよ。

男乙。　一昨々年の大地震にも隨分人が死んだつけなう。なぜ近年はかう惡いことばかり續くのだらう。

男甲。　お寺の繁昌は結構だが、けふのお葬式のやうなのは、どうも心持がよくねえよ。時に、もうお經もそろ〳〵濟むころだ。

男乙。　もう一息だ、掘つてしまはうぜ。

（二人は汗をぬぐひて、再び穴を掘る。鐃の聲きこゆ。木かげよりお光うかゞひ出で、かくと見る

より穴の前につか〳〵と進みよる。）

お光。　もし、三浦様はこゝに埋められるんですか。

男甲。　おまへさんは誰だね。お葬式に來なすつたのか。

お光。　誰でも好いから教へてくださいよ。これは三浦様のお墓ですか。え、さうでせう。

（泣聲に力をこめて問ふ。二人は怪訝な顔、無言にてうなづく。）

お光。　あたしも一緒に埋めて貰ひたいねえ。

（お光は泣く。二人は顔を見あはせてゐるところへ、三浦彌十郎出づ。）

彌十郎。　これ、女。まだこゝらにうろ〳〵してゐるのか。なぜ立去らぬ。早く歸れ。

（お光は泣きながら頭をふる。）

彌十郎。　え〻、わからぬ奴だ。さつきも云つて聞かした通り、新太郎はおれの悴だ。さむらひの子の葬式に、おまへ達のやうな茶屋小屋の女が來るべき筈がない。歸れ、歸れ。

お光。　それはよく判つて居ります。どうせ斯ういふ身分の者でございますから、お歴々の方々と御一緒に、御見送りをするの、御燒香をするのと、そんな譯では決してございません。お邪魔にならないやうに、蔭の方に小さくなつて隱れてをりますから、お墓へ納めるところを、どうぞ一目……せめてよそながら御回向を……。もし、一生のおねがひでございます。

彌十郎。　いや、ならぬ。おれのせがれは茶屋女などに馴染はない筈。見ず識らずのお前達の回向をうけても、嬉しいとは思ふまい。けふの葬式には親類緣者同役の者もまゐつてゐる、それ等の手前も憚りあり。ことに當寺内には、アメリカ總領事たるハリス氏も居らるゝ。日本の武士のとむらひに、賤しい女が立まじつて居つたと云はれては、この上もない恥辱と知らぬか。諸人に見咎められぬうちに早く行け、ゆけ。

お光。　はい。（泣いてゐる。）

彌十郎。　え〻、剛情な奴。ゆけと申すに……。

（お光の襟髪を提つてひき退ける。お光倒れて泣き入る。所化二人出づ。）

所化甲。　これ、お光どの。さつきから聽いてゐたが、彌十郎どのは武士氣質一遍の物堅いお人ぢや。いつまで云うても承知あるまい。

所化乙。　お墓まゐりはけふに限つたことでも無し、そのうちに折を見てそつとお參りに來さつしやれ。わしらが案内してやりませうぞ。

（ふたりは小聲で宥めながら云ふ。）

お光。　でも、せめてお輿の外からでも……。

所化甲。　さあ、ひと目見たいはもつともぢやが、どうも今は折がわるい。

所化乙。　なう、わかつたか。

（彌十郎の方を見かへりつゝ宥めるに、お光は涙をぬぐひて起つ。）

お光。　それぢやあどうしてもいけないんですかねえ

所化甲。　悪いことは云はぬ。さあ、さあ、歸らつしやれ。

（無理に引立てられてお光は力なげに行きかけしが、再び穴の前につか〳〵と走り寄る。）

お光。　三浦様……。あなた一人こゝへ埋められても、あたしの心はこの通り……。（わが櫛を取る。）いつまでもあなたのお傍を離れませんよ。（穴に向つて櫛をなげ込み、泣き伏す。）

所化甲。　さあ、さあ、それでもう氣が濟んだであらう。

所化乙。　もう行かつしやれ、行かつしやれ。

お光。　え〻、もう寧そあたしも土のなかへ……。

（お光は狂へるごとく、穴に飛び入らんとする々、所化はおどろきて抱き止める。）

所化乙。　これ、こなたは氣でも狂はれたか。

まあ、まあ、待たつしやれ。

（所化二人は泣き狂ふお光を支へつ宥めつ、無理にあなたへ連れてゆく。彌十郎はみかへりもせず。）

彌十郎。　もはや穴も掘れたであらうな。

男甲。　へい、へい。もうこのくらゐで宜しうございます。

彌十郎。　御苦勞であつた。

（小森鐵之丞出づ。）

鐵之丞。　本堂に於て讀經も相濟みました。

彌十郎。　左様でござつたか。申すまでもなけれど、子のとむらひを親が見送る法はござらぬ。手前はもはや詰所へさがるでござらう。あとは萬事よろしくおたのみ申すぞ。

鐵之丞。　承知いたした。

（彌十郎去る。蟬の聲高し。鐵之丞は空を仰ぐ。）

鐵之丞。　大分暑くなつて來たな。

男甲。　へい、大分お暑くなつてまゐりました。

男乙。　でも、よいお天氣で結構でございました。

（松山和一郎出づ。）

鐵之丞。 おゝ、松山どの。まだおいでゝござつたか。

和一郎。 岩瀬どのは先刻すぐに登城、手前はあとに殘つて、三浦殿の御見送りをいたす心得でござる。ハリス氏もやがてこれへ見えるでござらう。

鐵之丞。 さやうでござるか。

（ハリスは服をあらためて喪章をつけ、手には草花を持ちて出づ。）

ハリス。 三浦さんの墓、これですか。

鐵之丞。 代々の菩提所ではござらぬか、朝夕當寺に詰め居つたる因みによつて、こゝに埋葬することに相成りました。

ハリス。 わたくしも何時この寺に埋められるかわかりません。わたくし、下田にゐるときに、二度も武士に斬りかけられました。江戸へくる途中……おゝ、川崎でした。その川崎でも一度斬られようとしました。昨日のゆふ方と昨晩、丁度五度目です。これからもあぶないこと度々ありませう。

和一郎。 いや、いや、その御懸念にはおよびませぬ。この後は警固の人數をさし、內外ともに嚴重に取締まつて、再び昨夜の如きあやまちなき樣、くれ〴〵も用心いたすでござらう。

（この時、當寺の住職をさきに、役僧數人出づ。そのあとより新太郎の遺骸を納めたる輿を、親戚その他の武士七八人送りて出づ。やがて穴の前に輿をおろせば、一同形をあらためて拜す。ハリスは進んで花をさゝげ、默禱。更に一同をみかへりて云ふ。）

ハリス。 唯今、この三浦さんの葬式に就いて、わたくしも少し申したい事ございます。みなさん御承知の通り、昨晩赤羽を通りますと、日本の武士、大勢でわたくしを殺さうとしました。わたくし殺されても構ひません。併しわたくしを殺すと、アメリカ政府の談判大層むづかしくなります。日本は澤山の償金を取られます、あるひは戰になるかも知れません。まことに困つたことです。ところが、この三浦さんと、あの小森さん、大層働いてわたくしを救つてくれました。三浦さんは……たうとう死にました。（輿をみかへりて嘆息し。）わたくしは死んだ人に澤山の禮を云はねばなりません。併しほかの人達も、職務のために死んだ强い武士に對して、十分の尊敬と……お禮をしなければなりません。今この墓に埋められる若い武士は、わたくし一人を救つたばかりでない、實に大きい日本國を救つたのです。あなた方も我々も、決してこの人の名を忘れてはなりません。

（なみだを揮つて演説すれば、一同もおぼえず頭を俛る。ハリスは更にさゝげたる草花を把りていふ。）

ハリス。この花は來年も開きます、又その次の年も開きませう。毎年この花の開くころには、この人の墓に花をそなへてください。わたくしは何時アメリカへ歸るかも知れません。わたくしの歸つた後でも、みなさん、屹と……屹と……おぼえてゐてください。

和一郎。それは仰せまでもござらぬ。遺族の者共にもよく〳〵申し聞して、亡きあとの弔ひは決しておろそかには致すまい。

鐵之丞。かほどまでに御賞美くだされば、死したる者もさぞ滿足に存じて居りませう。

住職。もはや納棺いたしても差支へはござらぬか。

（一同無言にてうなづく。住職は寺男に指圖して棺をうづめんとす。一同肅然として拜ず。下のかたより お光再び忍び出でゝ駈けよらんとするを、所化等はおさへる。）

――幕――

第三幕

（一）

神奈川の渡船場。海をへだてゝ横濱村遠くみゆ。下のかたに渡小屋あり、上のかたは葦蘆深し。

六月二十八日の朝。

（道中の駕籠夫四人、息杖を持ちて立つ。二挺の駕籠には旅姿のおますとお光とを乘せたり。おますは駕籠を出る。）

おます。お前達はどうしてくれと云ふんだえ。

駕夫一。どうの斯うのと、面倒なことを云ふわけぢやあございません。

駕夫二。大抵お察しくださいまし。へ〳〵〳〵。

おます。道中駕籠の紋切形で、酒手をくれろと云ふんだらうが、けさ川崎を發つ時分に、駕籠賃も酒手もちやんと渡してある筈だよ。

駕夫三。そりやあ頂きましたけれど、なんぼ朝涼でも駈け通しで……。

亞米利加の使

駕夫四。この通り、汗びつちよりになりましたから、どうかおかみさん……。

おます。うるさい人だねえ。ぢやあ、まあ仕方がないから……。

（紙入より金を出してやる。駕籠夫は受取りてみる。）

駕夫一。もし、おかみさん。こりやあ一分ですかえ。

駕夫二。一分ぢやあ一人頭にたつた一朱づゝだ。

駕夫三。禮をいふだけ損が行かあ。

駕夫四。返してしまへ、返してしまへ。

おます。忌ならおよしよ。無理に遣らうとは云はないから……。病人を連れてゐるからと思つて、こつちで蟲を殺してゐれば、好い氣になつて勝手なことをお云ひでない。道中へ出て、雲助に足もとを見られるやうな、そんなおかみさんぢやあないんだよ。とんだ千崎彌五郎だが、出直せ出直せと云ひたいくらゐだ。

駕夫一。え、おい、なんだか素晴しいことを云ひ出したぜ。

駕夫二。いくらお前が力んでも、こつちは大の男が四人だよ。

駕夫三。こつちで出直すよりも、そつちで出直したらよからう。

駕夫四。ぐづ〳〵云ふと、爲にならねえぜ。

（四人は取卷いて嚇しかける。波小屋のうちより七兵衛、五十餘歳の嚴乘る船頭出づ。）

七兵衛。え〻、誰だ。誰だ。朝つぱらからがや〳〵と騷ぎ立てるのは……。ちつと靜にしねえか。

駕夫一。お〻、七兵衛爺さんか。

駕夫二。ぬし達は相變らず惡いことばかりしてゐるな。さういふ惡黨どもが多いから、上り下りの旅の人はどのくらゐ難儀するか知れねえぞ。ふだんから口の酸つぱくなるほど意見しても

駕夫三。吐つても、わからねえ奴等だ。もうけふといふ今日は勘辨ならねえ。代官所へしよびいて行くからさう思へ。

駕夫四。おい、おい、さう怒つちやあいけねえ。

駕夫一。おれ達ばかり惡者のやうに云ふけれど……。

駕夫二。このごろお前のところへ轉げ込んでゐる、甥たとかいふ江戸の大哥も……。

駕夫三。なんだか入墨者らしいぜ。

（小屋のうちより神明の佐吉出づ。）

佐吉。やい、やい、こいつ等。入墨者とは何のこつた。もう一度云つてみろ。（傍に立てかけたる櫂

亞米利加の使

を把る。）

七兵衛。　おゝ、さうだ、さうだ。こんな河獺野郎の二匹や三匹、ぶつ殺してもかまはねえ、おれも今、鉈を持つて來るから……。

駕夫一。　まあ、まあ、待ちねえ。爺さんも江戸の大哥もあんまり氣が短けえや。

駕夫二。　こりやあまつたく俺達が惡かつた。

駕夫三。　河獺でも河童でもいゝから……。

駕夫四。　けふのところはまあ堪忍してくんねえ。

おます。　（佐吉を見て。）おや、おまへは佐吉さんぢやあないか。

佐吉。　おゝ、おかみさんか。不思議なところでお目にかゝつた。

おます。　お前どうしてこんな所へ……。あゝ、このあひだの一件からだね。

佐吉。　えへん、えへん。（眼で制して。）さうして、おかみさんはどこへ……。

おます。　お光がかういふ始末なんだよ。

（あとの駕籠の垂簾をあける。お光、狂女の體にて、駕籠より素足のまゝにひらりと出づ。おまず介抱して、草履をはかせる。）

佐吉。　なんだか樣子が可怪いね。

おます。　それだから困るんだよ。時に駕籠夫さん、もう可いから歸つておくれよ。

駕夫一。　へえ、どうもありがたうございました。

（駕籠夫は溢々ながら二挺の空駕籠をかつぎて去る。）

佐吉。　おい、叔父さん。これがお光のとこのおかみさんだ。

七兵衛。　あゝ、さうかね。（進み出る。）わたくしはこの佐吉とお光の叔父で、七兵衛といふ田舍老爺でごぜえます。一人ともわたくしの妹の子供で、江戸にゐるとは聞きながら、この三四年は音信不通、どうしてゐるかと案じて居りますと、四五日前に佐吉がめづらしくたづねて來て、委しい話をしてくれましたが、お光もまあ、お前樣のやうなよい御主人を持つて、仕合でごぜえますよ。

おます。　ところが、あんまり仕合でもないのさ。お話をすれば長いことだが、お光は不圖したことから取詰めて、ちつと氣が可怪くなつてね。

七兵衛。　え、お光が氣ちがひになつた……。

おます。　大したことでもあるまいが、なにしろ打捨つては置かれないから、實は大山へ連れて行つ

て、瀧に打たせてやるつもりで、きのふ江戸を發つて來ました。

佐　吉。　そりやあ飛んだことで、いろ〳〵御心配をかけました。おい、お光、兄さんが判るか。

七兵衛。　叔父さんもこゝにゐるぞ。

（二人は顔を出してみせる。お光は他愛なく、たゞさめ〴〵と泣く。みな〳〵顔を見あはせて、困つたものだと嘆息す。）

七兵衛。　まあ、なにしろ、こゝぢやあ話も出來ねえ。穢ねえところだが、家へ御案内申してはどうだな。

佐　吉。　まあ、兎も角もこつちへ來て下さいまし。

おます。　それぢやあ御厄介になりませうか。さあ、お光や。叔父さんのところへ行くんだよ。

（おますはお光の手をひき、七兵衛と佐吉は案内して小屋に入る。松山和一郎、小森鐵之丞、ほかに武士數人、いづれも旅裝にて出づ。）

鐵之丞。　船頭は居らぬか。船頭……船頭……。

（小屋のうちより七兵衛出づ。）

七兵衛。　へい、へい。なんの御用でごぜえます。

和一郎。　餘の儀でもないが、このたびいよ〳〵横濱の港を開くことに相成つて、アメリカ總領事ハリス氏は、岩瀬肥後守どの同道で、唯今これへまゐらるゝ。早速に渡船の用意をいたせ。

七兵衛。　では、いよ〳〵あの横濱が港になつて、異人どもが來るのでごぜえますか。こりやあ飛んでもねえことになつたものだ。おらあ呆れて物が云へねえ。そんな御用なら眞平御免でごぜえますよ。

（和一郎と鐵之丞、顔を見あはせる。）

鐵之丞。　當神奈川宿の商人百姓どもは土地繁昌に相成るを喜んで居ると承はつたが……。

七兵衛。　異人が來るのを喜んでゐるなどと云ふのは、村役人どものおべつかで、わたくしどもは先づ第一に不承知でごぜえますよ。今にもこゝへ毛唐人が這入つて來れば、わたくしが先立になつて、櫓櫂で向脛を掻つ拂つてやります。全體、上役人に臆病の腰拔野郎ばかり揃つてゐるからこんなことになるので、おらあ口惜くつてならねえ。

和一郎。　默れ、默れ。各位、そやつに繩をうたつしやい。

武　士。　はあ。

（二三人寄つて七兵衛をおさへる。）

亞米利加の使

和一郎。今にもこゝへハリス氏が見えたる時、かやうな者が徘徊して居つては、いかなる狼藉を働かぬともかぎらまい。

鐵之丞。なるほど、用心のために捕へ置くが無事でござらう。それ、引立てませい。

（小屋のうちより佐吉出づ。）

佐吉。まあ、まあ、お待ち下さいまし。わたくしはその七兵衛のみよりの者でございますが、異人やお役人様のお通りの濟むまでは、一足も外へ出さないやうに、わたくしが屹と張番して居りますから、お繩だけはどうぞ御勘辨を願ひます。

和一郎。むゝ、其方は身寄りのもので、相違なく張番いたすか。

佐吉。へえ、それはわたくしがお請合ひ申します。

和一郎。しからば其方にあづけ遣はす。

鐵之丞。嚴重に閉籠めておけ。

佐吉。かしこまりました。おい、叔父さん。お役人にむかつて途方もねえことを……。お前は氣でも違やあしねえか。狂人がかう大勢出來ちやあ遣瀨がねえ。

七兵衛。なんで俺が氣がちがふものか。正氣でみんな云つてゐるのだ。

佐吉。まあ、可いからこつちへ來なせえ。

（佐吉は七兵衛をなだめて小屋のなかにつれ込む。）

和一郎。もう方々も見えるであらうが、船頭が居らんでは困つたなう。

（思案するところへ、旅裝の岩瀨肥後守とハリス、つゞいて武士數人出づ。ハリスはあたりを見まはして、訝しげに云ふ。）

ハリス。あなた、どこへ行きますか。

肥後守。渡しを越えてゆくが捷徑でござる。（松山等を見かへる。）船の用意はよいか。

ハリス。こゝ神奈川……。わたくし、あすこへ行くこと要りません。船、乘ることありません。

肥後守。このたびいよ〳〵開港と決したるに就いて、神奈川の土地檢分にまゐられたお手前が、今更不承知を云はるゝは……。

ハリス。日本の役人、うそ云ふあります。あすこ、横濱です。神奈川ありません。條約違ひます。

肥後守。いや、横濱村もおなじくこの神奈川の内で、決して條約にはそむかぬ筈でござるが……。

ハリス。違ひます、違ひます。わたくし、日本の地圖よく調べてをります。神奈川と横濱、おなじ土地ありません。わたくし、歸ります。

（ハリス怫然として去らんとす。肥後守、胸をさだめて云ふ。）

肥後守。　ハリスどの。しばらくお待ちください。實はお察しの通り、かしこは横濱……。神奈川ではござらぬ。が、神奈川として枉げて御承知ねがひたい。（ハリスは憤怒の色ふくみて答へず。）幕府では決してお手前をあざむいたのではござらぬ。すでに開港と事決したる上は、神奈川をひらくも横濱を開くもおなじことで、決してそれを嫌ふではござらぬが、神奈川は往來しげき東海道の通路、もしこゝを開いて外人の住居を許すときは、自然心得ちがひの者あつて、いかやうなる椿事を仕出さうも測られませぬ。ついては、街道より遠ざかりたる彼の濱地をえらみ、要所一帶に關門を設けて、嚴重に出入りを吟味いたさば、おそらくはその患を防ぐでござらう。もし條約のごとくに神奈川を開き、後日にいろ〳〵の面倒おこらば、果は國と國との和親を破るやうに相成らぬとも限りませぬ。その邊の事情、よく〳〵お察しくだされい。

ハリス。　それならば、なぜ初めに云ひませんか。

肥後守。　なにぶんにもお手前達は、かたく神奈川を主張せらるれば、もし初めにそれを申し出したらおそらく御承知あるまい。就いては臨機の處置を以て、兎もかくも神奈川と相定め、さてあらためて御相談いたす心得でござつた。

ハリス。　それ、それがよろしくない。約束は正直が肝心です。日本の役人、嘘云ふ、大層わるい。アメリカの人、嘘いふこと大層嫌ひます。こゝ神奈川……こゝを港にすること宜しい。

肥後守。　なるほど、神奈川といふ條約を變じて、彼の横濱を開くことは定めて御不承知でもござらうが、そこを折入つておねがひ申す。

ハリス。　いけません、いけません。わたくし江戸へ歸ります。井伊さんにもう一度談判します。

肥後守。　では、どうあつても御不承知か。手前、これほどにおたのみ申しても……。

ハリス。　否、否。いけません、いけません。（顔をそむけて取合はず。）

肥後守。　（決心して。）この上は致方ござらぬ。飽までも御承知なきに於ては、手前も役目の表、このまゝおめ〳〵と江戸へは歸るまい。

ハリス。　あなた、どうしますか。

肥後守。　切腹いたすよりほかはござらぬ。

ハリス。　切腹……。あなた、腹切りますか。

肥後守。　萬一事とゝのはぬ曉には、役目不行きとゞきの申譯に、この場で切腹つかまつると、初め

より覺悟いたしてまゐつた。

（ハリスは少時沈默、やがて感嘆の太息をつく。）

ハリス。　日本の役人、みな偉い人あります。わたくし、感心しました。あなた腹切ることよろしくない。神奈川をやめて横濱にすること、わたくし承知しました。

肥後守。　むゝ。では、御承知くださるか。

ハリス。　よろしい。わたくし、たしかに承知しました。ほかの國の公使が不承知云ふ、わたくし仲裁します。心配なさらぬよろしい。

肥後守。　それ承はつて安堵いたした。なにぶん宜しうおたのみ申す。（松山等にむかひて。）然らばすぐに船を出せ。

和一郎。　はあ。（躊躇す。）

肥後守。　用意はまだ出來ぬか。

（和一郎等は當惑す。小屋のうちより七兵衛出づ。）

七兵衛。　殿様。お船は唯今出しまする。

和一郎。　おゝ、其方が船を出すか。

七兵衛。　わたくしは生れ付いての强情者、一旦忌といひ出したら、たとひ首を取られても、決して諾とは申しませぬが、さつきから小屋のなかで委細のお話をうけたまはり、思はず涙がこぼれました。まかり間違へば腹を切るとまでに、覺悟を決めておいでなさるお役人様がたを、臆病の腰拔けのと申しましたはわたくしが重々のあやまり、眞平御免くださりませ。皆様がそれほどに御苦勞遊ばすのはよく〳〵のことでござえませう。

肥後守。　われ〳〵の心中、察してくりやれ。

七兵衛。　はい。すぐに支度を致しませう。船はあれに繋いでござりまする。（上のかたの蘆間を指さし。）さあ、どなたもお越しなされませ。

肥後守。　おゝ。

（七兵衛案内して肥後守等は蘆間に入る。ハリスも武士二三人に護られて、あとより行かんとす。小屋のうちよりお光走り出で、ハリスに縋りて、突然に叫ぶ。）

お光。　三浦様を返してくださいよう。

ハリス。　おゝ、あなた、先夜の深切な娘あります。どうして、こゝへ來ましたか。

（お光は答へずして泣く。武士等はあやしみて突退けんとするを、ハリス制す。小屋のうちより亞米利加の使

おます追つて出づ。）

おます。　お前、まあ、飛んでもない。みなさん、どうぞ御免下さいまし。

（小森鐵之丞は蘆間より引返し來りて聲をかける。）

鐵之丞。　ハリス氏も早うお越しなされい。

（ハリス答へず、猶お光を見てゐる。鐵之丞は云ひすてゝ再び蘆間に入る。おますはお光を賺して連れ行かんとするところへ、三浦彌十郎は旅裝にて急ぎ出づ。）

彌十郎。　お光。

（彌十郎を見て。）おゝ、三浦様……。

（お光は彌十郎に取りつくを、おますは慌てゝ止める。）

彌十郎。　むゝ、お光とやらか。

おます。　失禮ながら、あなた様は……。

彌十郎。　三浦彌十郎。

おます。　では、新太郎さまの親御様で……。

（彌十郎は答へずして行かんとするを、ハリスは遮り、手眞似にて待てと云ふ。）

おます。　（すり寄る。）わたくしはこのお光の主人で、おますと申す者でございますが、うけたまはりますれば御子息様は飛んだことで……。さぞ御愁傷でございませう。（彌十郎は猶答へず。）就きまして、このお光がせめては御線香でも供へたいと、あくる朝お寺へうかゞひましたら、そんな者は知らぬと仰しやつて、無理に追ひ返しておしまひなすつたさうで……。

彌十郎。　武士のせがれが、茶屋小屋の女となじんだなどと申しては、親類縁者の手前、彌十郎面目をうしなふに依つて追返したがなんと致した。

おます。　それがあんまり酷いぢやあございませんか。茶屋小屋の女だつて、人間に變りはない――と、まあ云つた理窟でせう。この兒だつて、御子息様のためには、これまで隨分苦勞もしてゐますよ。それがまああんな始末になつて、その晩は泣いて泣いて泣き通し、せめてもう一度死顔でも拜みたいと、あくる朝わざ〳〵おたづね申せば、あなたは邪險なことを云ふ。それやこれやで取詰めて、可哀想にこんなになつてしまつたんですよ。

（おますはお光の手をとりて、彌十郎に突き付ける。お光は無心に笑ふ。）

彌十郎。　然らばどう致せといふのか。

おます。　どうと云つて、別に手切れ足切れなんて云ふわけぢやございませんが、あんまりこの兒が

亞米利加の使

可哀さうですから、せめてあなたの口から優しい詞の一つもねえ。

彌十郎。　なに、武士が茶屋女に優しい詞を……。

（彌十郎は苦り切つたる顔。お光は現ともなく叫ぶ。）

お　光。　あ、あれ、あすこに三浦様が……。あたしちまゐります、御一緒に……。

おます。　まあ、お待ちよ。あなた御覧なさい。ほんたうに可哀想ぢやありませんか。（なみだを拭く。）

（ハリスは先刻より眼も放さずに視てありしが、たまり兼ねてつか〳〵と進み寄る。）

ハリス。　この娘、氣が狂ひましたか。

おます。　御覧の通りでございます。

ハリス。　三浦さんの息子が死んだので、悲みましたか。可哀さうですな。今の話、わたくし大抵わかりました。（お光の顔をつく〴〵視て。）あなたの大事の人、わたくしを救ふために死にました。あなた、まことに運の悪い人です。わたくしは大層氣の毒に思ひます。併し、あなたは正直な善い人です。神様は屹とあなたを救つてくださるに相違ありません。

（お光は無心に空をながめてゐる。ハリスは更に彌十郎にむかひて云ふ。）

ハリス。　三浦さん。あなた、この娘を愛しませんか。この美しい娘……清いむすめを憎みますか。

この娘は身分が賤しいので、あなたは嫌ひますか。

（彌十郎默然。）

ハリス。　身分の賤しい人にも、正直の人澤山あります。あなた、正直の人を嫌ひますか。

（彌十郎なほ答へず。小屋のうちより佐吉出づ。）

佐　吉。　もし、三浦の旦那様。わたくし共がこんなことを申しちやあ恐れ入りますが、これはわたくしが唯つたひとりの妹で、御子息様を思ひ詰め、たうとうこんな事になりましたのは、考へてみると實に可哀さうでございます。今更なんと云つたところで、死んだ御子息様がいきかへる譯でも無し、妹の病氣がなほるといふ譯でもございませんが、何うぞこれを不便と思召して、せめてお寺詣りぐらゐは表向きに行かれますやうに、わたくしからもお願ひ申します。

おます。　わたくしも共々おねがひ申しますから、どうぞ、ねえ、あなた……。この兒を不便と思召して……。さあ、お光や。お前もおとなしくしてお願ひ申すが可い。こゝにおいでなさるのが新太郎様の親御様だよ。

（おますは再びお光を彌十郎のまへに突き付ける。）

お　光。　三浦様……新太郎様。

（お光は却つてハリスの膝に縋る。ハリスはいよ〳〵堪へ兼ねて、思はずお光を抱きよせる。）

ハリス。　おゝ、三浦さん。この娘、あなたの嫁でありませんか。

彌十郎。　嫁と申しても……お笑ひはござるまいか。

ハリス。　おゝ、嫁……立派な嫁です。

（お光は他愛なくハリスに抱かれてゐる。彌十郎もさしのぞきて、初めてその顔をぢつと視る。おますと佐吉は顔をみあはせて泣く。）

（二）

横濱村の海岸。上の方に突出したる岩ありて、一樹の松生ひたり。正面は烟波渺々たる大海にて、舞臺はすべて海の心なり。

（船頭七兵衛案内して、ハリス及び岩瀬肥後守は葭蘆をかき分けて出つ。夏のあさ霧は海を籠めたり。）

肥後守。　其方の案内で、路にも迷はずこれまでまゐつたが、途中は隨分難儀であつたな。

七兵衛。　わたくし共ですらも滅多に來たことは無いくらゐですから、お上の御用でゞも無ければ、とてもお前様方のお出でになる所ではござえますまい。

ハリス。　こゝの海、深いありますか。

七兵衛。　神奈川よりもこちらの方が、海はずゝんど深うござえますから、どんな大船でも這入りませう。

ハリス。　それ、大層よろしい。（笑を含んでうなづく。）

肥後守。　横濱を以て神奈川にかへても、左のみ御不自由はござるまいな。

ハリス。　よろしい、よろしい。

肥後守。　（七兵衛に。）其方は常に横濱神奈川のあひだを往來する者、この村のありさまも委しく存じて居らうな。

七兵衛。　はい、ひと通りは心得てをりまする。御覽の通り、こゝは海に突き出した洲も同様で、山も丘もをちこちに見えては居りまするが、先づ一帶に沼地が多く、葭や蘆が所嫌はずに生茂つて居りますから、すこし雨でもふれば一面に水が出て、魚は手捕まへにもなるくらゐ。夜になれば狸も出る、河獺も出るといふので、人通りも疎にございません。もつとも人家

と申したところで、百姓と漁師とあはせて八十軒か九十軒。神様は洲干の辨天様、寺は吉田新田の常清寺……。先づこんなものでございます。

ハリス。　あなた、よく知つてゐるあります。わたくし、當分は神奈川の正覺寺に居ります。あなた時々尋ねて來て、横濱の話してください。

（あさ霧漸次に晴れて、海の面明るし。みな〳〵海原を遠く見わたす。）

七兵衛。　おゝ、霧がだん〳〵に晴れました。

ハリス。　おゝ、横濱の海……。廣いありますな。

肥後守。　江戸へ入るべき港として、恥かしうもござらぬな。

ハリス。　おゝ、よい港……日本一あります。この海の水……アメリカまでつゞいて居ります。（岩を降らんとす。）

七兵衛。　あゝ、もし、危ねえ。どうなせえます。

（ハリス、岩を降りて、海水の脛に達するところまで入る。）

ハリス。　わたくし、今日、重大なる務を果しました。アメリカと日本とのあひだを流れるこの水。いつまでも二つの國の平和と利益とをつなげ！

（ハリスは海にむかつて呼ぶ。夏の日高くのぼりて、水鳥飛ぶ。）

幕

箙の梅

大正三年五月作。

大正九年五月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割――梶原景季（澤村宗之助）梶原景時（市川介十郎）甚五兵衛（尾上松助）梅が枝（森律子）平重衡（澤村宗十郎）など。

登場人物――本三位中將重衡。梶原源太景季。梶原平三景時。梶原平次景高。後藤兵衛盛長。菊池三郎高國。河越次郎定清。農夫甚五兵衛。その娘梅が枝。農夫の女房おいね、おくろ。農夫虎作。ほかに源平の軍兵など。

（一）

攝州生田の森の一つ家。藁葺の二重屋體にて、上のかたに三尺の佛壇、その下に板戸の押入あり。中央は繩簾をおろしたる出入口にて、下のかたは破れたる壁。爐には土瓶をかけて、傍には茶盆粗朶籠などあり。竹緣の前には、切株の踏段。家の外の下のかたには井戸ありて、樹ぶり面白き一樹の梅は今や花盛なり。そのうしろは田畑にて、家の上のかたには、生田の森を隔てゝ平家の城遠くみゆ。

（元暦元年二月七日の午前。源平今や合戰最中にて、陣鐘の音しきりに聞ゆ。この家のむすめ梅が枝、十七歳、爐のほとりに坐し、農夫の女房おいね、おくろの二人は緣に腰をかけて語る。）

おいね。　けふは夜の明けぬうちから、しきり無しに螺や鐘の音がきこえるが、たうとう軍が始まつたと見える。

おくろ。　どつちが勝つても負けても、こつちにはかゝり合ひの無いことぢや。早く濟んで呉れゝばよいがなう。

梅が枝。　こつちにかゝり合が無いとは云ひながら、わたしはこゝらで生れたせるか、なんといふ理窟も無しに平家最屓、けふの軍もどうかお城方に勝たしたいやうに思はれます。

おいね。　それは自然の人情で、わたし等とても同じことぢや。東夷と書からも云ふ通り、どうで源氏の武士に、碌な奴はあるまい。

おくろ。　都育の平家の衆にくらべたら、雪と墨ほどの違ひであらうよ。

（噂なかばに下のかたより農家のせがれ虎作、桶を荷ひて出で、井戸の水を汲まんとして、梅の枝が邪魔になるといふ體、いま〳〵しげに舌打する。）

虎作。　こりや、どうもならぬわ。梅の枝が邪魔になつて思ふやうに釣瓶も汲まれぬ。おゝ、さうぢ〻。（家の前に來る。）これ、これ、梅が枝どの。そこらに鉈か斧はあるまいか。

おいね。　鉈ならばこゝにあるが……。（手をのばして、爐のほとりにある鉈を把る。）一體、これを何にするのぢや。

虎作。　あの井戸の上に差出てゐる梅の枝が、兎角邪魔になつてならぬから、大きい枝を二つ三つ打ち折らうと思ふのぢや。

おくろ。　なるほど、わたし等も朝夕水を汲むときに、あの大きな枝が邪魔になつてならぬ。では、お前に折つて貰はうか。

虎作。　おゝ、よい、よい。（虎作はおいねの手より鉈を受取りて、井戸の方へゆかんとす。梅が枝はあわてゝ聲をかける。）

梅が枝。　あゝ、これ、それを折つては……。

虎作。　打つちやつて置いたら、枝はます〳〵擴がつてしまふばかりぢや。今のうちに折つたがようござるわ。

梅が枝。　でも、それは……。

虎作。　はて、邪魔になるから折るのぢやと云ふに……。（虎作は行かんとす。梅が枝は緣よりかけ降りて、虎作を支へる。）

梅が枝。　まあ、待つてくだされ。もし、父さん。虎作どのが梅を折ると云ひますぞ。

（奥にむかつて呼べば、奥より父の甚五兵衛、五十餘歳、出づ。）

甚五。なに、梅を折ると……。とんでもない奴ぢや。

（甚五兵衛は縁よりつか〳〵と降りて、矢庭に虎作の鉈を奪ひ取る。）

甚五。あの梅は日頃から親子が大事にしてゐるを知つてゐながら、鉈を入れようなどとは憎い奴め。迂濶に指でもさしたが最期、梅の枝よりも先へ、おのれの手足をたゝき折つてしまふぞ。覺悟せい。

（鉈をふりあげるに、虎作も恐れて退る。梅が枝等は割つて入り、甚五兵衛を宥める。）

梅が枝。そのやうに腹を立てずと、まあ〳〵料簡してくださりませ。

おいね。別に惡氣があつたと云ふでも無し、手暴いことをさつしやるな。

おくろ。虎作どのもこゝへ來てあやまつたがよい。

虎作。あい、あい。（渋々ながら進み出づ。）おやぢ殿、どうぞ堪忍してくだされ。

甚五。むゝ。この後もあの梅には指でも差してはならぬぞよ。よいか。

虎作。あい、あい。とは云ふものゝ、こゝ生田の森は梅の名所で、見飽きるほどに梅の林があるものを、この樹に限つてそれほど大事にさつしやるとは、どうも合點が行かぬなう。

甚五。それには譯のあることぢや。まあ、聞け。（縁に腰をかける。）今から丁度十七年前、この娘が生れたときに、わしが生田の御社の境内から、實生の梅を持つて來て、わが門に植ゑたのが、それその梅ぢや。春の花も數あるなかで、梅は清く美しいもの。娘もそれに類かるやうにと、名もおなじく梅が枝と付けた。それから月日の經つうちに、樹はだん〳〵に生長する。娘もだん〳〵に生長する。今では樹も花盛り、むすめも花盛り、はゝゝゝゝ。ぢやに依つて、わしは自分の娘と同じやうに、その梅の樹も大事に育てゝゐる。早く云へば、その樹もこの娘も一身同體で、どうやら魂が通うてゐるやうにも思はれるのぢや。それほど因緣のある梅の樹に、刃物をあてゝ善いか、惡いか。まあ、察して見るがよいわ。

梅が枝。父さんも云はれる通り、生れるとから妾と一緒に育つた彼の梅の樹が、今ではだん〳〵に枝が伸びて、邪魔になるとは知りながら、一枝もおろさず捨てゝ置くのは、さういふ譯でござります。

おいね。いはれを聞けばそれも道理ぢや。この娘殿と一緒に育つた、その樹に刃物を當てるといふのは、娘殿のからだに刃物を當てるも同じやうなものかも知れぬ。

虎作。なるほど、そんな理窟かなう。

（この時、貝鐘の音はげしく聞ゆ。皆々上のかたを見る。）

おいね。　あれ、あれ、鎧武者が斬合ひながら、こつちへ駈けて來るやうぢや。

おくろ。　うか〳〵してゐて、傍杖の怪我でもしてはならぬ。

虎作。　些とも早く逃げろ、逃げろ。

（三人はうろたへて逃げ去る。甚五兵衛も娘をまれきて緣に上り、おもての樣子を窺ひゐるところへ、上のかたより梶原源太景季、廿二歳、むらさき匂ひの鎧、大わらはにて、箙を背負ひ、太刀をぬきて、平家の軍兵二人と戰ひながら出づ。軍兵は敵せずして早々に逃げ去る。源太はあたを見送りて、ほッと息。やがて喉の渴きし體にて井戸のほとりに來り、釣瓶の水をくんで飲む。甚五兵衛親子は默して見物す。）

源太。　こりや、そち達に些と尋ねたきことがある。これより生田の森までは一筋道であらうな。

（甚五兵衛は緣さきに出づ。）

甚五。　仰せの通り、ほかに岐道はございませぬ。

源太。　むゝ。（かんがへる。）しからば今より半時ばかりのあひだに、紺絲の鎧着たる四十二三歳ぐらゐの武者と、卯花の鎧着たる若武者とが、これより東へ引いてゆくを見ざりしか。どうぢやな。

甚五。　いえ、お侍衆は一人もお通りになりませぬ。

源太。　確とさうかな。

（源太はわが來し方をみかへりて、不安の體なり。梅が枝は進み出づ。）

梅が枝。　わたくしは朝からこゝに居りましたが、鎧すがたのお侍は絶えてお見受け申しませぬ。

（云ひつゝ源太の武者振をぢつと見る。）

源太。　親子兄弟三人が、大手の門へ寄せかけて、一の木戸は破りしかど、敵に手痛く防がれて、亂軍のうちに親と弟を見うしなひ、心ならずもこれまで引揚げしが、一筋道のこゝを通らぬとは不思議なことぢやなう。（ひとり語のやうに云ひて、不安の眉をひそむ。）

梅が枝。　では、おまへ樣は、源氏のお方でございますか。

源太。　いかにもそれがしは東の者ぢや。

梅が枝。　失禮ながら御苗字は……。

源太。　梶原源太景季ぢや。親や弟が萬一こゝへ尋ねてまゐらば、源太は再び城に駈け向うたと傳へてくりやれ。

甚五。お前様ひとりであのお城へ……。

源太。親や弟のゆくへ知れねば、その安否も心もとなく、これより引返して尋ねにゆくのぢや。

梅が枝。あの大勢の敵のなかへ……。

源太。敵は何萬騎ともあらばあれ、面もふらずに切つて入るが、坂東武者の習と知らぬか。親子三人打ち連れて、いくさの庭に向ひながら、ふたりの姿を見うしなひ、われのみ生きて返らるべきや。父討たれなば、そのかたきと組んで死なん、弟捕はれなば、その縄を切つて救はん。生くるも死ぬも親子一緒ぞ。

梅が枝。おゝ。

源太。源太はこれより二度の駈ぢや。（云ひつゝ彼の梅に目をつける。）そち達に無心がある。門の梅を一枝手折るぞ。

甚五。え、あの梅の枝を御所望とは……。

源太。先刻よりの働きに、箙の矢種も射盡したれば、咲きみだれたる梅が枝を……。

梅が枝。箙に挿んでお越しなさるか。さりとは優しい。

源太。東男も風流を存じて居るわ。

（源太微笑む。梅が枝はその顔をつく〳〵打眺めてゐたりしが、やがて彼の鉈を把りて、井戸のほとりへ行かんとす。）

甚五。あ、これ、その梅をむざと切つては……。

梅が枝。父さん、止めてくださりますな。

（梅が枝は鉈にて梅の枝二三本をうち折り、情を含んで源太にさゝぐ。）

源太。おゝ、さても見事に咲いたなう。（梅の枝を手にさる。）これより敵に駈け入つて落花微塵に散らすとも、匂ひは鎧の袖に殘らう。

（源太は微笑みつゝ、箙に挿まんとす。梅が枝はうしろに廻りて、手づからそれを箙に挿む。）

源太。おゝ、かたじけない。

梅が枝。あつぱれ武者振……。

（梅が枝はぢつと打守る。陣鐘太鼓の音きこゆ。源太は屹とみかへる。）

源太。いくさは今が最中と見ゆるわ。さらばぢや。

（源太は勇んで上のかたへ走り去る。梅が枝はうつとりとして見送る。）

甚五。これ、娘。あれほど大切にしてゐた梅の枝を、われはなぜ折つて遣つたのぢや。

梅が枝。なぜと云うて……。あのお侍なら、折つて遣つても惜うはござらぬ。

甚五。え。でも、あの侍は、われ達がさつき悪う云うてゐた源氏方ぢやぞ。

梅が枝。もうかうなつたら、源氏でも平家でも構ひませぬ。わたしの魂の通つてゐる彼の梅は、遣りたい人に遣りまする。

（甚五兵衛はそれと畳りて打笑む。）

甚五。むゝ。なるほど、それももつともか。優しうて勇ましい彼の若武者が、かざしの花にするとあれば、折つて遣つても惜うは無いなう。

梅が枝。あづま夷といふ中に、あのやうなお方があらうとは……。

（梅が枝は猶あなたを見送りて立つ。陣鐘太鼓の音ます〳〵烈しく、流れ矢ばら〳〵と飛び來る。甚五兵衛は氣づかはしげに表を見る。）

甚五。おゝ、軍はいよ〳〵烈しくなつたとみえて、城方から射出す流れ矢が、こゝらまでも頻りに飛んで來る。これ、娘よ。外にうろ〳〵してゐると、どんな怪我をせぬとも限らぬ。早う内へ這入つてゐや。

梅が枝。あい。（とは云ひながら、猶あなたを眺めてゐる。）

甚五。はて、情の強い。もう歸りやといふに……。これ娘、娘。

梅が枝。あい、あい。（なほも見送る。）あれ、父さん。見やしやんせ。今のお方は……あれ、あれ、唯ひとりでお城の方へ……。

甚五。それはもう判つてゐるわ。

梅が枝。あれ、あれ、大勢のなかへ切込んで……。あれ、籠の梅が散りまする。

甚五。おゝ、さうであらう。

（甚五兵衛も思はず出てみる。）

梅が枝。あのやうに四方八方から取卷かれては……。

甚五。いや、さうでない。あれ、見やれ。大勢を切捲つて追うてゆくわ。

梅が枝。ほんに大勢を切り散して……。生田の森の方へ……。あれ又、森のかげから大勢の敵が打つて出た。

甚五。なるほど、これは油斷がならぬ。

梅が枝。なんぼ勇ましいお人でも、あのやうに新手の敵が來ては……。

（梅が枝は氣づかはしげは伸びあがりて打眺めぬたりしが、我にもあらで二足三足、上のかたへ

（走りゆく。）

甚五。これ。娘。どこへゆくのぢや。

梅が枝。鳥渡そこまで……。

甚五。はて、馬鹿な。切ッつ拂ッつの軍の場所へ、女子などがうかゝと出て行つて、傍杖の怪我などしたら何とする。

梅が枝。でも、鳥渡そこまで……、決して遠くへは行きやしませぬ。

甚五。いや、あぶないと云ふに……。

梅が枝。なに、すぐに戻つて來ますする。

（梅が枝は小褄をからげて、上のかたへ走り去る。）

甚五。これ、娘……。はて、もう駈けて行つてしまふた。あれほど大切にしてゐた梅の枝を、惜氣もなう切つて遣つたほどの男ぢやもの、その安否を氣遣ふも道理ぢやが、おれたちが幾ら氣を揉んだとて何とならう。これ、娘……。あまり遠く行かずに早う戻つて來いよ。おういい、おういい。

（陣鐘の音きこえて、流れ矢又もやはら〳〵と飛び來る。）

甚五。おゝ、軍はだん〳〵に烈しくなつて來る。これ、娘よ。えゝ、どこまで行くのぢや。あゝもう姿が森にかくれて……。こりや打つちやつては遣かれぬ。早う呼び戻して來ねばならぬ。

（甚五兵衛も纏いて走りゆく。）

（二）

生田城外。正面すこしく上のかたに寄せて、木立のあひだに城、木戸、櫓など遠くみゆ。あたりは一面に梅の林にて、花は眞白に咲き亂れたり。

（平の重衡、引立烏帽子、緋をどしの鎧を被て、弓を持ち、その左右には侍烏帽子、小手脛當の軍兵數人、長巻を持ちて控へたり。）

重衡。今朝より數度のいくさに、源氏もさすがに疲れしとおぼしく、一旦は還く引揚げしが、又しても盛返して寄するとみゆるぞ。大手の固めを破らるゝな。

兵一。たとひ幾たび寄せかけても、拔駈けの功名をあらそふ源氏の武者。

兵二。思ひ〳〵に戰へば、一致の駈引は相成りますまい。

重衡。とは申せども油斷は不覺ぢや。あれ、見よ。生田の社の左手に屯せる味方の陣は、にはかに色めいて見ゆるも不思議……。（向うを見る。）むゝ、敵は誰か知らねども、たゞ一人にて斬つて入り、多勢を追ひまくつて闘ふは、さだめて名ある勇士であらう。さりとては心憎し。いでや重衡の弓勢を、あづまの奴儕に見知らしてくれうぞ。

（重衡は矢をつがへる。向うより後藤兵衛盛長、烏帽子、鎧にて走り出づ。）

重衡。おゝ、兵衛か。あの敵は何者ぢや。

盛長。なにを申すも亂軍なれば、名乘りも確とは聞えませぬが、兎にもかくにも唯一人にて取つて返し、花々しく闘ふは、敵ながら天晴れの者でござりまする。

重衡。あとにつゞく人數も無く、一人取つて返せしは、ゆに敵ながらあつぱれの者ぢや。見るところ、若武者のやうぢやな。

盛長。年のころは二十一二、むらさき匂ひの鎧着て、箙には今を盛りの梅が枝をさして居ります。

重衡。なに梅が枝をかざして居るとか。矢種をのこらず射盡して箙に花をさしたるは、優にやさしき武士な。あづまの夷にも風流はありけるよ。（打笑む。）かほど優しき武士を、遠矢にかけて射止むるは、あまりに哀れを知らぬに似たり。（つがへたる矢を外す。）味方數萬騎が控へし中へ、かれ一人駈け入りたればとて、なにほどの事をや仕出すべき。やがては疲れて退くであらう。たゞ捨置きて彼に功名させよ。

盛長。では、このまゝに敵を見捨てゝ……。

重衡。おゝ、八幡太郎が貞任を見逃した例もある。敵ながらもあたら武士を無益に殺すな。兵衛まるれ。

盛長。はあ。

（重衡は向うを見かへりつゝ去る。盛長も軍兵等も去る。幅鐘の音さわがしく、梶原源太は箙に梅が枝を負ひ、太刀をぬき持ちて走り出づ。）

源太。敵も見よ、味方も聞け。これは相模國の住人、鎌倉權五郎が末葉、梶原源太景季候ふ。親兄弟のゆくへおぼつかなさに、再び取つて返せしぞや。われと思はん人々は、出で合ひたまへ、寄合ひ候へ。

（大音に名乘る。城方より菊池三郎高國、大童、鎧にて長巻を持ち、軍兵大勢を率ゐて出づ。）

高國。あたら若武者を殺すなと、中將殿の仰せなれど、われから名乘つて通るものを、見逃さんは云ひ甲斐無し。おのれ、討取つて大將の見參に入れうぞ。

源太。　いしくも申されたり。坂東武者が手並のほどを、近う寄つて御覧あれ。

高國。　それ。

（平家の軍兵は一時に切つてかゝる。源太は梅の林をめぐりつゝ、さん〳〵に闘ふ。落花ばみだれて吹雪のごとし。高國も長巻を揮つて打つてかゝり、双方烈しく闘ひしが、高國は支へかねて下のかたへ退くを、源太もつゞいて追うてゆく。上のかたより重衡と盛長再び出づ。）

重衡。　彼の若武者は梶原源太と名乗つたやうぢやな。

盛長。　はあ、源太景季と申しました。

重衡。　あれ、見よ。箙の花は太刀風に亂れて散るわ。「吹く風をなに厭ひけん梅の花、ちり來る時ぞ香はまさりける。」古歌のこゝろも忍ばるゝなう。

盛長。　仰せの通り、花を散らして香を殘すが、勇士の本意でございませう。

重衡。　けに梶原はあつぱれ勇士ぢや。

（重衡は盛長と顔をみあはせて感嘆す。）

（三）

舊の一つ家。

（甚五兵衛は梅が枝をかゝへて出づ。梅が枝は胸に矢を負うたり。）

甚五。　これ、娘、氣を確にせい。それぢやから云はぬことか。軍の場所へうか〳〵と出てゆくから、これ此のやうに流れ矢を……。えゝ、情ないことになつたなう。これ、娘……梅が枝……。傷は淺いぞ。しつかりせい。これ、娘……。

（狂氣の如くに呼び活くれば、梅が枝はわづかに眼をみひらく。）

梅が枝。　父さん。傷は急所ぢや。もう生きられませぬ。

甚五。　えゝ、氣の弱いことを……。何のこれしきのへろ〳〵矢で、めつたに死んで堪るものか。（矢をぬく。）城の方から射出したからは、これは正しく平家の矢ぢや。むすめは平家の矢に射られて……。誰が射た矢か知らぬけれど、大事の娘をむごたらしう……。おれも今までは陰ながら平家の贔屓をしてゐたが、もうこれからは平家は仇ぢや。

（甚五兵衛は城のかたを睨みてその矢を折つて捨つ。）

梅が枝。　いえ、いえ、平家も源氏も隔てはない。このまゝ死んでも恨みはござらぬ。なう、父さん。

甚五。　なんぢや。

梅が枝。　わたしと一緒に育つたあの梅の樹を、けふまで親子が大事にかけて、一枝もおろさずに捨てゝ置いたを……。さつきあの若武者に望まれて、わたしが手づから一枝折つた。

甚五。　おゝ。

梅が枝。　あのお方の簾の花もおほかた今頃は散つたであらう。その花の主も散らねばならぬ。

甚五。　ほんにこれまで大事に育てゝ、誰にも折らせたことの無いあの梅を、そなたが手づから折つたといふは、われと我が魂を人にさゝげたも同じこと。かうなり行くも自然の約束であらうか。

梅が枝。　わたしは疾うに諦めてゐる。父さんも歎いてくださるな。

（云ひつゝ弱りゆくを、甚五兵衛は抱き起す。）

甚五。　これ、娘……娘……。

梅が枝。　父さん……あの梅を一枝……。

甚五。　折つてくれといふのか。待て、待て。

（甚五兵衛は鉈を把り、更に梅の一枝をうち折りて持ち來る。）

甚五。　これ、娘よ。そなたが思ひをかけたらしい源氏の若武者は、この花を簾にかざして、今頃はさぞ勇ましう働いてゐるであらう。そなたの魂もあのお方の影身に添うて、かたきをじ

梅が枝。　ほすやうに祈つてくれ。よいか。

甚五。　父さん……。花は……。

甚五。　それ、こゝにある。

（梅が枝は梅の枝を抱きて倒る。）

甚五。　おゝ、こりやもう娘は死んだ。

（甚五兵衛は地に坐して、梅が枝の死骸をぢつと眺めてゐる。梶原平三景時、四十餘歳、引立烏帽子、紺絲の鎧をきて弓を持つ。梶原平次景高、十九歳、大童、卯花かどしの鎧を被て長巻を持つ。ほかに家來數人つゞいて出づ。）

平三。　先刻引足となつたる時、敵は激しく追ひ縋うて來るために、路なき路をふみ分けて、兎もかくも本陣まで戻りしが、源太のすがたの見えぬは心もとなく、再びこゝまで取つて返した。

平次。　さるにても兄上のありかの知れぬは……。もしや深入りして敵に圍まれしにはあらざるか。

平三。　われもそれを案じて居るのぢや。兎もかくも急げ、急げ。

（平三等は家の前に來る。）

平次。こりやそこに居る者にたづねたい。唯今こゝらへ年の頃は二十一二歳、むらさき匂ひの鎧きたる坂東武者が往來するを見ざりしか。どうぢやな。

甚五。（見かへる。）年の頃は二十一二……紫にほひの鎧……。

平三。さうぢや。そちは知らぬか。

甚五。はい、存じて居りまする。その若武者なら小半時も前に、一旦こゝまで退いてお出でなされましたが……。

平次。むゝ。

甚五。あの梅の枝を箙にさして、又もや城の方へ引返して……。

平三。さては源太は二度の駈か。

甚五。多勢のなかへ切込んで、それはそれは目ざましい働きをなされました。

平次。して、その安否は知れぬか。

甚五。亂軍なれば其後の御安否はわかりませぬ。

平三。よし。この上は一刻も猶豫はならぬ。ものゝふが命を輕んじて敵陣に向ふも、子孫の後榮を思へばこそぢや。源太を討たせて何かせん。平次もつゞけ。

平次。はあ。

平三。者共まゐれ。

（梶原主從は走りゆかんとする時、上のかたより梶原源太走り出づ。）

平三。おゝ、源太か。

平次。兄上、御無事でござつたか。

源太。おゝ、父上……。弟も恙なかりしか。

平三。其方の姿がみえざれば、再び引返して尋ねにまゐつた。

源太。さうとは知らず、それがしもお前樣方をたづぬる爲に、おなじく引返してござりまする。

平三。たがひに無事を知らざれば、親は子を尋ね。

源太。子は親をたづね。

平次。弟は兄を尋ねて居りました。

平三。兎も角も無事で重疊。（家來を見かへる。）みなも喜べ。めでたいなう。

家來一同。おめでたう存じまする。

（皆々よろこぶ。甚五兵衛はなみだを拂ひて進み出づ。）

甚五。もし、源太様とやら。箙の梅はいかゞなされました。

源太。おゝ、主人か。（箙の枝を取りてみる。）先刻よりのたゝかひに、花もおほかたは散り果てた。

甚五。その花の主も散りました。（梅が枝の死骸を指さす。）

源太。なに花の主が散つたとは……。

甚五。いくさの模様が氣がかりと、止めるのも肯かずに駈け出してゆく途中、城から射出した流れ矢にこれこの通り胸を射られて……。

源太。むゝ。（死骸に進み寄る。）では、この娘は流れ矢で……。むすめが情のこの花も、今は手向けの花となつたか。

（死骸と梅の枝とを見くらべて嘆息す。河越次郎定清走り出づ。）

次郎。梶原どの、これにござありしか。搦手に向はれし判官殿は、ひよどり越えの難所を下りて逆落しに寄せられましたぞ。

平三。むゝ。

次郎。されば大手もこの圖を外さず、惣懸りに押寄せよと、大將よりの御觸れでござる。

平三。委細承知仕つた。お使者大儀……。

次郎。御免。

（次郎は引返してはしり去る。）

平三。搦手の判官どのに先を越されては、われ〳〵が弓矢の名折れぢや。いでや、方々。

家來一同。はあ。

（平三を先に家來どもは上のかたへ走り去る。源太は默して立つ。平次は行きかけて見かへる。）

平次。兄上、兄上……。搦手は既にひよどり越えを下つたと申しまするぞ。

源太。おゝ、源太もあとより續いてゆくわ。

平次。さらばお先へ……。

（平次も急ぎて上のかたへ走りゆく。陣鐘の音きこゆ。）

源太。なう、主人。われ等が箙にかざせし枝は、落花微塵と相成つた。むすめが抱きしその枝には、最期の息が通うて居らう。その枝とこの枝とを換へて源太が申受け、再び挿頭の花と見ようわ。それがせめてもの追善か。

甚五。はい。

源太。うきふしも知らぬ東の夷、風流をわきまへぬ下臈よと、みやこの殿儕に笑はれんも口惜しく、えびらに盛りの花をかざして、えせ風流の化粧軍、何のこれが譽れにならう。由なき花の所望して、あたら一人の女子を殺した。

甚五。そのお詞をうかゞひましたら、娘も定めて草葉のかげで……。左様なればこの枝を……。

（甚五兵衛はむすめが抱きたる梅の枝を取りて源太にさゝげる。源太はわが持つたる枝と取り替へて、たがひに顔をみあはせる。陣鐘の音又きこゆ。）

源太。おゝ。（上のかたを見る。）主人、さらばぢや。

甚五。はあ。

源太。（梅の枝を籠にはさむ。）源太が生きて還らばかさねて逢はう。生死さだめぬ戰の庭。これが別れとならうも知れぬに……。せめて娘のなきがらに……。

甚五。御回向なされて下さりますか。

源太。おゝ、

（甚五兵衛は梅が枝の死骸をだき起す。源太はひざまづきて拜す。陣鐘の音きこゆ。）

幕

白虎隊

明治四十一年七月作。同年九月。明治座初演。
大正五年六月改作、同年八月。歌舞伎座上演。

改作上演當時の主なる役割――瀧澤七之丞（中村又五郎）白河千太郎（市川壽美藏）白河萬次郎（河原崎長十郎）佐藤源之助、白河小左衛門（市川猿之助）大川彦次郎、鐘撞番人作兵衛（市川左團次）娘お鶴（市川松蔦）白河の母お道（澤村源之助）召仕お松（吾妻市之丞）刀鍛冶光行（市川左升）漆細工師長次（市川荒次郎）朝日嶽鶴之助（市川九藏）など。

登場人物――瀧澤七之丞。白河千太郎。白河萬次郎。佐藤源之助。西田新七。河村雄三郎。森田八彌。貝賀彌四郎。早瀬虎吉。黑川元彦。中村健次。水上小一郎。大寺鐵之丞。都築八十次。安積武丸。廣田十作。檜原四郎。柳井多門。秋元勝藏。大川彦次郎。刈屋彌之助。竹村伊織。鐘撞番人作兵衛。作兵衛のむすめお鶴。白河の母お道。白河の召仕お松。刀鍛冶光行。漆細工師長次。町人源藏、五助、傳八、多吉、七兵衛、六右衛門。町の女房お民、その悴六松。町の娘おきよ、おかめ、お花。朝日嶽鶴之助。瀧澤小左衛門。會津の武士厚見二十郎。會津の武士浦邊新吾。ほかに町人、歩兵など。

第一幕

（一）

白虎隊

奥州會津、若松の城下、大手前の鐘撞堂。上の方に石垣を高く積みたる鐘撞堂ありて、屋根は板葺なり。堂につゞきたる舞臺のまん中に銀杏の大樹あり。下のかたに古き茶小屋あり。明治元年八月廿二日の夕刻。

（刀鍛冶光行、漆細工師長次、町人源藏、五助、傳八、町の女房お民、町の娘おきよ、おかめ、ほかに町の男女大勢たゝずむ。湯川の水の音きこゆ。）

大勢。　早打だ、早打だ。

（皆々捨臺詞にてがや〳〵云ひながら向うをみる。向うより人夫大勢に舁せたる早打の乘物一挺が宙を飛ばして走り來る。）

源藏。　早打はなんでござるな。

五助。　よい事か、悪いことか。

大勢。　聞かして下され。聞かしてくだされ。

（乘物の前後を圍みて、あわたゞしく問ふ。人夫等は答へずに『え、、退け、退け。』と突き退けて一散に上のかたへ走り去る。みな〳〵不安らしく顔をみあはせる。）

光行。　（老人の詞しづかに。）けふはこれで二度目の早打ぢや。

お民。　どう云ふ知らせか、心がかりでござるなう。

おきよ。　早打の聲を聞くたびに、胸がどき〳〵してならぬ。

おかめ。　やつぱり軍の知らせでござらうか。

長次。　いづれ越後口か白河の御注進であらうが、早く樣子が聞きたいものだ。

（番小屋より鐘撞番人作兵衞、五十餘歳、袖の狹き着附、モンペ、藁草履。娘お鶴十七八歳、素足、藁草履にて出づ。）

作兵衞。　早打がまた着いたか。（獨り言のやうに云ふ。）

光行。　今もその噂をしてゐる所ぢや。いづれ越後か白河からの早打であらうが、萬一味方の負となつたら、それこそ大事ぢや。なう、作兵衞どの。

作兵衞。　おゝ、大事とも、大事とも……。敵は山海嘯のやうな勢ひで、四方八方から押寄せて來るでござらう。いつぞやあの湯川が切れたときには、この御城下一面の水となつたが、今度は御城下が火になりませうぞ。

源藏。　思へば〳〵おそろしい事だ。

五助。　もし然うなつた曉には　わし等は一體どうしたらよからうな。

作兵衛。今となつて何のうろたへることがあるものか。それについて、先頃も已にお觸れが出て、萬一御城下で軍がはじまるやうな時節には、一刻も早く家財を取りまとめて、坂下か喜多方の方へ落ちろとあるのだ。

長　次。ほんにさうであつた。では、作兵衛どのも其支度をさつしやれたか。

作兵衛。いや、わしは動かぬ。このお城の落ちぬあひだは、死んでもこゝを動かぬつもりだ。

皆　々。とはまた何故だな。

作兵衛。この大手前の鐘といふのは、御先祖様御入國以來、御城下の町人をはじめ、近郷近在の民百姓に、よるは寢よと教へ、朝は起きよと告ぐる大事の鐘で、この鐘の音の絶ゆるときは會津のお家のほろぶる時ぢやと、昔からの云ひ傳へにもある位だ。その大事のお役を承はつてゐる作兵衛が、どうしてこゝを動かれるものか。

光　行。わしは刀鍛冶を家の職としてゐながらも、その會津魂はこなたに及ばぬ。さすがは作兵衛どの、武士にも劣らぬ心掛けぢや。

長　次。とは云ふものゝ、今にもこゝらで軍が始まつたら、鐘どころの沙汰ではあるまいが……。

作兵衛。いや、いや、たとひ火水の眞中であらうとも、子の刻から亥の刻まで一晝夜十二時、必ず違へずに撞いてみせう。わしが死ねば娘が代つて撞く。なう、皆の衆。翌にら軍がはじまつて、いづこの果に逃げ隱れてござつても、この鐘の音の聞えるあひだは、お城は決して落ちぬものと、心丈夫に思はつしやれ。よいか。

源　藏。なるほど、作兵衛どのは立派な覺悟だ。

お　民。それではわたし等は家へ歸つて、萬一の時の支度をしませうか。

作兵衛。おゝ、それがよい。それがよい。

光　行。では、親子の衆。また逢ひませうぞ。

（みな〳〵捨臺詞にて上下にわかれて去る。）

お　鶴。もし、父さん。今お前が云はれた通り、たとひ何のやうなことがあつても、わたし等はこを動かぬのでござりますか。

作兵衛。むゝ、この鐘にはおれたち親子の魂が宿つてゐると思へ。たましひを置去りにして、からだばかりが何處へ行かれようぞ。はゝゝゝゝ。

（云ひすてゝ作兵衛は番小屋に入る。風の音、銀杏の葉はら〳〵と散る。鵯、啼く。お鶴はさびしげに暮れゆく空を仰ぎて立つ。下のかたより瀧澤七之丞、十七歳、前髪、大小、袴、草履、鐵扇か

持ちて出で來り、上のかたへ行きかゝる。）

お鶴。　おゝ、七之丞様でござりましたか。

七之丞。　おゝ、お鶴。この夕暮に何をながめて居るのだ。

お鶴。　お城の上で、あれ、あのやうに鴉が啼いて居ります。

七之丞。　人が死ぬるときには鴉が啼くとか云ふぞ。

お鶴。　えゝ、不吉な。なにをおつしやる。

七之丞。　不吉を忌むべき場合でない。今朝より度々の早打、くはしき様子は相分らぬが、おそらく負軍の注進であらう。

お鶴。　えゝ。

七之丞。　今となつては何とならう。上下心を一致して、倒るゝまでも闘ふよりほかはあるまい。會津鍛冶に打たせた此の刀に、血をそゝぐべき時節は今だ。

お鶴。　御もつともでございます。父さんは鐘撞のお役、たとひ何處で軍が始まらうとも、お城の落ちぬあひだは決してこゝを動かぬと申して居りました。

七之丞。　それでこそ會津の魂だ。かへすがへすも大事のお役を忘るな。（空を仰ぐ。）おゝ、いつの間に

か暗くなつた。秋の日はみじかいな。

お鶴。　どうやら雨を催してまゐりました。して、これから學校へお越しでございますか。

七之丞。　なにか申渡すべき筋あれば、一同打揃うて日新館へあつまれと火急の御觸れだ。

お鶴。　では、もしやお前様……。

七之丞。　出陣せいとの御沙汰かと思はるゝが、それは我々の望むところだ。時誼に因つては遅くも明日、あるひは今夜のうちにも出陣いたすやうにならうも知れまい。お鶴、お前とも稚い頃からの馴染であつたな。

お鶴。　わたくしが東山道で、山犬に取巻かれて泣いてゐるところへ、お前様がお通りなされて、その鐵扇で山犬を追拂つて下されたこともございました。

七之丞。　わしが湯川で鯉を釣つてゐるところへ、お前がうしろから忍んで來て不意に驚したので、折角の魚を釣り落して、わしが大層怒つたことがあつた。

お鶴。　むかしのことを考へますと、なんだか夢のやうでございますな。

七之丞。　いや、思はぬ立談に時が移つた。（行きかゝりて見かへる。）親子ともに達者で暮せ。

（七之丞は上の方に去る。お鶴はうつとりと見送る。）

作兵衛。（小屋の戸を明けて、半身を露す。）これ、お鶴よ。いつまで外に立つてゐるだ。何だかぱらぱら降つて來たではないか。

お鶴。おゝ、ほんにいつの間にか雨になりました。

作兵衛。それだから云はぬことか。この頃は秋の夜風が冷える。まして濕れては身體の毒だ。かぜでも引かぬやうに内に這入れ。

お鶴。あい。あい。

（お鶴は内に入りて戸をしめる。雨の音。向うより江戸の力士朝日嶽鶴之助、菅笠、道中合羽、脚絆、わらぢ、一本指にて出づ。）

鶴之助。どうやら斯うやら御城下まで駈け着けたが、このごろの天氣癖で又ばら〳〵遣つて來やあがつた。（空を仰ぐ。）なに、一しきりで止むだらう。どこか其處らに雨やどりをする所はねえかしら。なにしろ不案内の土地だから、日が暮れちやあ見當が付かねえ。（鐘撞堂の前に來りて透しみる。）おゝ、こゝに鐘撞堂があるらしい。いや、御城下の鐘撞堂のことは江戸にゐる時から聞いてゐる。うつかり上つて叱られては詰らねえ。些との間この大きい木のかげに這入つてゐようか。

（鶴之助は銀杏の木かげに入る。上のかたより河村雄三郎、森田八彌、いづれも十六七歳の武家の子息、大小、袴、高下駄、雨傘をさして出づ。下の方より、白河の召仕お松、廿四五歳、雨傘をさし、別に一本の傘をかゝへて足早に出で來り、こゝろ急くまゝに雄三郎に突きあたる。）

雄三郎。えゝ、何者だ。氣をつけろ。

お松。さうおつしやるは川村の若旦那様ではござりませぬか。

八彌。おゝ、白河の召使か。

お松。暗いのと急ぐのとで、つい失禮をいたしました。して、家の御次男様はまだ學校においでなされますか。

雄三郎。いや、萬次郎どのは我々よりも一足先へ戻られた。

お松。もうお歸りなされましたか。それでは途中で行き違ひになつたのでござりませう。俄の雨で傘を持つてお迎ひにまゐりました。

八彌。いや、いや、無駄にはなるまい。この俄雨でお前の主人のほかにも、傘を持たぬ者が大勢あるやうだ。

雄三郎。どうでこゝまで來たからは、誰かに貸して遣つたらよからう。

お松。　ほんに然ういたしませう。

雄三郎。　早く行かぬと間に合はぬぞ。

お松。　はい、はい。では、御免くださりませ。

（お松は急いで上のかたに去る。）

八彌。　あすは血の雨を浴びる我々に、雨を凌ぐ傘などは要らぬ筈だが……。それでもやつぱり濕れたくないな。

雄三郎。　石田三成は最期の朝まで藥を飲んだといふ例もある。事に臨む其時までは、精々わが身を厭はねばならぬと、先生がかねて仰せられたぞ。

八彌。　なるほどお手前の云はるゝ通り、いかなる大事出來いたしても、決して騷がずおどろかず、堅忍不拔の精神を以て、おもむろに事に當るが、この會津の御家風だ。

雄三郎。　併しあまりに落ちついて時におくれては不覺だ。早く戻つて支度をいたさう。

八彌。　さうだ、さうだ。

（ふたりは下のかたに去る。番小屋のうちにて娘の聲きこゆ。）

お鶴。　父さん。もう六つでござりませうぞ。

作兵衛。　（戸をあける。）おゝ、よい臨梅に雨も小降りになつたらしい。

（この聲を聞きて、朝日嶽鶴之助は木かげを出る。作兵衛は鐘撞堂の方へ行かうとして、思はず鶴之助に突きあたる。）

作兵衛。　（透しみる。）誰だ、誰だ。

鶴之助。　わしぢや。料簡さつしやれ。

作兵衛。　詞の樣子では他國者らしいが、このごろは軍の騷ぎで、旅の者の詮議がむづかしい。お前は一體どこから來た。

鶴之助。　わしは江戸から來た者ぢや、決して胡亂な者ではござらぬ。（行きかゝる。）

作兵衛。　これ、待て、待て。逃げるのが猶怪しいぞ。（探り寄つて胸のあたりを摑む。）

鶴之助。　（むつとして。）はて、くどい人ぢや。わしは江戸の朝日嶽といふ者ぢや。

（輕く突き放せば、力餘つて作兵衛は撞と倒れる。）

作兵衛。　え、、怪しい者だ。他國者だ。（喚く。）

（上のかたより佐藤源之助、十六七歳の武家の子息、大小、袴にて傘をさして出づ。）

源之助。　なに、他國者だと……。

（傘を投げすてゝ探り寄り、鶴之助の合羽をつかんで曳き戻す。鶴之助は振拂つて行かんとする を、源之助は又ひき戻して暗がりにて爭ふ。）

作兵衛。　これ、娘。早う火を持つて來いよ。

お鶴。　あい、あい。

（お鶴は附木に火をともして出づれば、風にて火たちまち消ゆ。）

作兵衛。　えゝ、氣のつかぬ。大松明を點して來いよ。

（お鶴はあわてゝ内に入る。上のかたより西川新七、源之助とおなじ年配。おなじやうな拵へにて傘をさして出づ。）

新七。　おのれ曲者。（傘をなげ捨てる。）源之助どの、加勢申すぞ。

（新七も駈け寄つて鶴之助を捕へんとす。）

鶴之助。　喧嘩はほんの行きがかり、決してお手向ひいたす者ではございませぬ。

源之助。　えゝ、今更卑怯なことを申すな。

鶴之助。　わたくしは江戸の朝日嶽……。

新七。　えゝ、だまれ、だまれ。

（源之助と新七は左右から組んでかゝる。鶴之助も持て餘して、遂に人におさへられる。小屋のうちよりお鶴は松明を點して出で、鶴之助を照してみる。）

お鶴。　こゝらあたりには見馴れぬ人。

作兵衛。　相撲取とでも云ひさうな大の男だ。

（上のかたより瀧澤七之丞とお松は傘を持ちて出づ。）

七之丞。　御兩所、そやつは何者でござるな。

源之助。　なにかは存ぜぬが怪しい奴。

新七。　唯今かやうに取押へてござる。

鶴之助。　先刻から申す通り、わたくしは江戸の御屋敷の御抱へ相撲、朝日嶽鶴之助と申す者でございます。

作兵衛。（進み出る。）おゝ、さうだ。江戸の御屋敷の御抱へ相撲に朝日嶽といふ好い男のあると云ふことは、わしも今やつと思ひ出した。そんならこなたが其の朝日嶽か。さうとも知らずに騒ぎ立てたは、年甲斐もない私の粗忽だ。

七之丞。　して、これからいづれへ參るな。

鶴之助。　これから取りあへず白河様の御屋敷をおたづね申さうと存じて居ります。

お　松。　（進み出る。）その白河様はわたしの御主人でございます。

源之助。　とは云へ、胡亂な……。

（七之丞、源之助、新七は詰め寄るを作兵衛は制す。）

作兵衛。　あゝもし、お急きなされますな。（鶴之助に。）どうして來たのか、譯を云はつしやれ。

（七之丞等は顔をみあはせて、まだ不審さうに考へてゐる。お鶴は松明を差付ける。薄く雨の音。）

（二）

會津の藩中、白河屋敷。二重屋體にて、正面上のかたに床の間、東照宮の軸をかけてあり。つづいて出入の襖あり。上のかたに障子屋體あり。庭の上のかたには低き四つ目垣を結ひて、秋草など咲けり。おなじく廿二日の夜。座敷には行燈を置く。

（白河の妻お道、廿五六歳、藥湯を入れたる茶碗を持ちて奥より出づ。）

お　道。　千太郎、目が醒めて居りますか。

（上のかたの障子をあくれば、白河のせがれ千太郎、十七歳、前髪、病人の體にて枕を抱き、蒲團の上に横はる。枕もとに刀あり。）

お　道。　お藥が出來ました。

千太郎。　毎度恐れ入ります。（藥をいただきて飲む。）

お　道。　けふは朝から大分よいやうでありましたが、先刻萬次郎が戻つてから、俄に顔の色が惡くなつたは、負軍の知らせをきいた爲か。勝つも負くるも軍の習。そのやうに氣を落してはなりませぬぞ。

千太郎。　負け軍も勿論口惜しうございますが、猶口惜しいはわたくしが今のからだ。母上、お察しくださりませ。

（千太郎は無念の太息を吐く。母も慰めかねて嘆息す。下のかたの庭口より朝日嶽鶴之助、草鞋穿きのまゝにて、召使お松に案内されて出づ。）

お　松。　唯今途中でこのお人に逢ひまして、御案内をしてまゐりました。

鶴之助。　初めてお目通りを致しますが、わたくしは江戸の相撲、朝日嶽鶴之助と申す者でございます。

お　道。　朝日嶽とはかねて噂に聽いてゐる、江戸のお屋敷のお抱へ相撲ではないか。

鶴之助。　左様でございます。こちらの旦那様が江戸詰めでおいでなされた時には、色々御引立にあづかりました。

お道。　その朝日嶽が何うしてこれへ。

鶴之助。　御存じの通り、わたくしはまだ二段目の尻にゐた頃から、一方ならぬ御贔屓を蒙りまして、今では幕の内の數に入り、會津様のお抱へ相撲と、場所でも幅をきかして居りましたが、思ひもよらない今度の騒ぎで、お國でも軍がはじまるといふ噂、聽いて膽が潰れました。なにしろ、こりやあうか〳〵してゐる時節でない。長年御恩をうけたお屋敷のためには、命を捨てゝも御奉公をせにやならぬと、からだ一つで江戸を脱走して、六十五里の道中を息もつかずに駈付けました。

お道。　それは奇特の志。殿様のお耳に這入りましたら、さぞ御滿足におほしめすであらう。まあ、草鞋をぬいでこれへ上りや。

鶴之助。　では、まつぴら御免下さりませ。

お道。　朝日嶽に茶をくんで來て遣はせ。

お松。　かしこまりました。

（お松は引返して下のかたに入る。鶴之助は草鞋をぬぎて緣にあがる。この間、千太郎は無言にて俯向きゐたりしが俄に咳き入る。お道は立寄つて背をさする。）

鶴之助。　お見うけ申せば若旦那様は、お加減でもお悪いのでございますか。

お道。　生憎に五六日前から風をひいて、大事の御時節にこの始末、實に當惑して居ります。

千太郎。　お家の大事を聞き及んで、江戸表からはる〳〵駈け付ける者さへあるに、現在御城下に住みながら、病のために行歩もかなはず。大事のお役に立たぬとは、よく〳〵武運に盡きた身の上だ。

鶴之助。　でも、多寡がお風でございますから、熱さへ去れば二三日のうちに屹と御全快でございませう。

千太郎。　二三日の後ではもう遲い。いくさは明日に迫つて居るぞ。

鶴之助。　では、もうお國でも軍が始まりますか。なるほど然うでございませう。わたくしが白河へかゝりました時には、軍は疾うに濟んだあとで、噂を聞けばさん〳〵の始末、實に口惜うございました。して、旦那様のお便りはまだお判りになりませぬか。

千太郎。　白河口の手負討死は五百人あまりと申せば、もしや父上にも……。

鶴之助。　え。

お　道。　まだ確には判りませぬが、おほかたは討死と覺悟して居ります。

千太郎。　それにつけてもこの身體……この病が殘念でならぬのだ。

お　道。　あゝ、これ、そのやうに焦れては惡い。

鶴之助。　親旦那様の亡い後は、お前様はいよ〳〵大事のおからだ、御大切になさらねばなりますまい。

千太郎。　大事のお役にも立たぬ無用のからだを、大切にしたとて何になるか。

（千太郎は身を悶えて泣く。奥の襖をあけて弟萬次郎、十四歳、袴を穿きて出づ。）

萬次郎。　をぢ様がお越しでございます。

お　道。　おゝ、兄上が見えましたか。

（席を改むる時、奥よりお道の兄瀧澤小左衛門、四十餘歳、小袖の上に陣羽織、小袴に脚絆を着け、大小にて出づ。）

小左衛。　幸ひに皆揃うて居るな。

千太郎。　をぢ様、お出迎ひも仕りませぬ。

小左衛。　いや、病中苦しうない。そのまゝに致して居れ。

千太郎。　でも、餘り失禮でございますれば……。

（千太郎はお道に扶けられて臥床を出でゝ下のかたに坐す。）

鶴之助。　瀧澤の旦那様。しばらく御目にかゝりませぬ。

小左衛。　おゝ、朝日嶽か。其方が駈付けたと申すことは悴の七之丞から先刻うけたまはつたが、御奉公神妙のことだ。時に千太郎の容體はどうだな。

お　道。　今日は大分よろしいやうでございますが、何分にも熱がまだ去り兼ねますので……。

小左衛。　それは難儀であらう。（千太郎の顔を見る。）なるほど、血色が良くないの。

お　道。　これでは明日のお役にも立つまいかと、當人は勿論、わたくしも共々に殘念に存じて居ります。

小左衛。　して、軍の模様は如何でございませうか。

委細は萬次郎からも聽いたであらうが、今朝來度々の早打によれば、味方は總崩れ、白河口も越後口もみな敗れた。敵は勝に乘つて當國へ亂入し、すでに猪苗代に向つて寄するとある。素破や大事と思ふにつけても、屈竟の武士どもはみな四方に散つて居れば、なにぶんにも味方の人數が不足だ。就いては十五歳以上の男子は擧つて出陣。十八歳以上み朱雀

隊といひ、十七歳以下を白虎隊と名け、明朝卯の刻を相圖に戸の口の原まで繰出すことに決定いたした。千太郎も當年十七歳、勿論その一人に加へらるべき筈だが、病中とあれば是非もない。母もろ共に御城内へひきあげて、本復の日を待つがよからう。お道、右の次第であれば、家内見苦しからざるやうに取片附けて、今宵のうちにお城へまゐれ。かういふ御沙汰もござりませうかと、家内は疾くに取片附けて置きましたれば、何時なりとも引揚げます。

お　道。　（この中、千太郎は頭を垂れて聽きゐる。萬次郎は兄の袖をひく。）

萬次郎。　兄様。

（千太郎答へず。萬次郎再び呼ぶ。）

萬次郎。　兄様。わたくしは何歳でござりませうな。

千太郎。　おのれの年を人に問ふ者があらうか。おまへは卯年の生れ、當年十四歳ではないか。

萬次郎。　いえ、わたくしは寅年の生れ、十五歳でござります。

千太郎。　なに、十五歳だと……。

萬次郎。　十五歳でござりませうが……。

（意味ありげに兄の顔を見あぐれば、千太郎は思はずほろりとして其手を取る。）

千太郎。　おゝ、弟。よく申した。なるほど、お前は十五歳だ。をぢ様、お聞きなされましたか。萬次郎は十五歳だと申します。

お　道。　十五歳ならば白虎隊。そんならお前は……。

小左衞。　よい、よい。まことは十四歳の萬次郎、十五歳と申立てゝ軍に出づるは上をあざむくには似たれども、あまり健氣な甥に免じて、人數あらためは伯父の役、飽までも十五歳と取りなして、白虎隊の列に加へてつかはす。その心得にて支度をいたせ。

鶴之助。　（手をうつ。）いや、恐れ入りました。自分の年を多く云つて、いくさのお供に立たうとは、さすがは白河の御子息様、立派な御覺悟でござります。

小左衞。　をぢも褒めて遣はすぞ。

萬次郎。　ありがたうござります。

千太郎。　（屹となる。）伯父様。

小左衞。　なんだ。

千太郎。　生甲斐もない千太郎。唯今切腹仕つります。なにとぞ御介錯を……。

小左衛。　えゝ、若年とは申しながら、あまりに前後をわきまへぬ不覺者め。いくさは明日に限ると思ふか。日本中を敵として、根かぎりに戰はねばならぬ今度の軍、味方は一人でも大切な場合に、犬死して何とする。その狼狽へた性根では、腹を切つても血は出まいぞ。

千太郎。　うろたへ者とのおしかりは重々御道理でございます。それを辨へぬわたくしではございませぬが、明日の軍はわれ〳〵の初陣、從弟同士の七之丞殿を始めとして、これまで一つ學校で机をならべた朋輩が、揃ひの陣笠、揃ひの軍服で、みな一様に打つて出る、その中でわたくし一人……。（云ひかけて烈しく咳き入る。）をぢ様……伯父様……。お察し下さりませ。

お道。　お前の氣質としては然うあらうが、をぢ様の仰せの通り、急く所ではありますまい。

萬次郎。　死ぬのはいつでも死なれませう。

鶴之助。　まあ、まあ、お待ちなされませ。

（皆々止める。奥よりお松は小左衛門と鶴之助に茶を持つて出づ。）

お松。　皆様の前でわたくしどもが差出たやうではございますが、若旦那様がお腹を召すなどとは飛んでもないことでございます。又うけたまはれば御次男様は、軍にお出でなさるとやら。そりやもうお家の爲で致方もございますまいが、こんな前髪の子供衆までも驅出して、刀や鐵砲の楯にするとは、あんまり慘らしいやら悲しいやらで、どうも泣かずにはゐられませぬ。

鶴之助。　そりやあ私とても同じことで、口でこそ立派なお覺悟とお褒め申してゐるけれど、腹の中ぢやあ泣いてゐるのだ。

（お松と鶴之助はなみだを拭ふ。）

お道。　就てはお松、お前にも長々世話になりましたが、今聞くやうな次第であれば、氣の毒ながら暇を出します。心ばかりの形見の品を遣りませうから、わたしと一緒に奥へまゐるがよい。

お松。　はい。ありがたうございます。

（お道にしたがひてお松は悄々と奥へ入る。時の鐘きこゆ。）

小左衛。　おゝ、わしも登城いたす時刻だ。朝日嶽、其方も皆々と同道して、あとからお城へまゐれ。

鶴之助。　かしこまりました。では、奥へまゐつて、御取片附けのお手傳ひでも致しませう。どなたも御免くださりませ。

（鶴之助は奥に入る。）

小左衛。　おゝ、まだ御拜を怠つて居つた。

（小左衛門は床の間の東照宮の軸う拜して起つ。）

萬次郎、出陣の用意をいそげ。

（千太郎ゐざり寄つて小左衛門の陣羽織に縋る。）

千太郎。　をぢ様、殘念でござります。

小左衛。　（不便と思へどわざと聲暴く。）えゝ、まだ申すか。（振切つて。）わからぬ奴だな。

（小左衛門は奥に入る。千太郎は身悶えして倒る。萬次郎は寄つて介抱す。）

萬次郎、　兄様、いつまでも風に當つてゐては惡うございます。些とお休みなされませ。

千太郎。　寢よと申したとて寢て居られるか。萬次郎、おまへは羨ましい。それに引きかへて兄の不運、むかしから物の役に立たぬ侍を腰ぬけ侍とは好く云つた。大事の時に足腰の立たぬ、この千太郎はまことの腰拔けだ。唯今をぢ様も云はれた通り、この腐つた體からは、切つても突いても血は出まい。腹を切るのも刀の穢れだ。

（刀をなげ出して無念の涙にくれてゐる。庭口より瀧澤七之丞、河村雄三郎、森田八彌、いづれも白虎隊の服裝、黑の筒袖、袖に合印の會の字を緋羅紗にて縫はせ、裁付、大小、草鞋、小銃を背負ひ、黑塗の陣笠を持ちて出づ。）

七之丞。　千太郎どの、いよ〳〵明日出陣と相成りましたが、御病氣なれば如何と存じて……。

雄三郎。　お見舞かた〴〵おたづね申した。

千太郎、　この通りの腑甲斐ない始末、たゞ〳〵殘念……。殘念でござる。

七之丞。　では、出陣はかなひませぬか。お手前とは從弟同士といひ、且は日頃より仲好しの我々、このたびの軍には、生死を倶にいたさうと存じて居つたに、さりとは殘念な儀でござるなう。

雄三郎。　いかに勇氣にはやつても病には勝たれまい。御心中お察し申すぞ。

八　彌。　われ〳〵は今宵かぎりの命、これが今生のお別れでござらう。

萬次郎。　わたくしが兄の名代にお供いたしますれば、なにとぞ宜しく願ひます。

七之丞。　なに、お手前が……。白虎隊は十五歲以上と承はつたが……。

萬次郎。　をぢ様におねがひ申して、表向きは十五歲と申立てゝ、白虎隊の數に入りました。

七之丞。　いや、あつぱれの覺悟。七之丞感心いたした。お手前も拙者もおなじく日新館には通ひながら、年も違へば稽古も違うて、お手並は篤と拜見したこともござらぬが、失禮ながらそ

の小腕で、見事お役に立ちますかな。

萬次郎。未熟ながら萬次郎の手の内、御覧に入れませうか。

七之丞。むゝ、面白い。御相手いたさう。

萬次郎。唯今道具を持つてまゐります。

（萬次郎は奥に入る。）

雄三郎。明日の軍は戸の口の原だと承はつたが、あすこは平場だ。大勢の敵を引き受けては難儀であらうな。

八　彌。しかし一方には湖を控へて居る。敵も容易には進まれまいぞ。

（奥より朝日嶽鶴之助出づ。）

鶴之助。瀧澤の若旦那。先刻は失禮いたしました。

七之丞。おゝ、危ふく同士討をいたすところであつたな。

（萬次郎は竹刀三本を持つて出づ。）

萬次郎。では、お稽古を願ひます。

七之丞。わしはこれでよい。さあ、参られい。

千太郎。七之丞どのは免許の腕前だ。氣を奪はれて不覺を取るな。面も振らずに打つてゆけ。

萬次郎。はつ。

（萬次郎は庭に飛び降り、竹刀を取つて打つてかゝる。七之丞は鐵扇と陣笠にてあしらひ、遂に鐵扇にて竹刀をおさへる。）

七之丞。年に似合はぬお手並。見事、見事。これでは翌もお手枘をなさるでござらう。

萬次郎。恐れ入りました。

（萬次郎は會釋して退く。千太郎は先刻より羨ましげに伸ひあがりて、勝負を見物してゐたるが、今は堪りかねて思はず叫ぶ。）

千太郎。萬次郎、竹刀を出せ。

七之丞。え、お手前が……。

千太郎。むゝ。あまりに羨ましい。たゞ見物して居るのは殘念だ。（竹刀を杖にして立つ。）

雄三郎。でも、お手前はその體で……。

千太郎。倒るゝまでも打合うて見よう。

八　彌。然らば手前がお相手いたさう。

（八彌は竹刀を把る。千太郎はよろめきながら庭に降り、たがひに打合ふあひだに千太郎の勇氣は次第に加はりて八彌は危くなる。雄三郎も竹刀を把つて打つてかゝり、三人はげしく鬪ふ。七之丞、鶴之助はこれを見てよろこぶ。奥よりお道は一刀を指し、かひ〳〵しき姿にて出で來り、これも眼をはなさずに試合を見物してゐたるが、よき程に聲をかける。）

お　道。　あゝ、これ、勝負はもうよい程にして、早く支度をしませぬか。千太郎もそれではお供ができませうぞ。

（これにて三人は竹刀を引く。）

雄三郎。　病氣と侮つて居つたるところ、思ひのほかなる今の働き。

八　彌。　油斷してあやふく打込まれるところでござつた。

七之丞。　身體健かなる折柄と些とも變らぬ千太郎どの。その御手並をみるからは、最早あやぶむ所はござらぬ。

鶴之助。　芝居でする躄勝五郎の足が立つたも同樣で、こんな嬉しいことはございませぬ。

（皆々よろこぶ。千太郎も我ながら不思議さうに我身を見まはす。）

千太郎。　今の今までは身動きさへも自由でなかつたに……。どうしてこんなに働けるか。

鶴之助。　どんなに力のない者でも、いざ火事だといふ時には、重い物をかつぎ出すと同じ理窟で、からだの働きよりも心の働き、なんでも氣の持ち樣でござりませう。

七之丞。　まつたく心の働きであらう。なんにしても目出たいことだ。

（鶏の聲きこゆ。）

七之丞。　おゝ、一番鶏がもう啼くぞ。

お　道。　兄弟ともに支度をしや。

萬次郎。　では、兄樣も……。

千太郎。　おゝ、お前と一緒に……。（弟の手を取る。）軍に出ようぞ。

（みな勇んで起つ。鶏の聲つゞいてきこゆ。）

―幕―

第二幕

白虎隊

戸の口の原。正面は猪苗代の湖水を見たる曉のけしき。湖水のほとりには高き蘆一面に生ひし

げりて、舞臺には芒その他の秋の草花みだれたり。廿三日のあかつき。

（中央に篝火を焚きて、佐藤源之助、西田新七、貝賀彌四郎、柳井多門、早瀬虎吉、黒川元彦、中村健次、水上小一郎、大寺鐵之丞の九人、いづれも白虎隊の服裝にて銃を傍に置き、草を敷きてあぐらを掻いてゐる。玄女郎節きこゆ。）

唄〻　玄女郎見よとて朝井戸汲めば、玄女隱しの霧が降る。

（皆々扇にて膝をたゝき、唄の拍手を取つてゐる。水の音低くきこゆ。）

源之助。（空を仰ぐ。）もう東が白みさうなものだが……。

新七。秋の習でこゝらは朝の霧が深いのだ。

彌四郎。武田と上杉とが川中島で戰つたときも、丁度こんな霧であつたらうな。

多門。敵も味方もこの霧の晴れるまでは、たがひに懸ることも出來まいな。

虎吉。この霧がやがて雨になるのではないか。

（皆々暗き空を仰ぐ。）

源之助。かうして敵を待つてゐるのも退屈なものだ。いつそ此方から擊ちかけたら何うであらう。

新七。さうだ。たとひ霧が深くとも我々は土地の案内を知つてゐる。敵の油斷をみて逆寄せにすればよいに……。

元彦。しかし軍令を背いて無暗に懸るわけにも行くまい。

健次。なにしろ早く夜が明ければよいがなう。

源之助。待て、待て。後陣の方で玄女郎節の唄が俄に止んだやうだぞ。見廻りの役人でも來たのではないかな。

新七。なるほど、唄の聲が鎭まつた。

（下のかたより瀧澤小左衞門、前幕のこしらへ、陣笠をかぶりて出づ。みな〳〵形を改める。）

皆々。虎――。

小左衞。龍――。

小左衞。もう、やがて夜が明くるぞ。人數が散つてゐるやうなことはないか。

源之助。この一組は皆揃つて居ります。

小左衞。よい、よい。篝を消せ。

（云ひすて、下のかたへ引返して去る。）

源之助。かゞりを焚いてゐたは我々の不覺だ。早く消せ。早く消せ。

（皆々うち寄りて霧を消す。）

新　七。　なんにしても退屈だな。

源之助。　ゆうべよく眠らぬので何だか眠たくなつて來た。これ、軍が始まつたら起してくれよ。（草の上に寢ころぶ。）

彌四郎。　さりとは大膽な奴だ。（小聲で。）それ、嚇してやれ。嚇してやれ。

（小一郎と鐵之丞はぬき足して源之助の枕邊へゆき、足にて草を強く踏む。）

小一郎。　それ、敵だ、敵だ。

鐵之丞。　敵だ、敵だ。

源之助。　えゝ、いたづらをするな。まあ、些と寢かしてくれ。（又寢る。）

（霧は晴れて湖水は次第に明るくなる。）

新　七。　おゝ、明るくなつた。もう油斷してはゐられぬぞ。（源之助に。）これ、起きろ、起きろ。お好い心持さうに寢入つてしまつたな。

（上のかたより瀧澤七之丞出づ。）

七之丞。　敵はいよ〳〵進軍と見えますぞ。

（上のかたにて小銃の音きこゆ。）

七之丞。　おゝ、もう擊ち出したわ。お先へまゐるぞ。（引返して去る。）

新　七。　それ、各々。

皆　々。　おゝ。

（新七は先に立ち、みな〳〵上のかたへ走りゆく。小銃の音つゞけて聞ゆ。源之助ひとりは矢はり寢てゐる。水の音、西軍の武士刈屋彌之助、筒袖、だん袋の上に蓑笠を着け、おなじく竹村伊織、おなじ拵へにて、正面の蘆のあひだより小舟を漕いで忍び出づ。）

彌之助。　姿をかくして猪苗代の湖水を乘つ切り、やう〳〵こゝまで忍んでまゐつた。

伊　織。　こゝらの枯蘆を燃草にして、敵の陣所へ火をかける計略。仕損じ召さるな。

（ふたりは行きかゝりて、そこに寢てゐる源之助につまづく。源之助飛び起きて刀に手をかける。）

源之助。　何者だ。

伊　織。　（町人風に。）失禮御免くださりませ。

源之助。　蓑の下から鐺がみゆるぞ。待て、待て。

（かけ寄つて引戻す。彌之助は伊織に眼くばせして蓑笠をかなぐり捨て、白鉢卷の姿となりて、無

言に斬つてかゝる。源之助も刀をぬきて激しく闘ふ。下のかたより都築八十次、安積武丸、廣田十作、檜原四郎、秋元勝藏の五人、いづれも白虎隊のこしらへにて出で來り、彌之助と伊織に打つてかゝる。これと同時に、上のかたより貝賀彌四郎、柳井多門、早瀬虎吉は西軍數人と闘ひながら出で、双方混戦となる。上のかたより又もや西軍數人出で來り、白虎隊は遂に追ひ立てられて下のかたに退くを、西軍は追つて入る。彌之助と伊織はあとに殘る。）

彌之助。　かやうな混戦と相成つては、容易に敵の本陣へは近寄れまい。

伊　織。　さりとてこのまゝに引返すも殘念ぢやなう。

（小銃の音はげしく、伊織は彈丸に中りて倒る。）

彌之助。　や、撃たれたか。（立寄つて介抱する。）これ、傷は浅いぞ。しつかり召され。

伊　織。　左の肩を撃たれたと見ゆる。なに、これしきに……。（起たうとして又倒れる。）

彌之助。　一先づ引揚げて手當をなされい。さあ、早く……早く……。

（彌之助は伊織を肩にかけて、もとの小船に乘り移る。上のかたより西田新七は西軍一人とたゝかひながら出で來り、敵を切り倒してほつと息。かみのかたより白河萬次郎、手負の體にて鐵砲を杖にして出で來り、ばつたり倒れる。新七は駈け寄つて、萬次郎をひき起す。）

新　七。　おゝ、萬次郎どのか。暫らく待たれい。

（新七は着物の内隠しより白布をとり出し、萬次郎の足をまいて遣る。白河千太郎は西軍一人と闘ひながら出で、敵を追ひ返して自分も草の上にばつたり倒れる。萬次郎這ひ寄る。）

萬次郎。　兄様、お前もお怪我をなされましたか。

千太郎。　いや、手疵は負はぬが、なにをいふにも病擧句で、息が切れてならぬのだ。

（下の方より佐藤源之助出づ。）

源之助。　どうだ、軍の模様は……。

新　七。　殘念ながら敵は多勢で、この白虎隊ばかりでなく、玄武、蒼龍、朱雀の諸隊、いづれも餘ほどの苦戦と見ゆるぞ。

源之助。　この上は死物狂ひだ。もう一度引返して働かう。

皆　々。　さうだ、さうだ。

（源之助を先に、新七、千太郎、萬次郎、いづれも上のかたへ行かんとする時、上のかたより瀧澤七之丞、河村雄三郎、森田八彌、黒川元彦、中村健次、水上小一郎、夫寺鐵之丞の七人走り出づ。）

七之丞。　殘念だ。

皆　々。　殘念だ。

千太郎。　むゝ。いよ〳〵引揚げか。

皆　々。　總崩れだ。

（皆々顏をみあはせて無念の齒を咬む。小銃の音しきりに聞ゆ。下のかたより瀧澤小左衞門走り出づ。）

小左衞。　この上は籠城。おくれぬやうに皆引揚ゆろ。引揚ゆろ。（云ひすてゝ引返す。）

皆　々。　引揚げだ。籠城だ。

（いづれも混雜して下のかたにゝ入る。舞臺は空虛になりて小銃の音はげしく聞ゆ。纏いて、上のかたにて「琉球へおぢやるなら」と西軍の唄ふ聲きこゆ。

——幕——

第三幕

（一）

大手前の鐘撞堂。但し第一幕とは位置をかへて、舞臺の中央に鐘撞堂、下のかたに銀杏の大樹（番小屋は下手にかくれて見えず。）あり。上のかたは奥深に武家屋敷を隔てゝ若松の城をみる。前幕とおなじ日の午後。

（下のかたより町の女房お民、町の娘おきよは思ひ〳〵に風呂敷づつみを背負ひ、あるひは道具をさげて出づ、お民は男の兒六松の手を引いてゐる。あとより町人源藏も出づ。小銃の音きこゆ。）

源　藏。　たうとう苛いことになつてしまつた。

お　民。　御城内總出の軍だから、けふこそは屹と勝つだらうと思つてゐたに……。

おきよ。　わづか半日か一日でこんなことにならうとは、まるで夢のやうでござるなう。

源　藏。　何しろもうう〳〵してはゐられまい。ちつとも早く立退くが可い。

六　松。　おつかさん、怖いよう。（泣く。）

（下のかたより漆細工師長次、うしろ鉢卷、一本ざし、脚絆、草鞋、身輕のこしらへにて出づ。）

長　次。　みんなはまだ立退かないのか。

お　民。　長次さん、お前さんはどうしてそんな裝をして……。

長　次。　一旦は喜多方の方へ逃げようかと思つたが、又よく〳〵考へると、俺なぞは厄介のない一

人者だ。命を惜んで逃げ隠れるよりも、これからお城へかけ付けて、人足の手傳ひでも何でもかまはぬ、自分に出來さうなお役ならば、精一ぱいに働くつもりだ。

源藏。（手を拍つ。）なるほど、それも道理だ。わたしも逃げるのは止めにして、おまへと一緒にお城へ行かうか。

長次。行くなら早く來るが可い。女達は怪我のないうちに少しも早く立退くことだ。

（小銃の音又きこゆ。）

お民。あれ、また鐵砲の音が……。

六松。怖いよう。

長次。だから早くゆけと云ふのだ。

おきよ。ほんに早う行くとしませう。

（お民は六松の手をひき、おきよと共にあわてゝ上のかたへ逃げてゆく。）

源藏。そんなら私等も籠城しようか。

長次。來い、來い。

（ふたりも急いで上のかたへ立去る。小銃の音また聞ゆ。銀杏のかげより作兵衛出づ。）

作兵衛。もうやがて七つを撞かねばなるまい。

（下のかたより刀鍛冶光行、烏帽子、半素袍にて、槌を持ちて出づ。）

光行。作兵衛どの、殘念のことぢや。

作兵衛。戸口の軍は大負けといふ噂でございますな。

光行。殿様も瀧澤口まで御出張りであつたが、半時ほど前に御城内へお引揚げになつたと云ふから、どうでも總崩れに相違あるまい。

作兵衛。さつきから鐵砲の音が手に取るやうに聞えるから、敵もおひ〳〵に繰込んで來るのであらう。して、こなたはもう立退かつしやるのか。

光行。いや、敵が御城下へ押寄せて、いよ〳〵籠城と相成つたら、刀鍛冶の御用も多からう。わしはこれからお城へゆくのぢや。

作兵衛。おゝ、こなたも籠城か。なるほど、長い籠城と相成つたら、刀鍛冶は大事のお役であらう。せい〳〵働いて御奉公なされ。

光行。むゝ。（打笑む。）わしの御奉公はこれぢや。（持つてゐる槌をみせる。）

作兵衛。（おなじく打笑む。）わしの御奉公はあれだ。（鐘を指さす。）命があつたら又逢ひませう。

光　行。今度逢ふのは地獄かも知れぬぞ。

（光行は上のかたへ立去る。小銃の音いよ〳〵烈しくきこゆ。作兵衛向うをみて再び木かげに隠れる。向うより會津の武士厚見三十郎、廿四五歳、西軍の兵士ふたりと闘ひながら出で、三十郎は敵を追ひて上のかたに去る。つゞいて向うより西軍の兵士三人いづれも銃を持ちて走り出で、おなじく上のかたに走り去る。小銃の音つゞいて聞ゆ。作兵衛は再び木かげを出づ。）

作兵衛。おゝ、おゝ、御城下もたうとう修羅の巷だ。

（下のかたより町の娘おかめは風呂敷包を持ち、妹の手をひいて出づ。）

お　花。姉さん、怖いよう。

おかめ。だから早くお出でといふのに……。

（二人はあわてゝ上のかたへ走りゆく。つゞいてあとより町人六右衛門は風呂敷づゝみを背負ひて走り出づ。）

六右衛。娘やあい、おきよやあい。（呼びながらこれも上のかたへゆく。）

（作兵衛は木の下に立ちて悼ましげにこの混亂のありさまを眺めてゐる。上のかたより會津の武士浦邊新吾、廿五六歳、西軍の兵士ひとりと闘ひながら出づ。つゞいて向うより西軍の武士數人走り出づ。新吾は大勢を相手に闘ひながら再び上のかたに退く。小銃の音ます〳〵烈しくなる。）

（鐘撞堂を見あげる。）もう七つだ。（行きかけて躊躇する。）おゝ、鐵砲玉が雨のやうに飛んで來る。（小銃の音烈しく、作兵衛は思はず地に伏す。）えゝ、こんなこつちやあ埒が明かぬ。（自分を叱る。）えゝ、この意氣地無しめが……。こんなことで、これから毎日のお役が勤まるか。（小銃の音はげしく、作兵衛は思ひ切つて石段を登りかけて向うをみる。）おゝ、おゝ、敵はもう瀧澤口まで一面に押寄せて來た。（又上の方をみる。）併しまだお城は落ぬぞ。このお城がめつたに落ちて堪るものか。このお城が落ちぬあひだは、この鐘も屹と鳴つてゐるぞ。

（作兵衛は堂に入りて撞木に手をかけようとする時、小銃亂發、作兵衛は彈にあたりて石段の上に倒れ、再び這ひ起きんとする時、又もや小銃の音はげしく、作兵衛は石段を落ちてまた倒る。）

作兵衛。

（二）

飯盛山の麓、正面に古びたる墓茸屋根の辨天の祠ありて、祠の前には杉の大樹二本が華表のやうに列びて立つ。うしろは山つゞきにて樹木深く、上のかたには山頂へのぼるべき坂路あり。下のかたには山を穿ちたる大いなる洞穴あり。猪苗代湖の支流はこの穴より落ち來りて山下の湯川に

そゝげり。

（町人傳八、多吉、七兵衛の三人が不安らしく立つてゐる。ほかにも町人百姓等四五人たゝずむ。その中に白河の召使お松もまじりて立つ。）

お松。　もし、軍はどうしても負けでございませうか。（心配さうに訊く。）

傳八。　おゝ、おまへは白河様のお松どのか。わしもまだ詳しいことは知らぬが、なんでも戸の口のいくさは總崩れといふ噂だ。

お松。　では、わたしの家の若旦那様達も、もしや御怪我でもなさりはしまいか。

多吉。　なるほど、お前の屋敷では、御兄弟とも白虎隊に加はつて、けふの軍に出なすつたのだな。

お松。　わたしはきのふお暇になつて、すぐに在所へ戻らうかと思ひましたが、あんまり心配でなりませんから、朝から方々をうろ〳〵して、軍の模様を訊いて居ります。

七兵衛。　お前はふだんから主思ひだから案じるのも道理だが、何をいふにもこの騒ぎでは、安否もちよつくら判るまいよ。

お松。　情ないことになりましたな。（泣く。）

（向ふより作兵衛のむすめお鶴、走り出づ。）

お鶴。　もし、もし、軍の模様は判りませぬか。なんでも負ぢやと聞きましたが……。

（小銃の音きこゆ。）

傳八。　さあ、それだから案じてゐるのだ。

お鶴。　今朝から鐵砲の音が休みなしに聞えてゐたが、だん〳〵近くなりましたな。

お松。　敵がおひ〳〵に繰込んで來るのではあるまいか。

（皆々顔をみあはせて、いよ〳〵不安の體。向うより町人五助走り出づ。）

五助。　皆なはなんでこんな處にうろ〳〵してゐるのだ。敵はどん〳〵繰込んで來て、町ではどこの家も逃支度だ。ぐづ〳〵してゐたら逃路がなくなるぞよ。

お鶴。　では、いよ〳〵敵が繰込んで來ましたか。

五助。　おゝ、お鶴どの。お前はまだ知らぬか。父さんはたつた今……。

お鶴。　え、父さんが……。（おどろきて向うを見る。）

五助。　それ彈に中つて鐘撞堂の下に倒れてゐた。

傳八。　なに、作兵衛どのが鐵砲に撃たれた。いや、それは大變だ。

多吉。　まご〳〵してゐると、今度はこつちの番だ。

五助。　ちつとも早く逃げるが可い。なんでも白虎隊の侍衆も、ぬけ道傳ひで此方へ落ちて來るといふ噂だ。

（お鶴は思はず進み出る。）

お鶴。　え、白虎隊がこゝへ……。

七兵衛。　さうなつたら又こゝでも軍が始まらうも知れない。いよ〳〵うつかりしてはゐられぬ譯だ。

（小銃の音また聞ゆ。）

傳八。　こりやもう堪らぬ。

五助。　さあ、逃げさつしやれ、逃げさつしやれ。

皆々。　逃げろ、逃げろ。

（皆々うろたへて逃げ去る。お鶴とお松はあとに殘る。）

お松。　こりやいよ〳〵情ないことになつてしまうた。もし、お鶴どの。おまへは何うするつもりでござんすえ。

（お鶴は答へず、ひとり言のやうに云ふ。）

お鶴。　白虎隊がこゝへ來るとあれば、瀧澤の七之丞様も……。

お松。　七之丞様よりもわたしの若旦那様は、どうなされたであらうな。

（お鶴は答へず、矢はり獨り言。）

お鶴。　こゝに待つてゐたならば、その御安否も判るであらう。もし御怪我でもなされたら、どこへなりともお供して、できる限りの御介抱をせねばなるまい。

お松。　どんなお怪我でもお命さへあれば、手をひいても負つてもお連れ申すが、作兵衛どのゝやうに彈に中つては……。

お鶴。　（はつと心付く。）おゝ、父さん。父さんは……敵に擊たれてしまうた。日ごろ父さんの云はれたには、鐘を撞くのは大事の役、あの鐘の音の絶えぬあひだは、お城の落ちぬといふ知らせ……。ほんにさうぢや、あの鐘の音がきこえぬ時は、四方に散つてゐるお侍衆や、御領内の百姓衆までがお城は落ちたと思ふであらう。これから父さんになり代つて、わたしが撞かねばなるまいか。（ゆきかけて又立とまる。）とは云へ、わたしが行つてしまうた跡へ、白虎隊の方々が……。あの七之丞様が……。いや、いや、父さんの死顏も、鐘を撞く役も……。（ゆきつ戻りつ思ひ惱む。）あゝ、からだが二つが欲いなあ。（身を悶えてそこに坐る。）

（小銃の音また聞ゆ。）

お松。　おゝ、また鐵砲の音が近くなつて來た。こゝにうか〳〵してゐてはあぶない。これ、お鶴どの。お鶴どの。兎も角もこのお祠のかげへ……。

（お松は辨天の祠のうしろに隱れる。お鶴はぢつと思案してゐる。下のかたの洞穴のなかより澤七之丞、亂髪に白の鉢卷、小銃を背負ひて忍び出で、水をわたりて辨天堂の前に來る。）

七之丞。　おゝ、そこにゐるのはお鶴でないか。

お鶴。　おゝ。七之丞樣。（夢かとばかりに駈寄る。）御無事でござりましたか。

七之丞。　無事は無事だが、軍は負けた。お鶴、もう何時であらうな。

お鶴。　さあ、やがて七つでござりませう。

七之丞。　では、鐘のきこゆる頃だな。

お鶴。　その鐘を撞く父は鐵砲に撃たれました。

七之丞。　おゝ、作兵衛は撃たれたか。（嘆息する。）ほかに代つて撞く者はないか。

お鶴。　わたくしが撞きます。

七之丞。　おゝ、左樣か。

（早くゆけと眼で知らせる。お鶴は心のこりの風情にて行き淀む。）

お鶴。　して、お前樣はこれから何うなされますする。

七之丞。　餘の人々をこゝに待ちあはせて、生死進退を俱にする覺悟だ。もうお前にも逢はれまいよ。

（お鶴は泣き伏す。進軍の喇叭の音聞ゆ。七之丞は屹と向うをみる。）

七之丞。　敵の大軍寄せ來るとも、お城の落ぬといふ知らせの鐘、時を違へずに撞かねばなるまい。

お鶴。　でも、このまゝお別れ申すは……。

七之丞。　（聲を勵まして。）鐘を撞くのはお家の爲だぞ。

お鶴。　はつ。（起ちあがる。）女の腕の弱くとも、親子のたましひが宿りし鐘、この御城下はいふも愚、天にもひゞけと撞きませう。

七之丞。　むゝ。早くゆけ。

お鶴。　はあ。

（お鶴は一散に駈けてゆく。七之丞はぢつとあとを見送る。洞穴の中より白河千太郎は銃を背負ひ、弟の萬次郎は手負にて手足を白布にて卷き、青竹を杖にして忍び出づ。）

千太郎。　七之丞どの。

七之丞。　千太郎どの。案内知つたる猪苗代の抜道づたひに、二里あまりの路を落ちてまゐつたが、

千太郎。　幸ひに敵にも見咎められず、兎もかくもこゝまで到着いたした。
暫時これにて休息して、おくれたる味方を待つといたさうか。
（七之丞は洞の縁に腰をかけ、千太郎兄弟は切株に腰をかけ、濡れたる着物を絞りなどしてゐる。洞穴のなかより佐藤源之助、西田新七出づ。）

源之助。　各々、お早うござつたな。

千太郎。　引揚げの混雑で、一々お打合せも致さざりしが、餘の人々も皆このぬけ道から參られまするか。

源之助。　いや、山越しで落ちてまゐる人もある筈。

新　七。　いづれにしてもまだ十五六人はこゝで落合ふことでござらう。

七之丞。　お城を出づる砌には、わが白虎隊も七十餘人でござつたが、廿餘人は討死し、他は散亂してゆくへも判らず。

千太郎。　無事にこゝまで引揚げし者、わづかに二十人に過ぎぬとは、殘念至極の儀でござるなう。

源之助。　なにを申すも敵は大軍、薩長土の三藩を先手として、大垣大村諸藩の兵、殊に大筒もあまた持つて居れば、平場の軍では敵對がならぬ。

新　七。　斯くさん〳〵に打ち破られたも、あながちに我々の不覺とのみは申されまい。

萬次郎。　とは云ふものゝ、軍に負けるは口惜いものでございますな。

源之助。　勿論だ。わしも胸が沸返るやうに思ふぞ。しかし力を落すまい。今日負くれば翌また戰ひ、あすも負くれば明後日また戰ひ、最後の一人となるまでも、根強く堪へる覺悟が大事だと我々は常に敎へられて居るぞ。

千太郎。　人はうはべの勇氣よりも底力が無うてはならぬぞ。萬次郎、お身のからだにも東北武士の血が流れて居らう。

萬次郎。　恐れ入つてござります。
（洞穴より河村雄三郎、森田八彌、貝賀彌四郎の三人出づ。）

七之丞。　おゝ、追々にあとから參らるゝな。

雄三郎。　こゝまでまゐれば一先づ安堵。

八　彌。　餘の人々も山越しに……。

彌四郎。　やがて追ひ付くことでござらう。
（小銃の音近く、喇叭の音きこゆ。）

千太郎。　むゝ、あの喇叭は。

源之助。　進軍の合圖ではあるまいか。

新　七。　敵はいよ〳〵近づきましたな。

七之丞。　勝に乘つて戸の口から、この御城下まで平押に、押してまゐつたに相違あるまい。

源之助。　兎も角もあれへまゐつて物見を致さう。

皆　々。　むゝ。

（皆々急ぎて上のかたの坂路を登りかける。洞のかげよりお松は走り出で、伸び上りてそのうしろ影を見送る。喇叭の音。）

（三）

道具は前の鐘撞堂。喇叭の音、小銃の音。

（堂の下には菰を着せたる作兵衛の死骸が横たへてあり。町人傳八、多吉、七兵衛が死骸を取りまいてゐる。）

傳　八。　久しい馴染の作兵衛どのだ。せめて死骸だけでも始末して遣りたいものだ。

多　吉。　どこか近所のお寺へ運ばうではないか。

七兵衛。　それが可い、それが可い。

（小銃の音きこゆ。三人はあわてゝ作兵衛の死骸を下のかたへ運びゆく。向うより西軍の兵士二人が銃を持ちて走り出で、上のかたに去る。やがてあとよりお鶴は息を切つて走せ來り、鐘撞堂の前へ來りてばつたり倒れしが又起き上り、番小屋へ入るこゝろにて下のかたへ行きて柄杓の水をくみ來り、水を飲みてほつゝと息、上のかたより西軍の兵士一人出で來るに、お鶴はあわてゝ銀杏のかげに隱れる。兵士は一散に向うへ走り去る。お鶴は再びうかゞひ出で、鐘撞堂をみあげて柄杓を投げ捨て、石段を登らんとするも息疲れて歩みがたく、幾たびか躓きつ起きつ、やう〳〵に這ひあがりて柱に取付く。）

お　鶴。　七之丞様は……。

（向うより見てうつとりなる。小銃の音また聞ゆ。お鶴は屹と氣を取直して撞木をつかみ、力まかせに一つ撞きしが力盡きて倒れ、また起き上つて撞かんとする時、上のかたより朝日嶽鶴之助は向う鉢卷、彈丸よけの疊の楯を持ちて走り出で、堂を見あげる。）

鶴之助。　おゝ、えらい、えらい。撞けずば私が代らうか。

お　鶴。　いや、いや、これはわたしの役……。

（お鶴は又ひとつ撞いてよろめく。上のかたより西軍の兵士ふたり出で、鶴之助に切つてかゝる。鶴之助は疊を楯にして防ぎながら再びかみのかたに入る。堂の上にてはお鶴がつゞけて鐘を撞く。小銃の音。）

（四）

飯盛山の中腹。所々に杉の立木。正面の上のかたに若松城、つゞいて城下の人家、いづれも火の手あがりて見ゆ。

（七之丞、千太郎、萬次郎、源之助、新七、雄三郎、八彌、彌四郎の八人は城をみおろして立つ。）

七之丞。　あれ、見られい。お城のあたりは一面の火となつた。

千太郎。　大手前の武家屋敷は云ふに及ばず。

源之助。　北の出丸も烟の中だ。

新　七。　敵は御城下に充滿して二重三重に取圍んでゐるわ。

雄三郎。　かやうに通路を塞がれては、とてもお城へは歸られまい。

八　彌。　われ〳〵がこれまで落ち延びたら、もう一度籠城の覺悟であつたが……。

彌四郎。　今となつてはもう遲い。

皆　々。　むゝ。遲い。

（土に坐して失望嘆息す。下のかたより坂路をのぼりて、白虎隊の柳井多門、早瀬虎吉、黒川元彦、中村健次、水上小一郎、大寺鐵之丞、都築八十次、安積武丸、廣田十作、檜原四郎、秋元助藏等十一人出づ。）

多　門。　おゝ、お城が燒くるは。

虎　吉。　もう歸らうにも歸られぬぞ。

元　彦。　斯うと知つたらこゝまで引返すのではなかつたに……。

健　次。　殘念なことを致したなう。

（皆々土に坐して顏をみあはせる。）

源之助。　烟に隱れてしかとは見えぬが、敵と炎とにつゝまれて、二百年來連綿たりし若松のお城ももう落つるか。

七之丞。　あの烟の中には殿樣もござる。

千太郎。をぢ様も居る。
新　七。父も居る。
雄三郎。母も居る。
八　彌。姉も居る。
彌四郎。弟も居る。
源之助。それを見ながら。
皆　々。歸られぬか。

（みな〳〵城を望みて泣く。鐘の聲近く聞こゆ。みな〳〵耳をかたむける。）

七之丞。（伸びあがる。）や、鐘が鳴つた。
千太郎。む、。あの鐘が聞ゆるからは、お城はまだ〳〵落ちぬと見ゆるぞ。

（皆々涙をながして喜ぶ。七之丞は夢のやうに聽き入る。）

源之助。さりとてこの小人數では敵を蹴散らしても歸られまい。
小一郎。なまじひ仕損じて、生捕の恥辱に逢ふも殘念。
鐵之丞。引返さうにも後は敵だ。

八十次。前も後も斷ち切られて、進むも退くも思ふにまかせぬ。
武　丸。せめて五六十人もあるならば、花々しい討死もならうものを、この人數ではそれも叶はぬ。
千太郎。こりや何としたものであらうな。
源之助。む、。（思案して。）弓矢八幡はわれ〳〵に歸るべき家を敎へた。
皆　々。歸るとは。
源之助。土に歸るのだ。
皆　々。お、、切腹か。

（口々に云ふ。これにて、七之丞は夢の醒めたるやうに見かへる。）

七之丞。お、、よう云はれた。七之丞もほかに思案はない。
千太郎。われ等も同意だ。この上はお城にむかつて、殿様にお暇乞ひを仕つらう。

（みな〳〵形をあらためて、城をのぞんで拜す。）

七之丞。あの鐘の知らせによつて、お城は無事と知るからは、われ〳〵死んで恨みはない。
萬次郎。嬉しいことでござりました。
源之助。一同笑うて死に就かうか。

（背負ひたる銃などをおろして、皆々切腹の支度をする。城下の煙いよ〳〵あがる。）

（五）

舞臺は元の龍の道具。辨天の祠の前、喇叭の音きこゆ。

（大川彦次郎、赭熊の白毛をかぶり、筒袖の三齋羽織にだん袋、大小、草鞋、遠眼鏡を持ち、つづいて刈屋彌之助、兵士大勢を引連れて出づ。）

彦次郎。　たうとうこゝまで攻め付けたが、さすがは會津ぢや。なか〳〵強情に遣るなう。

彌之助。　しかし斯う居縮みになりましては、もう二三日で落城でござりませう。

彦次郎。　いや、さう無造作には行くまい。うはべは鈍いやうにみえても、根氣の強いのが東北人の長所ぢや。あの城で根かぎり防がれたら、早くも先づ一月はかゝらうよ。會津は十月に雪が降るといへば、寒うならぬ中に埒を明けたいものぢや。この山へ登れば城は眼の下ぢやと聞いて居つたが、こゝは思ふやうでもないな。

彌之助。　まだこの上に高地がござります。

彦次郎。　おゝ、左樣か。

（上のかたの坂路よりお松は泣きながら駆り來る。）

彌之助。　こりや、待て、待て。

お松。　はい。

彌之助。　おまへの着物にはおびたゞしい血が着いてゐるな。この山の上に怪我人でも居るか。

お松。　怪我人どころではござりませぬ。十九人も行儀よく列んで腹を切つて……。

彦次郎。　なに、十九人も腹を切つて居る。して、それは會津の者か。

お松。　白虎隊の方々でござります。

彦次郎。　白虎隊とは、今朝來戸の口の軍に、よう働いた會津の若者どもぢやな。それ。（彌之助をみかへる。彌之助は心得て坂を登りゆく。）それがこの山で切腹したか。

お松。　お城へは戻られず、さりとて降參するのも逃げるのも忌ぢやと、お城の方へむかつて立派にお腹を……。（泣く。）

彦次郎。　おゝ、さうであつたか。惜い者を殺したなう。東北の諸大名、一旦は順逆の方向をあやまつたが、それには又よんどころない義理もある。意地もある。ましてその家來共になんの罪があらう。たゞ祖國の爲、主君のために、尊い命をさゝげたので、これが我國武士道の

花ぢや。その花にも似たる美少年か、一人ならず十九人、枕をならべて義に死するとは、いづこの國にも例のないことで、ひとり會津藩ばかりでない、わが日本國の誇であらうよ。

（彌之助は上のかたの坂を降りて出づ。）

彌之助。　見とゞけてまゐりました。

彦次郎。　それに相違ないか。見事なものぢやなう。

彌之助。　まことに敵ながら天晴の者でございます。

彦次郎。　いや、敵と云ひ、味方と云ふは一時のことぢや。われ〳〵も曾て賊と呼ばれたこともある。五年以前、われ〳〵は佐幕黨のために苛く苦められたが、五年後の今日となつては遂に最後の勝利者となつた。五年の月日はみじかいが、歴史は廻り燈籠のやうに移りかはつてゆく。われ〳〵も亦、人に勝利を奪はるゝ日がないとも限るまいよ。

（彦次郎は勝利の悲哀をおぼえて悵然嘆息す。水の音。）

幕

二枚絵草紙

大正八年十月作。

大正九年四月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割――介右衛門（尾上松助）市郎右衛門（澤村宗十郎）善次郎（守田勘彌）天滿屋德兵衛（松本幸四郎）天滿屋おかん（尾上梅幸）天滿屋お島（澤村宗之助）念佛の僧（尾上幸藏）など。

登場人物――百姓介右衛門。せがれ市郎右衛門。その弟善次郎。妹お吉。講中太郎兵衛、米作、彦十、仁助、源七。天滿屋の遊女お島。天滿屋の女房おかん。女中お花、お金。天滿屋德兵衛。毛馬屋七兵衛。駕籠屋長介。泥鰌屋の女房。水茶屋の娘。うどん屋の老爺。念佛の僧。ぞめきの男など。

上の巻

攝州長柄の在所。百姓介右衛門の家。茅葺の二重屋體にて、竹緣あり。二重のかみのかたに神棚を吊りて、榊と御酒德利とを供へたり。棚の下には低き地袋戸棚ありて、その戸棚の上にけ掛硯を置きたり。それにつゞきて暖簾の出入口などあり。下のかたは鼠壁にて、壁の前には爐を設け、爐のそばには茶盆と茶碗などあり。庭の下のかたには竹の木戸あり。木戸の外には榎の大樹ありて、うしろには冬がれたる長柄の堤遠くみゆ。

（寶永時代、十一月初旬の午後。幕あくと、すぐに竹本の淨瑠璃になる。）

淨〻こがれゆく。その名は云はじ名を問へば、父は長柄の田地持、市郎右衛門が弟、善次郎なれども惡性者、

（向うより市郎右衛門の弟善次郎、廿歳ばかりの若者。野良かせぎの姿にて頭巾をかぶり、天秤棒にて大根をかつぎて出づ。あとより揚屋の若い者七兵衛出づ。）

七兵衛。　もし、善様、善次郎様。

善次郎。　（振向く。）や、七兵衛か。

七兵衛。　いかにも毛馬屋の七兵衛、よもや見忘れはなされまい。

（善次郎は困つた顔をして門口へ來かゝるを、七兵衛は追つて來て、その天秤棒を掴んでひき戻せば、大根は轉げ落ちる。）

七兵衛。　え〻、おまへも譯のわるい。術によつたら待つまいものでも無けれども、けふ遣らう明日遣らうと、かりそめながら五百目あまりを五匁も埒あかず。それにゆうべも鄰までおいでなされ、こつちへは音づれ無し、あんまりな爲され樣。けふは親御樣へ直に申して、取つて來いと旦那が申付けさした。もし、斷りましたぞや。

淨〻入らんとするを引止めて。

善次郎。　こりや聞えぬ。日ごろの俺を知らぬかい。五百目や一貫目今でも遣るは合點なれど、おやぢの手前をあぢにして末長う出ようが爲、すこしの銀を延引した。そちが差配で二三日、これ何うぞたのむ。おゝ、いつやらの紙花も思ひのほかに遲なはり、面目ない。これも拂ひと一度に遣ろ。それ、今あらためてもう一度、ぱつと打ち直すわ。

淨〻捻ぢて出せし鼻紙の、白ごかしこそ笑止なれ。

（善次郎は鼻紙をさぐり出して紙花を遣る。七兵衛は澁々うけ取つて眺めてゐる。下のかたより駕籠屋の長介出づ。）

長　介。　おゝ、善次郎さま。

善次郎。　やあ、駕籠屋の長介。今ごろ何しに來た。

長　介。　なにしに來たとは聞えませぬ。わたしが請合の菱屋の花代、津の國屋の料理代、あはせて三百四十匁六分、さても〳〵せがまれまする。けふは是非にうけ取りませう。

善次郎。　と云うて、今こゝでは……。

長　介。　それがならずば親旦那へ御訴訟申すよりほかはござらぬ。

（長介は木戸をあけてつか〳〵と内へいれば、善次郎はあわてゝ追つて行き、無理に長介をひき戻さうとする。七兵衛もつゞいて入る。）

七兵衛。　成程やつぱり親御様におねがひ申した方がよさゝうな。

善次郎。　（いよ〳〵狼狽へる。）えゝ、なにを馬鹿な。待て、待て。

浄瑠璃　特てあつかうたる折柄に。

（善次郎は捨ぜりふにて二人を宥めてゐるところへ、下のかたより綿帽子にて顔をつゝみたる女房出づ。）

女房。　善次郎様、お宿でござりますか。

善次郎。　（又おどろく。）や、笹屋の女房か。貴様までが何しに來た。

女房。　えゝ、御人體ともおほえませぬ。これが揚屋とか船宿とか云ふことか。わづかの元手で商ひする泥鰌汁、一杯二杯が度かさなり、まだその上に燗酒まで……。

善次郎。　判つた、わかつた。堪へてくれ。多寡が泥鰌汁に燗酒の拂ひ、ふみ倒すやうな俺ではない。

（下のかたより水茶屋の娘、うどん賣の老爺出づ。）

娘。　おゝ、善次郎様、丁度よいところへ……。わたくしは道頓堀の水茶屋。

老爺。　わたくしは編笠島のうどん商賣。

善次郎。　えゝ、また來たか。

娘。　二月あまりのお拂ひを。

老爺。　すぐにお渡しくださりませ。

長介。　この様子では善次郎様のお請合もおぼつかない。

七兵衛。　やつぱり親御さまへ直々に……。

善次郎。　えゝ、おやぢにきこえて堪らうか。まあ、靜かに……しづかに……。

七兵衛。　そんならこゝでさつぱりと埒をあけてくださるか。

長介。　もし、善次郎様。

五人。　善次郎さま。

浄瑠璃　小突きまはされ責め立てられ、善次郎は胸を据ゑ。

善次郎。　（縁に腰をかける。）はて、さう〳〵しい奴等、待てといふに……。尤も掛けは負うたれども、節季でもあることか、けふに限つてこのやうにせがむのは……。むゝ、合點ぢや、合點ぢや。兄市郎右衛門のうつけ者、天滿屋のお島にがらりと打込み、親父の機嫌さん〳〵にて

半勘當の身となつた。それを聞いておれまでを氣遣ふとみえたが、兄とは格別、こんな金を譯惡うする男でない。親父に云ふなら云うて見や。一文にもなるまいが……。

五　人。　や。

善次郎。　(仕たり顔に。)日ごろから堅い一方の親父。貴樣達がいくら嘆いても口說いても、茶屋小屋の花代、飲食ひの勘定、素直に拂ふ相手と思ふか。それよりもおとなしく俺にあづけて置け。遲うてもこの月一ぱいには屹と濟まさう。いや、おれがかう云ふからは嘘はない。北南の長柄で男といはるゝこの善次郎をなんと見た。どうでも親父に訴訟して、おれを勘當させて腹癒るか、但しは辛抱して氣長に金取るか。

五　人。　さあ。

善次郎。　ふたつに一つぢや。思案せい。思案せい。

　　淨〻身をなげ出して云ひければ、掛乞共も顏みあはせ。

七兵衞。　なるほど然う聞けばそれも道理。

長　介。　こなたを勘當させたとて、根つから得のゆくことぢやござらぬ。

女　房。　そんならもう少し辛抱して、月末まで待つとしませうか。

善次郎。　貴樣達もさすがに智慧者ぢや。分別がついたら早う歸りや。

七兵衞。　そんなら屹と晦日までには……。

長　介。　善次郎樣。

五　人。　ようござりますか。

善次郎。　はて、くどい。さつきからも云ふ通り、長柄の善次郎を男と思へ。

女　房。　では、かならず間違ひなく……。

善次郎。　まだ云ふか。早く行け、行け。

　　淨〻一人ひとりに突き出して、門の戸ぴつしいやり。

善次郎。　長柄堤には晝でも狐が出る。油斷して化かさるゝな。

七兵衞。　その狐よりもこなさんに、どうやらこつちが化かされさうな。

　　淨〻眉に唾して歸りけり。善次郎はほつと息。

　　(五人は下のかたに去る。)

善次郎。　やれ、やれ、おそろしい目に逢うたぞ。この善次郎が富婁那の辯舌で、彼奴等も烟にまかれて歸つた。はゝゝゝゝゝ。

（笑ひながら表をみて俄に心づき、外に落ち散りたる大根を拾ひあつめる。奥の暖簾口より妹お吉出づ。）

お吉。兄さん。今戻りなさんしたか。

善次郎。おゝ、今戻つた。けふは朝から大根曳きで、これ見や、手も足も土だらけぢや。ときに親父様はなにしてぢや。

お吉。講中の衆があつまつて、奥でいつものお勤め最中。

善次郎。道理でこちの騒ぎもきこえぬ筈。

お吉。え。

善次郎。いや、こちは今のうちにこの大根を裏手の納屋にしまつて置かうか。

お吉。それがようござんせう。どうやら空も曇つて來ました。

善次郎。（空を見る。）又ひと時雨あらうも知れぬぞ。

淨〻妹の手前しをらしく、これ見よがしの稼ぎぶり、天秤かたげて行くあとへ、親介右衛門は六十餘り、頭につもるお霜月、講中の冥加錢、殘らずこゝに持ちあつまり、お勤め過ぐれば表に出で。

（善次郎は大根をかたげて、庭傳ひに上のかたに入る。お吉は縁の前にぬぎ捨てたる五足の草履を直してゐる。奥より父介右衛門、六十餘歳。つゞいて村の講中太郎兵衛、米作、彦十、仁助、源七の五人、いづれも珠數を持ちて出づ。）

介右衛。なう、講中の衆。ありがたいと思召せ。毎年のお霜月、かうして懈怠もなう上ぐること、自力ではかなはず、みな御恩德のおかげでござるぞ。

太郎兵。ほんに有難いことでござる。して、その御冥加錢は誰がとゞけて下さるであらうな。

介右衛。されば其事ぢや。去年の通りこの金を兄市郎右衛門に持たせ、京へ上してやる筈なれど、新地狂ひに身代をゆがめ、方々への借財ばかりか、堤の際の田地をも七百目の質に入れたとやら、かうした奴には一文も持たされず、弟めは一日も居らいでは年貢の埒あかず、いつそ私が自分で納めに上りませう。

米作。こなたが自身に上つてくだされば、これほど確なことはない。

彦十。大儀ながらさうしてくだされ。

仁助。頼みます。

源七。たのみます。

介右衛。　おゝ、わしが確かに頼まれました。就ては京へ納める報恩講の御冥加錢、白銀五百目、小判廿五兩、一歩銀四十切。（袱紗をあけて金銀をひろげる。）あらためて介右衛門がおあづかり申す。

介右衛。　淨〻數よみ揃へ懐中より、掛硯の鍵とり出し。みなの衆、娘も見ておけ。ありがたい御冥加錢はこゝへしつかりと仕舞つて置くぞよ。（介右衛門は起つて地袋棚の上の掛硯の抽斗をあけ、金銀を收めて再び錠をおろし、その鍵を鼻紙袋に入れる。下のかたより駕籠屋一人出づ。）

駕籠屋。　（門口にて）頼みませう。たのみます。

お　吉。　はい、はい。（門に出る。）どこからのお使でございます。

駕籠屋。　わたくしは蜆川の天滿屋から。

お　吉。　え、あの蜆川から……。

駕籠屋。　はい。天滿屋のお島様から頼まれて、市郎右衛門様のところへ急なお使にまゐりました。この文を進ぜてくださりませ。

お　吉。　はて、高い聲でそのやうなことを……。（父のかたを見かへる。）兄さまはゆうべからまだ戻られぬ。その文はわたしが預かつて届けませう。

駕籠屋。　では、お歸り次第にたのみます。（文を渡して去る。）

介右衛。　淨〻云ひ捨てゝこそ歸りけれ。介右衛門聞きつけて。

お　吉。　今のはなんぢや。

介右衛。　いえ、なんでもございませぬ。（緣に上る。）

お　吉。　なんでも無いとは、おのれ等までが一つになつて、親の眼の玉をぬき居るか。（お吉が隱さうとする文をねぢ取る。）さてこそ案の通りぢや。田地賣らせた女めが、市様まゐる、身よりとは、扨々あた舌たるい。皆の衆の手前も面目ござらぬ。

介右衛。　淨〻鼻紙袋に文ねぢ込み、ため息ついてぞ立ちゐたる。講中共も手持なく。

太郎兵。　いや男の子は何處も。それぢや。それでも兄御にひきかへて弟どのは律義一方で、ゆく〳〵はこゝの家の立派な跡取り、こなたも先づ安心といふものぢや。

米　作。　ほんにさうぢや。市郎右衛門どのが些とぐらゐ野良をかはかれても、善次郎殿といふ稼ぎ人の弟があれば、些とも苦勞はござるまい。

彦　十。　兎角どこの家にも兄弟粒揃ひといふは少いものぢや。

介右衛。　兄は野良者。弟は律義者、あんまり粒が揃はな過ぎて悲しうござる、恥しうござる。

仁　助。　はて、慾をいへば限りがない。こなたももう取る年ぢや、苦勞は身の毒。

源　七。　弟どのを頼りにして、氣樂に暮すが身の保養ぢや。

太郎兵。　そんなら介右衛門どの。

お　吉。　もうお歸りでございますか。

五　人。　大きにお邪魔をしました。

淨〻挨拶すれど返事さへ、泣き出しさうな空模樣、ふらぬ中にと歸りゆく。

（太郎兵衛等五人は早々に下のかたに去る。）

お　吉。　もし、父さん。やがてもう日も暮れまする。奥へ行つて炬燵にでも……。

介右衛。　ほんに風が寒うなつた。善次郎はどうしたぞ。

お　吉。　畑から大根をひいて來て、裏の納屋へしまひに行かれました。

介右衛。　おゝ、さうであつたか。かせぎ人の弟にひきかへて兄めの極道。これ、お吉。さつきの文はどこへ遣つた。

お　吉。　それはお前の鼻紙袋に……。

介右衛。　おゝ、さうであつた。（ふところより鼻紙袋かとり出す。）えゝ、こんなもの。見るさへも腹が立つ。（袋を疊の上になげ捨てる。）娘、來やれ。

淨〻打連れてこそ入りにけれ。善次郎は唯ひとり、ほかの事は耳にも入らず、わが一心をかけ硯の、銀に眼がくれ、氣を奪はれ。

（介右衛門とお吉とは奥に入る。かみのかたより善次郎は常の着物に着かへて草履を穿き、ぬき足して忍び出づ。）

淨〻忍び寄つて錠前を、押して見、ひいて見、ねぢて見て、奥をのぞき、表をうかゞひ、箱ぐるみ取つて持ちあぐれば、顫へてどうと打ち落し、我とおびえて飛び上り。

善次郎。　えゝ、なにがな工夫がありさうな。

淨〻やれ忝けなし。鍵の入りたる鼻紙袋、親父がわすれ置かれたり。引きほどきて鍵取り出し、まんまと明けたる硯箱。

（善次郎はそこに落ちたる鼻紙袋を取つて鍵をさぐり出し、掛硯の抽斗の錠をあけ、鍵は再び鼻紙袋に入れて棚の上に置き、ひきだしより二包みにしたる五百目の銀を出して懐中にねぢ込み、廿五兩の小判を頭巾に入れて頭にかぶり、殘る一歩銀を兩手に握る。）

浄〻折から奥にて妹の聲。

お吉。　もし、兄さん。

浄〻呼ばれてこなたはびつく敗亡、置きどころなき銀一歩、棚の上の御酒徳利へそつと押込む間もなく。

（善次郎は手に握りたる一歩銀の始末に困りて、うろたへながら四邊を見まはし、神酒徳利をおろして其中にざらりと押込む時、暖簾口よりお吉は顔を出して再び呼ぶ。）

お吉。　もし、兄さん。こゝにゐさんしたか。父さんが呼んでござんすぞ。

善次郎。　あい、あい。今行くぞよ。

浄〻とぐろく胸とぐらつく頭、一度に押さへて入りにけり。

（善次郎は頭の金と懐中の銀とを押さへながら、お吉と共に奥に入る。）

浄〻色里の、酒の匂ひと移り香の、きえぬ袂に濡れかゝる、時雨を厭ふあみ笠に、人目厭うてしよんぼりと、市郎右衛門はわが家の、門を入るさへ敷居高く、あたりに人もあらざれば、誰に首尾問ふよすがもなく。

（向うより市郎右衛門はあみ笠をかぶりて出で、あたりを窺ひて竊と内に入る。）

市郎右。　おゝ、寒うなつた。

浄〻寒さは寒し白湯ひとつと、そこらうろ〳〵見まはせど、生憎に爐の火は消えたり。

市郎右。　はて何がなと見あぐる神棚。

神棚には神酒がある。冷でも一つ頂いて。

浄〻胸のもやくや晴らさんと、押頂いて注ぎければ、ざら〳〵と音して落つる銀。市郎右衛門はぎよつとして。

（市郎右衛門は神棚の神酒徳利をおろし、爐のそばより茶碗を持ち來りて注ぐと一歩銀が落ちる。）

市郎右。　や、こりやどうぢや。酒のなかから一歩の銀が湧く。寶の泉か、ありがたい。三寶荒神の御利生か、世になき母のお授けか。

浄〻嬉しいやら怖いやら、分別には能はねど、今のわれには大事の寶。

（市郎右衛門はその銀を鼻紙につゝみて懐中し、再び神酒を押頂く。）

浄〻その寶が仇とも知らぬ闇こそ哀れなれ。善次郎はそろりと出で。

（市郎右衛門は茶碗の神酒をのむ。奥より善次郎出づ。）

善次郎。　やあ、兄者人。お歸りか。

市郎右。　お、、善次郎。おやぢ様は内にか。御機嫌はどうぢや。

善次郎。　いやもう御機嫌は散々。悪いところへ鯉川のどこやらから文が來て、それを親父様に見つけられ、それ、そこな鼻紙袋に入れて置かれた。

市郎左。　お、。（棚の上をのぞく。）

善次郎。　わしは親父さまのお使で、これから南の御堂へまゐる。推參な御意見なれど、お前が此頃のお身持では、内外の首尾の好うないは知れてある。今の中にその文を……。

市郎右。　お、。

（市郎右衛門は起ってその文を取りにゆく。その隙をみて、善次郎はそこにある神酒徳利を竊と取る。）

善次郎。　早く始末をして置きなされ。

浄〻徳利を袖に忍ばせて、兎つかは表へ走りゆく。

（善次郎はあわたゞしく草履を突つかけて出で、そっと徳利を振ってみながら下の方へ走り去る。）

浄〻かくとも知らぬ市郎右衛門、常々不和なる弟がよくぞ知らせて呉れたると、心もそぞろに鼻紙袋の紐を解かんとするところへ、父はうしろに立ちはだかり。

介右衛。（奥より出づ。）それをなにするぞ、市郎右衛門。

市郎右。　やあ、おやぢ様。

浄〻はつと驚き飛びしさり、差うつむいてぞゐたりける。介右衛門は赫とせき上げ。

介右衛。　おのれは天魔が魅つたか、佛罰が中つたか。餘の悪性は若い者、あるまいことでも無けれども、あれ見よ、掛硯の口があいてゐる。鍵を入れた鼻紙袋をあけようとして俺に見つけられ、仰天するは盗人な。

市郎右。　や。

介右衛。　身が銀ならば親の慈悲、沙汰無しにもして遣らうが、講中の衆が身の膏で御本山へたてまつる報恩講の御冥加錢、一文違うても詮議はかゝされぬ。善次郎はゐぬか。お吉、お吉。

（奥よりお吉出づ。）

お　吉。　兄さんは先刻どこやらへ出てゆかれました。

介右衛。　そんなら俺が自身に講中の衆をよんで來る。杖を持つておぢや。早く、早く。

お　吉。　講中の衆を呼んで來るとは……。

介右衛。　え、、なんでもよい。早く、杖を……。早くせぬか。

お　吉。　あい、あい。（奥に入る。）

介右衛。　市郎右衛門。おのれ一寸も動くまいぞ。いや、いや、おれが出て行つたあとで、おのれのやうな横道者、どこへ姿を隠さうも知れぬ。さうぢや、これから皆なを呼ぶとせう。（縁さきに出て呼ぶ。）講中の衆、組中の衆。

市郎右。　あ、もし。（秩に縋る。）

介右衛。　えゝ、邪魔するな。

浄〻寄るを突き遣り押退けて、老の一徹、聲張りあげ。

介右衛。　なう、皆の衆も來てくだされ。介右衛門の家に盗人が這入つたぞや。

市郎右。　これ、めつさうな。なんでわたくしが其のやうな。

介右衛。　放せ、放せ。おのれ、親の口に手をあてゝ、息の根とむる所存よな。

浄〻哮り立つてわが子の腕を、力まかせに引つ掴み、また突き退くればよろ〳〵、よろけ落ちたる庭先へ、講中の人々走せあつまり。

（介右衛門は哮り狂ひて、縋るわが子が庭に突き落す。下のかたより以前の太郎兵衛々先に、米作、彦十、仁助、源七出づ。）

太郎兵。　これ、これ、介右衛門どの。盗人が這入つたとは……。

米　作。　して、その盗人は。

五　人。　どうしました。

介右衛。　その盗人は……。（聲を曇らせる。）それ、そこにぢや。

五　人。　え。（市郎右衛門を見る。）

介右衛。　ぬすびとを捕へてみれば我子なり。介右衛門、いよ〳〵面目次第もござらぬ。おの〳〵の見る前で私があづかりの御冥加銭、屹とあらためねばなりませぬ。御迷惑ながら御立會くだされ。

浄〻掛硯の抽斗ひき明くれば、中は藻抜のから衣、うすき親子の縁なり。介右衛門は歯がみをなし。

介右衛。　おの〳〵も見られい。まだ半時とは立たぬ前に、たしかに入れて置いた白銀五百目と小判四十兩、ほかに銀一歩、影も形もあらばこそ。

五　人。　や。

彦　十。　そんなら親父殿の云ふ通り。

仁　助。　やつぱり盗人はそこにゐる。

源　七。　惣領のどら殿であつたのか。

市郎右。　あゝ、もし、なるほど些と仔細あつて鼻紙袋をあけたれど、金銀には決して手をさゝず。ぬすびとは屹と外にある筈、どなたも親父をお宥めなされて、あらためて御詮議をおねがひ申す。もし、親父様、天地も佛神も照覧あれ、市郎右衛門が身は潔白。なにとぞお心を鎮められて……。

介右衛。　えゝ、盗みする子を持つて、なんで心が鎮められうか。ぬすびと猛々しく身の潔白とはどの口で云ふことぞ。おのれ、證據を見せてくれう。

浄〻　飛びかゝつて胸倉つかみ、ふところを探せば銀一歩、これ見よと紙押し開き、わが子の額に磕と打ちつけ。

（介右衛門は庭に降りて、市郎右衛門のふところより以前の一歩銀をつかみ出し、その顔に打付ける。）

介右衛。　たとひ千兩萬兩でも銀惜いとは思はぬが、廢つたおれの名が惜い。今更云譯らしけれど、おの〳〵も聞いてくだされ。こいつは疾つくに殺す奴なれども、我々の實子でなく、大坂のさる人の四十二の二つ子を、産屋から貰ひうけて守り育て、その後に弟や妹も出來たれど、それには換へず可愛がり、育てるにしたがつて性悪く、勘當せんと思ひしことも五度三度にはかぎらねど、まことの生みの子でなければ、義理もあり不便も増して、けふまで助けて置いたるに、親のこゝろを子は知らず、現在わが家で盗みをする。罰あたりの不孝者。もう勘當ぢや、出てうせう。それにしても腹の立つ。お吉はなにしてゐるぞ、早く杖を持つて來ぬか。

お　吉。　あい、あい。

（お吉は杖を持ちて出づ。）

お　吉。　講中の衆が見えたからは、おまへの杖はもう要らぬ筈。

介右衛。　なんでもよいから俺に渡せ。（杖を奪ひ取る。）やい、市郎右衛門。兎やかう云ふも恥の恥、ちつとも早う立退き居れ。勘當すれば親と云ひ子といふも今日限りぢや。親子が名殘りの形見の杖、これが骨身にこたへたら、この後再び惡心起すな。慈悲の折檻、ようおぼえて置け。

浄〻　支ゆる娘を拂ひ退け、わが子をさん〳〵に打ち据うれば、杖は中よりぽつきと折る。

講中見かねて押隔て。

太郎兵。　さて〳〵介右衛門殿もあまりに手あらい折檻ぢや。

米　作。　勘當したらそれで濟む。

彦　十。　もうよいほどに勘辨さつしやれ。

仁　助。　こなたがいつまでもこゝにゐては悪い。

源　七。　娘御や、それ親父どのを……。

五　人。　奥へ、奥へ。

お　吉。　もし、父さん。皆の衆もあゝ云うてゐるほどに、お前はもう奥へ……。

介右衛。　おゝ、折檻濟んだらもう用はない。講中の衆には介右衛門が、田畑賣つても必ず御迷惑はかけませぬ。お詫は又かさねて……。

市郎右。　淨〳〵立派にいへど堰きあへぬ、涙かくして入りにける。市郎右衛門は地にしれ伏し、暫しは詞もなかりしが、やう〳〵に顔をあげ。

（介右衛門はお吉に扶けられて奥に入る。）

はじめて知つたる我身の素性、疾くに斯様とうけたまはらば、いかやうにも孝行の盡し様もあるべきに、生の親とのみ思ひつめ、あまえ過ぎて今までの身持放埒、罰あたりの不孝者とのお叱りも、つく〳〵思ひ當つたり。せめて次の世にも再び親子と生れかはり、今生の御恩を報じたさ。この杖の片折を……。

市郎右。　淨〳〵未來のかたみと押いたゞき。講中の方々にも御暇乞。掛硯の錠をあけて御冥加錢をぬすみし奴、大かたはそれと知つてゐれど、證據なければ是非もなし。何事もわが身の不運とあきらめて、勘當されてゆく市郎右衛門。たゞ此上は方々におたのみ申すは親のこと。孝行盡せと妹にも、なにとぞお傳へくださりませ。

淨〳〵云ふもこの世のいとま乞ひ、涙ながら、よそながら、見返りながら、行きながら、長柄の里の枯尾花、まねけど歸る由もなき、人のゆくへぞ……。

（市郎右衛門は講中の人々に一禮し、奥にむかひて手をあはせ、あみ笠をかゝへて門に出る。お吉は奥よりかけ出でゝ兄に取縋るを、市郎右衛門はしづかに振り切つて、わが家をみかへりながら花道にかゝり、思ひ切つて笠をかぶりてゆく。淨瑠璃の三重。時の鐘。）

――幕――

下の巻

（一）

蜆川、天満屋の店先。常足の二重屋體にて、正面に襖の出入口あり。門には天満屋と書きたる行燈をかけ、その傍には枯柳一本立ちたり。上のかたは二階にて障子を閉め、店よりのぼる階子段あり。店の前は往來のこゝろにて、上下に板塀を折りまはし、下のかたには灯の入りたる町家がつゞいて見ゆ。

（前幕とおなじ日の夜。店には燭臺をともし、女中お花、お金の二人が坐つてゐる。ぞめきの男二三人と夜泣うどんの荷をかつぎたる男とが擦れ違ひて通る。）

浄瑠璃色を賣る、なりはひなれば此里に、よき衣着たる商人も、まことを守る天満屋の、亭主は外より立歸り。

（向うより天満屋の亭主德兵衛は下男に提灯を持たせて出づ。）

德兵衛。　おゝ、大儀、大儀。裏口へ廻つて、さあの休みやれ。

下男。　あい、あい。（提灯を消して下のかたの奥に入る。）

お金。　旦那様、お歸りなされませ。

お花。　（内にあがる。）なんと云うても霜月ぢや。更けると寒さが身にこたへる。時に女子どもはみんな仕舞うたか。お島は今夜はどうしたぞ。

德兵衛。　島様は長柄の市様といふ、なじみのお客が近江屋まで見えましたので……。

お花。　むゝ。それで近江屋へ送つて行つたか。

德兵衛。　あい。さつきから出たまゝでまだ戻られませぬ。

お金。　浄瑠璃何心なく云ひければ、亭主は思案の眉をよせ。

德兵衛。　扨こそ扨こそ然うあらう。今宵丸屋のうたひ講に行つたれば、町の衆の話には、長柄の在所の市郎右衛門といふ人、報恩講の金をぬすんで親の勘當うけ、からだ一つで在所を追ひ拂はれたとやら。それもこつちのお島ゆゑぢやと、聞いてなにやら胸すぼまり、好きな謡も喉に詰まつた。若い人たちの無分別、なにかの間違ひで家の名の出るも迷惑。なんぼ商賣が商賣でも、客を倒すが見目でもない。花を賣らいでも大事ない。それ、早う呼びにやれ。

浄瑠璃いふ聲洩れて女房も、奥より兎つかは立出でて。

（奥より女房おかん出づ。）

おかん。　旦那殿。今戻らしやんしたか。奥で聞いてゐましたが、内のお島を近江屋へ送つて遣つたはわたしの不念、女子どもを叱つてくださんすな。今夜のお客が長柄の市様といふことは初めから承知の上なれど、ぬすみやら勘當やら、そんなことは夢にも知らず、知つたら何んで遣りませう。これ、お花。おまへはお島と仲好しぢや。近江屋へはよいやうに譯云うてお島をだまして連れて歸りや。ひよつとした間違ひで、お島市郎右衛門と淨瑠璃に唄はれたら、お前たちも係り合、どんな人形に使はれうも知れまい。

お　花。　おゝ、忌なこと、忌なこと。

お　金。　そんならお前一と走り。

徳兵衛。　途中か、逃さぬやうに氣をつけて連れて來いよ。

お　花。　あい、あい。

（お花はあわてゝ下のかたへ走り去る。）

淨〻かゝるところへ善次郎、おのれが罪を兄に塗りつけ、掠め取つたる金銀を、肌にしつかと溫め鳥、塒たづねて來りける。

（上のかたより善次郎に頭巾を深くして出で、天滿屋の店を覗きて行きかゝるを、徳兵衛は見つける。）

徳兵衛。　もし、もし、そこへ行かれるは長柄の市郎右衛門様の弟御ではござりませぬか。

善次郎。　おゝ、天滿屋の御亭主か。

徳兵衛。　やつぱり私の眼は違はぬ。まあ、まあ、これへおかけなされませ。

おかん。　（お金に。）これ、お蒲團を持つて來や。

お　金。　あい、あい。（奥に入る。）

善次郎。　いや、もう、構うてくださるな。

おかん。　はて、お前はなにをそは〳〵。まあ、お掛けなされませぬか。

（善次郎は迷惑さうに腰をかける。）

徳兵衛。　早速ながら善次郎様。おまへは兄御の居所を探しに出られたのではござりませぬか。

善次郎。　いや、なに、そんな譯でもござらぬ。

徳兵衛。　異なことをおたづね申すやうなれど、兄御の市郎右衛門様はお宿の首尾を損ねたさうな。